

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第628集

こ ば や し し げ な が  
**小林繁長遺跡発掘調査報告書**

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

2014

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室  
(公財)岩手県文化振興事業団

# 小林繁長遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、県営体育根基整備事業に関連して、平成24年度に発掘調査を実施した小林繁長遺跡の成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代中期の集落跡、旧河道が確認され、往時の様々な環境を考える上での貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局農政部農村整備室、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成26年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 池田克典

## 例　　言

1. 本報告書は、奥州市前沢区白山地内に所在する小林繁長遺跡の調査成果を収録したものである。
2. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。  
小林繁長遺跡　　遺跡番号：NE47-1046　　遺跡略号：KBSN-12
3. 調査は、経営育成基盤整備事業に伴う緊急発掘調査である。県南広域振興局農政部農村整備室と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。  
なお、費用負担は、岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。
4. 発掘対象面積、調査期間、調査担当者は以下の通りである。  
面　積：5,800m<sup>2</sup>（内確認調査区1,200m<sup>2</sup>）　期　間：平成24年7月16日～10月9日  
担当者：主任文化財専門員 星 雅之　文化財専門員 村木 敬  
期限付調査員 藤本玲子 佐藤奈津季
5. 室内整理期間、整理担当者は以下の通りである。  
平成24年10月1日～平成25年3月31日 担当者：村木 敬 佐藤奈津季
6. 本報告書は、第1章は県南広域振興局農政部農村整備室に依頼している。
7. 各種鑑定・分析は次の外部機関に依頼した。  
石材鑑定：花崗岩研究会  
黒曜石産地同定：明治大学文化財研究施設運営委員会  
年代測定：(株) 加速器分析研究所  
テフラ同定：(株) 火山灰考古学研究所
8. 基準杭は、(株) 東北プランニングに委託している。
9. 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った（順不同、敬称略）。  
及川真紀、佐藤良和、菅 常久、千葉正彦、永嶋 豊、茅野嘉雄 藤原秀樹、井上雅孝
10. 野外調査では奥州市前沢区の方々にご協力いただいた。
11. 本遺跡の調査成果は、現地公開などで公表しているが、本報告書の内容はそのいづれよりも優先される。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 凡　　例

1 本書における遺構図の凡例は、以下のとおりである。

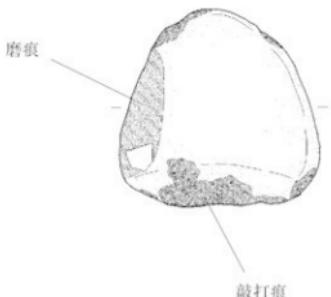
- (1) 方位 遺構図・地形図の方位は国土座標に基づく座標北を示す。
- (2) 土層 基本土層はローマ数字、遺構内の堆積土は算用数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。土色の観察には「新版標準土色帖」2000年版を使用した。
- (3) 標高 海抜標高を示す。
- (4) 縮尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (5) 破線 遺構平面図では、短破線「—」は推定線・挟り込み線を表している。それ以外の破線は、各挿図中に示した。

2 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮尺 縮小率は遺物の大きさと性格により適宜決定し、スケールの右に示した。
- (2) 遺物番号 通し番号を付した。
- (3) 法量 遺物の法量については、観察表に表記した。推定値は( )、残存値は<>内に示した。

3 本書で使用した略号

- (1) 遺構略号 遺構略号は奈良国立文化財研究所などで使用しているものを採用した。以下のとおりである。  
　　縦穴住居跡→S I、土坑類→S K、焼土→S N、埋設土器→S R、集石→S U
- (2) 遺構図への遺物略号 土器はP、炉石などの礫はSと表記した。



## 目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の概要	2
1 遺跡の位置・立地	2
2 地理的環境	2
3 周辺の遺跡	5
III 野外調査と室内整理の方法	11
1 野外調査	11
2 室内整理	11
IV 検出遺構	12
1 基本層序・旧河道	12
2 堅穴住居跡	14
3 土坑	15
4 焼土	19
5 埋設土器	19
6 集石	20
7 柱穴状土坑	20
V 出土遺物	38
1 縄文土器・弥生土器	38
2 土師器	41
3 陶器	41
4 土製品	41
5 石器	42
VI 自然科学分析	75
1 黒曜石产地推定	76
2 放射性炭素年代測定(AMS測定)	80
3 テフラ同定分析	84

VII 総 括	89
1 遺 構	89
2 遺 物	89
3 縄文晩期後葉～弥生前期深鉢形土器の若干の考察	91
4 旧河道について	94
5 分析結果から	95
6 ま と め	96
報告書抄録	131

## 図版目次

第1図 遺跡位置図	3	第24図 出土土器（4）	47
第2図 遺跡周辺の標高と水系	4	第25図 出土土器（5）	48
第3図 周辺の遺跡	8	第26図 出土土器（6）	49
第4図 調査区位置図	21	第27図 出土土器（7）	50
第5図 旧河道流路推定図	22	第28図 出土土器（8）	51
第6図 旧河道2号断面図	23	第29図 出土土器（9）	52
第7図 遺構配置図（1）	24	第30図 出土土器（10）	53
第8図 遺構配置図（2）	25	第31図 出土土器（11）	54
第9図 遺構配置図（3）	26	第32図 出土土器（12）	55
第10図 遺構配置図（4）	27	第33図 出土土器（13）・土師器・陶器	56
第11図 遺構配置図（5）	28	第34図 出土土製品	57
第12図 SI01堅穴住居跡	29	第35図 出土石器（1）	58
第13図 SI02・03堅穴住居跡	30	第36図 出土石器（2）	59
第14図 SI03・04堅穴住居跡	31	第37図 出土石器（3）	60
第15図 SK01・02・05～07土坑	32	第38図 出土石器（4）	61
第16図 SK09～13土坑	33	第39図 出土石器（5）	62
第17図 SK14～18土坑	34	第40図 出土石器（6）	63
第18図 SK19～21土坑	35	第41図 出土石器（7）	64
第19図 SK22～24土坑、SN01焼土	36	第42図 出土石器（8）	65
第20図 SN02・05焼土、SR01埋設土器、SU01集石	37	第43図 出土石器（9）	66
第21図 出土土器（1）	44	第44図 縄文晩期後葉～弥生前期土器集成図（1）	91
第22図 出土土器（2）	45	第45図 縄文晩期後葉～弥生前期土器集成図（2）	92
第23図 出土土器（3）	46		

## 表 目 次

第1表 周囲の遺跡（1）	9	第8表 土器観察表（5）	71
第2表 周囲の遺跡（2）	10	第9表 土製品観察表	72
第3表 石器組成表	43	第10表 陶磁器観察表	72
第4表 土器観察表（1）	67	第11表 石器観察表（1）	73
第5表 土器観察表（2）	68	第12表 石器観察表（2）	74
第6表 土器観察表（3）	69	第13表 繩文晩期後葉～弥生前期土器法量値・相関値 の平均	94
第7表 土器観察表（4）	70		

## 写真図版目次

写真図版1 遺跡全景	100	写真図版17 SU01集石・作業風景	116
写真図版2 遺跡全景・遠景	101	写真図版18 遺物1	117
写真図版3 遺跡遠景	102	写真図版19 遺物2	118
写真図版4 基本順序・旧河道	103	写真図版20 遺物3	119
写真図版5 SI01堅穴住居跡（1）	104	写真図版21 遺物4	120
写真図版6 SI01堅穴住居跡（2）	105	写真図版22 遺物5	121
写真図版7 SI02堅穴住居跡	106	写真図版23 遺物6	122
写真図版8 SI03堅穴住居跡（1）	107	写真図版24 遺物7	123
写真図版9 SI03堅穴住居跡（2）	108	写真図版25 遺物8	124
写真図版10 SI04堅穴住居跡	109	写真図版26 遺物9	125
写真図版11 SK01～02・05～07土坑	110	写真図版27 遺物10	126
写真図版12 SK09～13土坑	111	写真図版28 遺物11	127
写真図版13 SK13～17土坑	112	写真図版29 遺物12	128
写真図版14 SK17～21土坑	113	写真図版30 遺物13	129
写真図版15 SK22～24土坑	114	写真図版31 遺物14	130
写真図版16 SN01～02・05焼土・SR01埋設土器	115		

## I 調査に至る経過

小林繁長遺跡は、「経営体育成基盤整備事業白山地区」のほ場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は奥州市前沢区の中心部より北東4km程に位置し、現況は小区画・不整形な水田で、なおかつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。このため、本事業地区においては、大区画は場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、一部が平成19年度から平成20年度にかけて既に発掘調査済となっているため、今回は残りの部分に係る調査である。

今回の調査範囲については、県南広域振興局農政部農村整備室から平成21年10月7日付県南広農整第137-4号「経営体育成基盤整備事業白山地区に係る埋蔵文化財の試掘調査（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成21年11月16日から平成21年12月3日にかけてそれぞれ試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成22年1月15日付教生第1268号「経営体育成基盤整備事業白山地区予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答を行った。

その結果を踏まえ、当農村整備室は岩手県教育委員会と平成22年2月5日県南広農整第137-12号、平成24年5月31日県南広農整第155-1号でそれぞれ工法に係る協議、調整を行い、平成22年3月3日教生第1495号、平成24年6月1日教生第330号で回答を受けて平成24年6月21日付で公益財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(県南広域振興局 農政部 農村整備室)

## II 遺跡の概要

### 1 遺跡の位置・立地

小林繁長遺跡は、奥州市前沢区白山に所在しており、奥州市前沢総合支所から北東へ約4.0km、JR陸中折居駅から南東約3.0kmに位置し、白山小学校の周辺に広がり、標高約28m前後の河岸段丘上に立地している。本遺跡は過去にも埋文センターや町教委により調査が行われているが、これらは全て今回の調査地より上位の段丘面の調査で（岩手埋文2009・2010、前沢町教育委員会1998）、今回の調査地は町道を挟んで下位の段丘面（標高にして3～5m低い）に相当する。現況は水田である。なお、遺跡範囲について、周知の遺跡範囲東側は今回の調査で③・⑤・⑦区とした区域までとなっていたが、今回の調査成果からの知見として遺跡範囲の東側はさらに延びることが確実である。

遺跡の位置は、北緯39度4分12秒、東経141度9分48秒にあり、国土地理院発行の地形図1/25,000「前沢」(NJ-54-14-14-2) の図幅に含まれる。

### 2 地理的環境

ここでは遺跡内に限定して地理的環境をまとめていく。なお、周辺を含めた地形や地質についての詳細は、刊行された報告書（岩手埋文2009・2010）を参照頂きたい。

遺跡は上述したように段丘面が上下2面（1・2面）形成されている。さらに南側は下位の段丘面（2面）より僅かに高い面（3面）が広がっている。現況において遺跡周辺の地形は、この中央部分である下位の段丘面が窪む地形を呈している。この2面では2条の旧河道を確認できており、これらとⅢ層である砂質シルト層との堆積状況により新旧関係を確認できている。このように本遺跡が形成されている地形は、河川の影響を強く受け形成されていることが明らかとなっている。ここでは2条の河道とⅢ層の形成要因について、第2・5図を参考しながら検討してみたい。

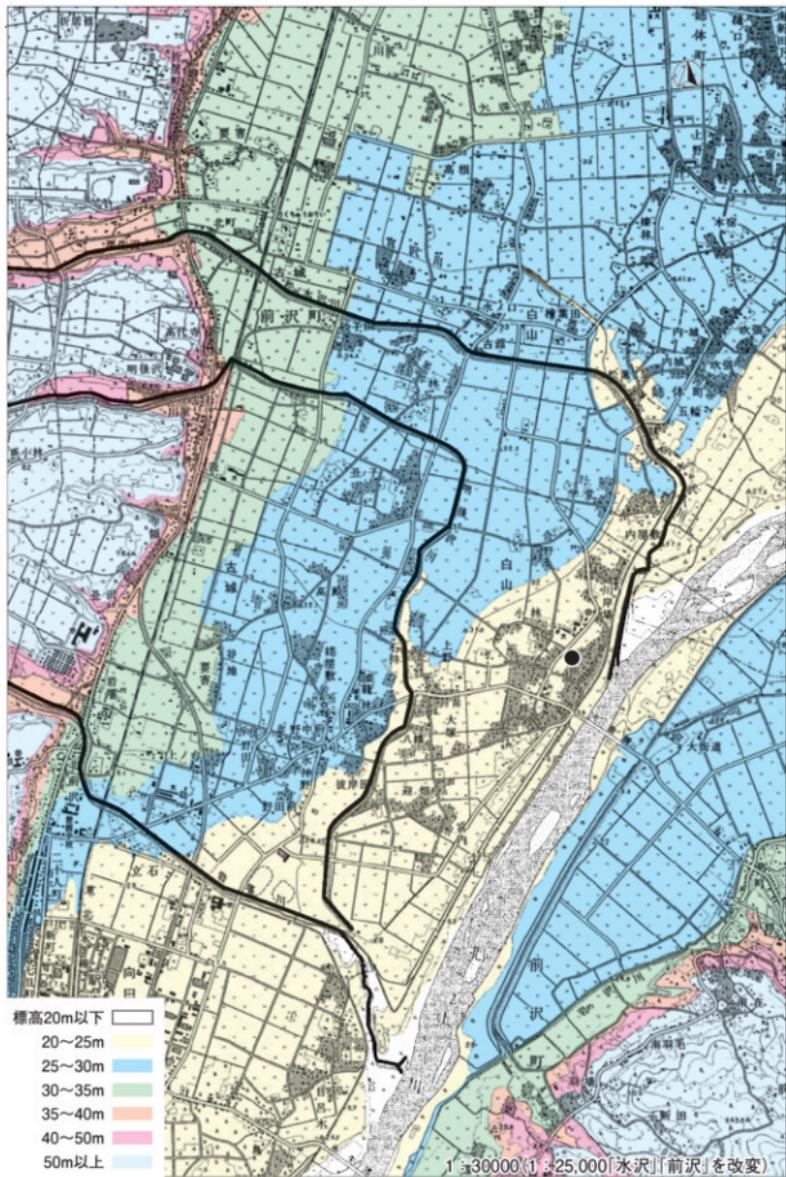
まず、2条の河道は、幅は10～15m前後の小規模のものである。このような規模から北上川本流による影響と捉えるよりは、その支流と捉えた方が蓋然性は高いと思われる。その支流には松の木沢川と明後沢川があるが、現況では大きく改変されているため判然としないものの、現在の位置関係から見ていくのであれば松の木沢川の可能性がある。この両者は時間差を伴っており、旧河道1号は平安時代以前、旧河道2号は十和田中振火山灰が降下した前後から縄文時代晩期頃まで流れていたと考えられる。

次に、Ⅲ層は調査区の東側の比較的広範囲に堆積しているもので、シルト質の洪水堆積層である可能性がある。このⅢ層の堆積要因であるが、その堆積した範囲と層厚から判断すると、堆積時期は不明だが、北上川の氾濫に伴うと考えた方が蓋然性は高いものと思われる。

このようななかで両河川とⅢ層の堆積関係は、調査区である2面が北上川の氾濫に伴い堆積した土砂（Ⅲ層）に覆われていることから、旧河道2号→Ⅲ層→旧河道1号の順に形成されたと考えられる。つまり、当時の当該区域は流路が流れやすい環境にあったと言うことができる。このことを出土遺物の時期と組み合わせて見ていくと、縄文時代前期以降晩期や弥生時代前期までは旧河道2号が形成されている。この間には、1面と3面、河道が形成されない2面において各時期の遺構が形成されている。そして、弥生時代以降から十和田aテフラが降下までの間に2・3面がⅢ層により覆われていることから、この時期に大規模な北上川の氾濫が想定される。それ以降、旧河道1号が形成され、さら



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の標高と水系

に現況へと近づくように地形が発達したものと思われる。

### 3 周辺の遺跡

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課で作成した「岩手の遺跡」（平成23年3月31日）によると、奥州市には1,103箇所の遺跡が登録されている。その内、前沢区（旧前沢町）には150箇所の遺跡が登録されている。

さて、第3図及び第1～2表は、両遺跡のある前沢区古城地区を中心に南北約12km、東西約8kmに所在する286遺跡を収録し、その分布を示した。ここでは、前沢区に所在する遺跡について時代毎に概要を述べるが、調査歴のある遺跡を中心に取り上げることとする。

＜旧石器時代＞前沢区内にある旧石器時代の遺跡は、生母宿、長根、鶴ノ木、水尻、中畠城跡の5箇所ある。水尻遺跡の報告によれば、同遺跡や鶴ノ木遺跡出土の石器群は後期旧石器時代前半期のもので、これらの石器群の年代はATテフラ降下以前と推定されている。中畠城跡から出土している石器群についても、同様にATテフラ降下前後の可能性がある。

＜縄文時代＞縄文時代の遺跡は多く、今回作成した図幅の中にも71箇所が所在する。代表的なものとしては、草創期と推定される有舌尖頭器が出土した六本松遺跡、大木6式期を中心とする田高Ⅱ遺跡、大木7a～大木8b式期の小林繁長遺跡、後期初頭門前式土器が纏まって出土した西館跡、後～晩期の川岸場I・II遺跡、白山上野遺跡などが挙げられる。

＜弥生時代＞弥生時代の遺跡としては、高日向、古城方八丁、川岸場I・II・白山上野、小林繁長、荒谷、鶴ノ木遺跡、白鳥館跡などで土器が出土している。特に縄文晚期後葉～弥生前期の時期幅で捉えられる土器は、川岸場I・II遺跡や白山上野遺跡で多量に出土している。

＜古代＞図幅中には170箇所あり、広く分布している。そのほとんどが平安時代の遺跡で、奈良時代は少ない。その内前沢区内の主な遺跡としては、明後沢、道上、四反田I・II、水尻、古城方八丁、彼岸田遺跡が挙げられる。昭和38年に県指定史跡に登録された明後沢遺跡は本遺跡から西へ約2kmに所在する。道上遺跡では杭列の構成材から「禁制」木簡が出土しており、国内でも珍しく、貴重な資料を提供した。古城方八丁遺跡からは石帶が1点出土している。

＜奥州藤原氏時代＞奥州藤原氏と同時期の12世紀の遺構・遺物が発見される遺跡は、近年急増中である。知見の範囲で記述すると、白鳥館、寺の上経塚、中畠城跡、五輪経塚、水尻、明後沢、道上・大桜・八反町、古城林、古城方八町、田高Ⅱ・安久沢東、彼岸田、川前、白山上野遺跡などがある。

＜中世＞中世城館は、六日入城、中畠城、前沢城、東館、西館、栗ヶ島、上木、川前遺跡などが挙げられる。松の木沢川を挟んで古城林遺跡の向かいには、六日入城跡が所在する。

＜近世＞徳沢一里塚をはじめ、古城林遺跡から約2キロ内には安久沢東・高殿Ⅱ・合野・川岸場II遺跡がある。川岸場II遺跡は、近世伊達藩の御蔵場跡・通称「大室屋敷」と呼ばれる環濠屋敷跡であり、近世陶磁器が多く出土している。隣接する川岸場I遺跡からも、「六日入御本石御藏」跡から前沢方面へと向かう道路遺構が確認されている。安久沢東遺跡では、近世墓や古錢が出土している。

## 参考文献

- 大上和良・吉田充：1984「北上川中流域、胆沢層状地における火山灰層序」『岩手大学工学部研究報告』第37巻
- 岩手県奥州市：2010『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査報告書－第8次調査－』
- 岩手県教育委員会：1965『明後沢古瓦出土遺跡』
- 岩手県教育委員会：1980『東北縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－V－』岩手県文化財調査報告書第54集
- 岩手県教育委員会：1981『東北縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－VI－（一関地区 東裏遺跡）』岩手県文化財調査報告書第55集
- 岩手県教育委員会：1993『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成4年度）』岩手県文化財調査報告書第93集
- 岩手県教育委員会：1994『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成5年度）』岩手県文化財調査報告書第95集
- 岩手県教育委員会：1995『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成6年度）』岩手県文化財調査報告書第97集
- 岩手県教育委員会：1996『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成7年度）』岩手県文化財調査報告書第98集
- 岩手県教育委員会：1997『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成8年度）』岩手県文化財調査報告書第99集
- 岩手県教育委員会：1998『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成9年度）』岩手県文化財調査報告書第103集
- 岩手県教育委員会：1999『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成10年度）』岩手県文化財調査報告書第105集
- 岩手県教育委員会：2001『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成12年度）』岩手県文化財調査報告書第112集
- 岩手県教育委員会：2002『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成13年度）』岩手県文化財調査報告書第114集
- 岩手県教育委員会：2003『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成14年度）』岩手県文化財調査報告書第116集
- 岩手県教育委員会：2005『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成15年度）』岩手県文化財調査報告書第119集
- 岩手県教育委員会：2006『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成16年度）』岩手県文化財調査報告書第120集
- 岩手県教育委員会：2007『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成17年度）』岩手県文化財調査報告書第124集
- 岩手県教育委員会：2008『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成18年度）』岩手県文化財調査報告書第126集
- 岩手県教育委員会：2009『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成19年度）』岩手県文化財調査報告書第128集
- 岩手県教育委員会：2011『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成21年度）』岩手県文化財調査報告書第132集
- 岩手県立博物館：2006『岩手県立博物館調査研究報告書第21冊「衣川流域における古代末期遺跡調査報告書-長者ヶ原廃寺跡第3次・第5次・第7次発掘調査報告書-』』
- 衣川村教育委員会：1974『衣川渡船場跡－岩手県胆沢郡衣川村所在－』
- 奥州市教育委員会：2006『川前道路第2次発掘調査報告書』奥州市文化財調査報告書
- (財) 奥州市文化振興財团奥州市埋蔵文化財調査センター：2009『安久沢東遺跡』奥州市埋蔵文化財調査報告書第7集
- (財) 奥州市文化振興財团奥州市埋蔵文化財調査センター：2011『合野遺跡・白山上野遺跡』奥州市埋蔵文化財調査報告書第11集
- (財) 水沢市文化振興財團埋蔵文化財調査センター：2006『林前II遺跡・寺ノ西道路』水沢市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 高橋佐知子：1994『岩手県胆沢郡前沢町六本松遺跡出土の局部磨製石斧と有舌尖頭器』『岩手考古学』第6号 岩手考古学会
- 日本考古学協会：1974日本考古学年報25『上野団地遺跡』
- 平泉町教育委員会：1994『平泉遺跡群発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第40集
- 平泉町教育委員会：1999『平泉遺跡群発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第73集
- 平泉町教育委員会：2005『平泉遺跡群発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第92集
- 法政大学文学部考古学研究室：1996『法政大学所蔵伊藤鉄夫・陽夫考古学資料目録II -伊藤鉄夫収集資料編-』
- 前沢町教育委員会：1998『町内遺跡詳細分布調査報告書I』
- 前沢町教育委員会：1999『町内遺跡詳細分布調査報告書II』
- 前沢町教育委員会：2000『町内遺跡詳細分布調査報告書III』
- 前沢町教育委員会：1998『町内遺跡発掘調査報告書』
- 前沢町教育委員会：1999『町内遺跡発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第7集
- 前沢町教育委員会：1999『西館遺跡発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第9集
- 前沢町教育委員会：2000『生母宿遺跡発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第12集
- 前沢町教育委員会：2002『川岸場II遺跡発掘調査報告書・大室鈴木家墓地調査報告書』前沢町文化財調査報告書第13集
- 前沢町教育委員会：2003『東館（赤生津城）遺跡発掘調査報告書・五合田遺跡発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第14集

- 前沢町教育委員会：2004『田高Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第15集
- 前沢町教育委員会：2005『古城上野遺跡第1次発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第17集
- 前沢町教育委員会：2005『明後沢遺跡群第7・10・15次発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第18集
- 前沢町教育委員会：2005『白鳥館遺跡発掘調査報告書－第2次・第3次調査－』前沢町文化財調査報告書第19集
- 水沢市教育委員会：1997『水沢遺跡群範囲確認調査－平成8年度発掘調査概報－』水沢市文化財報告書第31
- 水沢市教育委員会：1999『水沢遺跡群範囲確認調査－平成10年度発掘調査概報－』水沢市文化財報告書第33
- 水沢市教育委員会：2001岩手県水沢市文化財報告書第35『水沢遺跡群範囲確認調査－平成12年度発掘調査概報－』

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発刊報告書】※岩手埋文と略称

岩手埋文1996：「龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書」第243集

岩手埋文：1997『瀬原Ⅰ遺跡第2・3次発掘調査報告書』第257集

岩手埋文：1998『北野Ⅳ遺跡発掘調査報告書』第272集

岩手埋文：1999『北野Ⅳ遺跡発掘調査報告書』第298集

岩手埋文：2000『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第317集

岩手埋文：2000『西館跡発掘調査報告書』第329集

岩手埋文：2000『水ノ口遺跡発掘調査報告書』第330集

岩手埋文：2002『漆林Ⅱ遺跡・本宿迎烟遺跡発掘調査報告書』第381集

岩手埋文：2002『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成13年度）』第397集

岩手埋文：2003『明後沢遺跡群発掘調査報告書』第411集

岩手埋文：2004『寺ノ上遺跡発掘調査報告書』第445集

岩手埋文：2005『平成16年度発掘調査報告書』第469集

岩手埋文：2006『平成17年度発掘調査報告書』第490集

岩手埋文：2008『瀬原Ⅰ遺跡第5次・瀬原Ⅱ遺跡第9次発掘調査報告書』第507集

岩手埋文：2008『平成19年度発掘調査報告書』第524集

岩手埋文：2009『鶴ノ木遺跡発掘調査報告書』第527集

岩手埋文：2009『道上遺跡第3次・台野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書』第544集

岩手埋文：2010『合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書』第570集

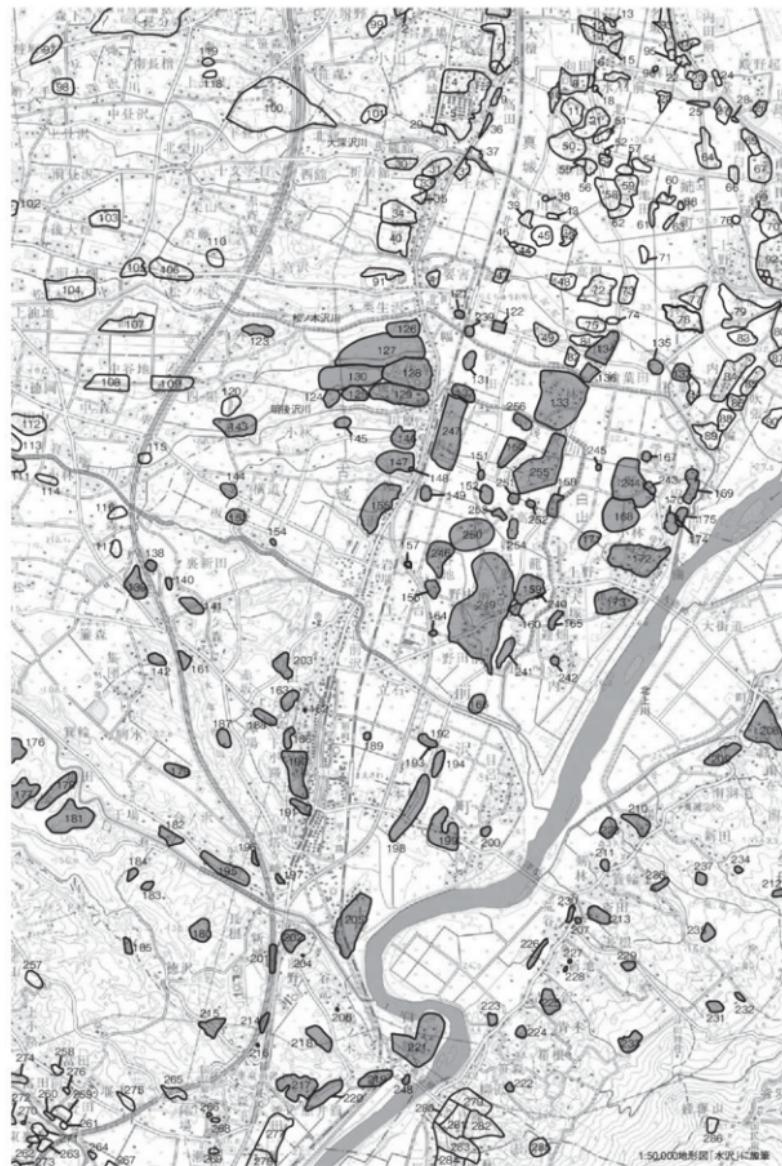
岩手埋文：2010『平成21年度発掘調査報告書』第571集

岩手埋文：2011『水尻遺跡・四反田Ⅰ遺跡・四反田Ⅱ遺跡・古城方八丁遺跡発掘調査報告書』第587集

岩手埋文：2011『平成22年度発掘調査報告書』第588集

岩手埋文：2013『八反町遺跡・中畑跡発掘調査報告書』第610集

岩手埋文：2013『安久沢東遺跡発掘調査報告書』第611集



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡（1）

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	見分森	生産跡	平安	73	南下田	散布地	平安
2	龍ヶ馬場	車輪跡	車軌文・古代	74	高根Ⅱ	散布地	古代
3	頃江	集落跡	平安	75	高根Ⅲ	散布地	古代
4	雲神Ⅰ	集落跡	平安	76	原塚	散布地	平安
5	真城ガ丘園地	集落跡	中世	77	赤井1	散布地	磯文？・古代
6	堤尻原(堤尻沢跡)	城郭跡	中世	78	赤井2	車軸跡・集落跡	車軌文・古代
7	大堤	集落跡	平安	79	木舟遺跡	車軸跡・集落跡	車軌文・平安
8	北野古	集落跡	磯文や平安	80	網本	散布地	弥生
9	高田	集落跡	平安	81	堂日1	散布地	古代
10	金田Ⅰ	集落跡	平安	82	堂日Ⅱ	散布地	古代
11	北野Ⅱ	散在地	車軌文・弥生・平安	83	延徳	散布地・跡跡？	平安？
12	林前1	集落跡	平安・中世	84	内山吹張	散布地	磯文～平安？
13	林前源	城郭跡	中世	85	久坂	散布地	平安
14	林前前前	城郭跡	磯文・平安	86	久坂朝日	散布地	平安
15	林前Ⅱ	車輪跡	平安・中近世	87	庚申塚	散布地	平安
16	向田	散在地	平安	88	南塚	散布地	古代
17	木の口1	散在地	平安	89	五輪	散布地	磯文
18	北野Ⅲ	散在地	平安	90	小谷下	散布地	古代
19	大内山前	散在地	平安	91	折居原	城郭跡	中世
20	水口口前東	散在地	平安	92	宿	車輪跡	車軌文・近世
21	北野Ⅳ	集落跡	平安	93	寺ノ西	車輪跡・村場	平安・磯文
22	寺西南	散在地	平安	94	内山野中	散布地	磯文～平安
23	袖体草堂Ⅱ	散在地	平安	95	上野佐原(籠)	城郭跡	中世
24	袖体草堂Ⅲ	散布地	平安	96	小木ノ口	散布地	平安
25	元大堤Ⅰ	散在地	磯文	97	舞子	散布地	磯文・古代
26	上島	散在地	平安	98	南野の手	散在地	磯文
27	元天神前Ⅲ	散在地	平安	99	折居森	散布地	磯文・中世
28	北白山1	散在地	平安	100	中島	散布地	車軌文中期・後期
29	浜田	散在地	磯文・平安	101	南野森	散布地	磯文
30	馬籠原	城郭跡	中世	102	井	散布地	磯文
31	中林A	集落跡	平安	103	小山方八丁廻	城郭跡	中世・近世
32	中林B	集落跡	平安	104	大畠	散布地	磯文
33	中林C	集落跡	平安	105	後之堀	散布地	磯文
34	堤ヶ沢Ⅱ	集落跡	平安	106	船戸	散布地	磯文
35	中林E	散在地	平安	107	油池	散布地	磯文・古代
36	堤尾下	散在地	中世	108	中野1	散布地	平安
37	上林下	散在地	古代	109	四ノ屋	散布地	平安
38	真城融合	散在地	平安	110	僧山	散布地	磯文・古代
39	土手北	散在地	平安	111	舞音	散布地	磯文
40	堤ヶ沢Ⅰ	集落跡	平安	112	田中	散布地	磯文・古代
41	要否	城郭跡	中・近世	113	佐布	散布地	磯文
42	二ノ岡北	散在地	平安	114	大篠	散布地	中世以降？
43	上手南	散在地	平安	115	中の森	城郭跡	近世
44	谷地原	散在地	平安	116	板戸沢	車軸跡開闢？	近世
45	二ノ瀬	散在地	平安・中世	117	小山田原	散布地	平安
46	二ノ瀬南	散在地	平安	118	森日	散布地	平安
47	谷地	散在地・城郭跡	中・近世	119	舟1	散布地	平安
48	高根Ⅰ	散布地	古代	120	高日向北	散布地	磯文？
49	奥林	射塚・壁跡	中・近世	121	北原	礎壇壁跡	中世
50	領(中野原)	集落跡	古代・平安・中世	122	北原東Ⅰ	散在地	古代
51	御田荒谷	散在地	平安	123	古内野ヶ沢	古代・磯文前期	車軌文
52	東谷地	散在地	平安	124	鳥ノ原	散布地・城郭跡	車軌文・平安
53	中平	散在地	平安	125	明治沢	散布地・城郭跡？	平安
54	中平東Ⅱ	散在地	磯文	126	荒野	集落跡	平安
55	中平西	散布地	平安	127	福	車軸跡・集落跡	磯文・平安
56	中平南	城郭跡散在地	中・近世・平安	128	八削跡	城郭跡・集落跡	平安・中世
57	中平東	散布地	平安	129	宗角跡	車輪跡	中世・平安
58	寺ヶ原Ⅱ	散在地	平安	130	前削	散布地	磯文・古代
59	寺ヶ原Ⅲ	車輪跡	車平安・中近世？	131	砂子田	散布地	古代
60	高田Ⅱ	集落跡	平安	132	船戸下	散布地	平安
61	高田Ⅲ	散在地	平安	133	古内林	舟り場・集落跡	磯文・古代・中世・近世
62	寺ヶ原Ⅰ	散在地	平安	134	水ノ口	集落跡	平安
63	高田Ⅰ	散在地	平安	135	船戸田	散布地	平安
64	根森	散在地・環濠	車軌文・平安	136	六切大	城郭跡	中世・古代
65	北白山Ⅱ	散布地	平安	137	松垂	散布地	平安
66	沖	散在地	平安	138	荒ヶ森B	散布地	磯文
67	北白山Ⅲ	散在地	平安	139	荒ヶ森A	散布地	磯文
68	高田背	散在地	平安	140	荒ヶ森C	散布地	磯文
69	樋ノ口	散布地	平安	141	荒ヶ森	集落跡	平安
70	小庄	散在地	平安	142	葦森	散布地	磯文
71	下野田	散在地	平安	143	高日向	散布地	舟・平安
72	通野Ⅰ	散布地	古代	144	雷峰Ⅱ	散布地	磯文中期

第2表 周辺の遺跡（2）

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
145 長者原	城館跡	中世		217 照井郡	城郭跡・散布地	縄文前期・平安・中世	
146 九郎原	城館跡	中世		218 南陣場	散布地	縄文早期・前期	
147 寺ノ上	寺より塙・城館跡	中世		219 衣闌	散布地	平安	
148 寺ノ上耕塚	耕塚	平安末		220 小江口	散布地	縄文・平安	
149 寺道跡	散布地	古代		221 白石原	城郭跡・寺集落跡	縄文・半弥生・平安・中世	
150 中畠城(櫛山城)	城館跡	中世		222 沼沢	散布地	縄文	
151 内ノ町	堀廻り散跡	中世		223 上水	散布地	縄文後期	
152 水尻	集落跡	旧石器・縄文・古代		224 船橋	散布地	縄文	
153 古城合ノ沢1	集落跡	縄文		225 青木	散布地	縄文後・晩期	
154 古城合ノ沢2	散布地	縄文		226 田谷	散布地	平安	
155 古城上野	散布地・寺集落跡	縄文中期・古代		227 生長根Ⅰ	散布地・耕塚?	縄文・平安末?	
156 莫苦	散布地・環濠・散跡	古代・中世		228 生長根Ⅱ	耕塚?	平安末?	
157 亀田	堀廻り散跡	中世		229 気賀塚塚	その他の塚	近世	
158 古城方八丁	寺集落跡	中世		230 篠谷	散布地	弥生	
159 田高呂	散布地・環濠跡	縄文前・中期・古代・中世		231 二子1	散布地	縄文中期	
160 田高呂1	散布地	縄文		232 二子2	散布地	中世・近世	
161 上ノ原	散布地	縄文		233 碓水	散布地	縄文	
162 寺念寺山空跡	空跡	古世		234 新田	散布地	縄文	
163 赤坂Ⅱ	散布地	縄文		235 野々	散布地	縄文	
164 上ノ台	堀廻り散跡	中世		236 黄須	散布地	縄文前期・中期	
165 八幡	散布地	中世		237 日向	散布地	縄文	
166 安佐原	城館跡?	古代・中世		238 竹ノ内	散布地	縄文	
167 学院	散布地	平安		239 北東東日	散布地	縄文・古代	
168 合野	寺より塙・集落跡	縄文・平安・近世		240 五輪城塚	耕塚	平安末?	
169 内庭城	散跡地・寺集落跡	中世・古世		241 沢田	寺集落跡	中世	
170 川岸塚1	散布地	縄文後期・弥生・平安		242 母姫	散布地	奈良・平安	
171 白山山	散布地	縄文後期		243 学院Ⅱ	散布地	古代	
172 小林松長	集落跡	縄文中期・弥生・平安		244 道上	寺集落跡・散布地	中世	
173 上麻生城(大麻生城)	城館跡	中世・古代		245 田前	集落跡	平安	
174 大里塚	一字・石経塚	中世末		246 萩谷Ⅱ	寺集落跡・環濠・散跡	古代・中世	
175 川岸塚Ⅱ	寺集落跡・豪華層	中世		247 下町	散布地	縄文・平安	
176 石田1	散布地	縄文		248 獅子木	中石器類作跡・集落跡・散發類	古代・弥生	
177 六本松	散布地	縄文草創期		249 安久東	寺集落跡・墓域	中世・古世・中世・近世	
178 六本松耕者屋敷	城館跡(屋敷跡)	中世・古世		250 墓田	散布地	縄文・平安	
179 駒水	散布地	縄文		251 四川塚Ⅰ	寺集落跡	平安	
180 大根	散布地	縄文・旧石器		252 四川塚Ⅱ	寺集落跡	奈良・平安	
181 六本松館	城館跡	中世		253 高崎1	散布地	平安	
182 合ノ沢Ⅱ	散布地	縄文前期		254 高崎Ⅱ	寺集落跡	平安・近世	
183 水沢東	散布地	縄文		255 八戸町	集落跡	古代・準中世	
184 水沢	散布地	縄文		256 草舟印	散布地	平安	
185 徳尻Ⅱ	散布地	縄文		257 鶴山	埋場跡?		
186 村坂Ⅱ	散布地	平安		258 逸翁原	屋敷跡	近世	
187 墓場	散布地	縄文		259 向原(道脇)	城郭跡		
188 小坂1	散布地	縄文		260 丸塚	埋場跡	近世	
189 要ノ島	散布地・環濠・散跡	中世・近世		261 八戸市場	市場跡		
190 前沢城	城館跡	中世		262 上原谷坊尾原	屋敷跡		
191 三沢氏居館跡	城館跡	古世		263 石合・東裏	散布地	縄文	
192 竹沢	集落跡	平安		264 丸山塚	遺物・塚跡		
193 五合田	寺より塙	近世		265 野村森	遺跡	石祠	
194 谷塚	散布地	縄文後期		266 寺尾山	城郭跡	中世	
195 合ノ沢1	散布地	縄文中期・平安・近世		267 長ヶ原塚原	寺古跡	古代?	
196 泊ヶ崎	散布地	縄文・平安		268 丸井塚	筑場跡		
197 堀ノ崎	寺古跡?	近世?		269 木ノ瀬(擬定地)	耕合跡?		
198 日昌木本移	寺集落跡	平安		270 東景1	散布地	縄文	
199 長壁高塚	散布地	平安		271 東景Ⅱ	散布地	縄文	
200 道塚	散布地	縄文		272 内浜	散布地	古代	
201 新城1	城館跡	縄文・平安・中世		273 久	散布地	縄文・古代・近世	
202 新城Ⅱ	散布地	平安		274 杉林	散布地	縄文・古代	
203 狐石	散布地	縄文		275 山形	散布地	縄文	
204 新城苦	その他の墓	古世		276 宮前	散布地	近世?	
205 大坂	集落跡	平安		277 墓原1	散布地・寺集落跡・幸運	縄文	
206 南陣場黒跡	空跡	古代		278 墓原Ⅱ	寺古跡・散布地・集落跡	縄文・弥生・平安・中世・近世	
207 生母原	散布地・屋敷跡	旧石器・近世		279 月影Ⅱ(植屋)	城郭跡	中・近世	
208 西原	散布地・城館跡	縄文後期・中世		280 月影1	散布地	縄文・平安・中世	
209 南在	散布地	縄文		281 月影Ⅲ	散布地	縄文	
210 刈塚原	城館跡	中世		282 東寺跡1	寺古跡	縄文・平安	
211 古原	城館跡	中世		283 新山雅現社	散布地・寺集落跡・植	縄文・半弥生・平安	
212 木間原	城館跡?	中世?		284 二段寺Ⅰ(内側)	城郭跡	中・近世	
213 東原(水津洋城)	散跡地・小曾根城・元寺跡	中世・古世・近世		285 来福寺Ⅱ	寺古跡	平安	
214 舞鶴公園	散跡地	縄文中期・古代		286 伏塚山	耕塚	中・近世	
215 他尻1	散布地	縄文					
216 他尻・里塚	里塚	近世					

### III 野外調査と室内整理の方法

#### 1 野外調査

今回の調査区は、現況は水田及び休耕田で、圃場整備事業に伴い農道・水路の新設部分の調査を実施した。調査区は、幅3～12m、長さは北東－南西方向で約400m、北西－南東方向で約50mを測り、また飛び地もある。調査区の細長い形などを考慮しメッシュグリッドなどは設定せず、①～⑩区と調査区の大区分を命名し調査を進めた（第4図参照）。

調査開始と共に草木などの雑物撤去を行い、続いて各所に試掘トレントを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。その結果、遺跡の基本層序はⅠ～Ⅵ層に分層可能と判断され、その内遺物を主に包含するのはⅢ～Ⅴ層であることを把握できた。加えて、①・①'・②・③・④・⑤・⑦区については、遺構検出がⅢ層・Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層（地山）の各上面で最大4面が想定された。調査期間を鑑みて遺構・遺物の有無を確認しながら、人力（スコップ、鍬鎌、両刃鎌、移植ヘラを使用）と重機を併用して掘削を行った。⑥・⑧・⑨・⑩区は、Ⅰ・Ⅱ層の直下でⅥ層地山となることから重機で最終面まで掘り下げ遺構検出を行った。

検出された遺構は、奈良国立文化財研究所などで採用している遺構略号を使用した。遺構の掘り下げは、規模に応じて4分法と2分法を使い分け、旧河道などについては数か所にベルトを設定して土層観察を行なながら進めた。

遺構の実測は、CUBIC社製造構成測定ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。その際に使用した基準点や補点のX・Y・Zの値は第7図を参照いただきたい。現場の写真撮影については、キャノンEOS5D及び50D（デジタルカメラ）を中心に使用した。

#### 2 室内整理

本書の原稿執筆・表作成は星、村木が分担し、図版の編集作業は佐藤を中心に星、村木、藤本が作成、全体の編集は星が行った。

遺構図版は、電子平板のデータで作成した平面図を整理・修正した第2原図を作成し、現場で人力により作成した断面図と合わせて手トレースし、台紙に貼りつけ作成した。遺構図版は、1/30、1/50、1/60など、遺構の性格に応じた縮尺を採用した。

遺物の整理について、土器・陶磁器類は水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。選択基準は、①残存率の良いもの、②遺構の時期推定になる層位の資料、③口縁部資料、などの順に優先して選択し、仮番号を付け登録した後、掲載遺物として更に選択した。土製品・石器・鉄製品は、水洗後、仮番号付け、掲載物の選択を行った後、掲載番号を付した。遺物図版は、土器類1/3、土製品1/2、剥片石器2/3、礫石器・石製品1/3で掲載した。石器類で磨痕や敲打痕が観察されるものはスクリーントーンで明示した。遺構写真図版は、本文や遺構図版と同様の掲載順とした。遺物写真図版は、遺物図版と同じ縮尺を基本

とする。なお、黒曜石製のフレークは写真のみ掲載した。

## IV 検出遺構

小林繁長遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡4棟、土坑21基、焼土遺構3基、埋設土器1基、集石1基、柱穴状土坑105個である。合わせて旧河道を2条検出した。柱穴状土坑を除くと、遺構の時期は縄文時代前～晚期で、弥生時代及び古代は未検出にある。

### 1 基本層序・旧河道

#### (1) 基本層序

概ね以下のようないす層の堆積順を示す。

I層表土・水田耕作土など 層厚20~60cm 平均的には40cm前後の厚さでみられる。

II層褐～褐灰色泥質粘土 層厚0~150cm 古代～近現代の文化層で捉えられる。旧河道1号の流路内ではTo-aテフラが認められる。

III層 黄褐～褐色粘土 層厚0~60cm 弥生時代前期以降、古代（To-aテフラ降下以前）以前に形成された土層で洪水堆積層と捉えられる。

IV層 暗褐色粘土質シルト 層厚0~80cm 晩期後葉～弥生前期の遺物を中心に包含する。

V層 黒色シルト 層厚0~40cm 縄文前～後期初頭の遺物を包含し、主体は中期中葉～末葉である。IV層と比較して土色は黒味が強く、土質は粘性が弱い。

VI層 黄褐～明黄褐色粘土 地山

全体の傾向として、II層は旧河道1号の流路付近を中心に堆積が認められる。III層は旧河道2号の流路付近を中心に調査区東側に卓越してみられるが、旧河道1号からは堆積を確認できない。IV層とV層は、旧河道2号流路内及び調査地中央部より東側（①・①'・②・③・④・⑤・⑦区）で良好堆積を確認できる。III・IV・V層の遺物出土傾向としては、縄文晩期や弥生前期の土器は旧河道2号流路内のIII・IV層堆積土中から、縄文前・中期の土器は流路外のV層からの出土が多い。

#### (2) 旧河道について

旧河道は2条検出し、旧河道1号、旧河道2号と命名した。旧河道1号は、To-aテフラ降下時期前後に存在した河道と捉えられる。旧河道2号は、縄文時代前期～弥生時代前期頃の河道で、併せてTo-aテフラ降下以前の洪水堆積に覆われている。

旧河道1号（第5図、写真図版4）【位置・検出状況】旧河道1号の流路は、⑥・⑧・⑨・⑩区で検出した。何れの箇所においても、II層を掘り下げている途中でTo-aテフラの自然堆積層を検出したことで認知・推定した。【重複関係】旧河道2号との重複を⑥区で確認した。旧河道が新しい（旧河道2号を切る）。【流路・規模】調査区の形状に依存し河道の流路（平面形）や規模は部分的にしか把握できない。第5図には推定流路を図化・明示した。河道幅は、把握できた⑥・⑧・⑨・⑩区を見る限り10~15mと想定される。河道の深さについて、全体的に1.5~2mまで掘り下げたが河底は更に下位にある。この旧河道の調査時は、湧水量が多く尚且つ雨天時の降水の集水も多かったことから、隨時冠水状態にあり、調査の安全を優先し河底までの掘削は断念した。土層断面図についても上述の

理由により作成していない。【堆積土】Ⅱ層が主な堆積土で、旧河道1号流路内は水成化した泥質の粘土が顕著にあった。堆積土にⅢ層は認知できない。⑧・⑨区では、灰褐色泥質粘土層内にTo-aテフラ（テフラの層厚は平均的には10cm前後）や有機物（生木の破片）の混入が顕著に認められた（※土師器などの遺物は出土しなかった）。なお、To-aテフラは、Ⅱ層上面から60～100cm前後掘り下げた段階（堆積土中位～下位）で検出される場合が多かった。【遺物】土器類333.4g出土した。磨滅した縄文土器片が主体である（全て不掲載とした）。【時期】To-aテフラの堆積様相や検出状況を見る限り、同テフラは水成堆積で、堆積土中位～下位に堆積していると捉えられる。従って、河道として流水が存在したのは同テフラ降下より以前と考えられる。また、埋没は同テフラ降下期以前の開始と推定されるが、同テフラ降下直後においても完全には閉口せず、やや時間を経て埋没したと捉えられる。

旧河道2号（第5・6図、写真図版4）【位置・検出状況】旧河道2号の流路は、①・①'・②・⑤・⑥・⑦区で検出した。洪水堆積層であるⅢ層掲へにぶい黄褐色粘土を除去した段階で、旧地形が急に落ち込み箇所が複数地点認められ、旧河道の存在を認知した。Ⅲ層について詳述すると、調査当初は色調・土質がVI層地山粘土と類似することから人工的な整地行為（水田造成時の地山土による整地層など）に伴う地層と推定された。しかし、調査の進行とともに人工的な整地層とするには、面的な広がりが大き過ぎることから、人為堆積層ではなく自然堆積層と判断するに至った。内容把握のためA断面作成地点を始め、各所に試掘トレーンチを設定し深掘りを実施した。その結果、Ⅲ層からは縄文晩期後葉～末葉を中心に弥生前期の土器が出土し、Ⅲ層の下からほぼ同時期の縄文土器（縄文晚期中心）などを包含するⅣ層を確認した。上述のことから、このⅢ層は洪水に伴い形成されたとの結論に至った。【重複関係】本旧河道を切る遺構は、SK01・SK02上坑や⑦区柱穴状土坑及び旧河道1号などがある。また、SR01埋設土器は、本河道の堆積土Ⅳ層を切り構築され、尚且つⅢ層に覆われている。【流路・規模】旧河道1号と同様に、調査区の形状に依存し、河道の流路（平面形）や規模は部分的にしか把握できない。第5図には推定流路を図化・明示し、また3地点で作成した土層断面図A・B・C断面を第6図に掲載した。河道幅は、②・⑥区を見る限り10m前後と想定される。検出面からの深さは、A断面を作成した②区で1.5m前後、B断面を作成した①'区やC断面を作成した⑦区で2m以上を測る。標高値は北側に位置する調査区から順に述べると、⑦区で26.6m以下、①'区で26.9m以下、②区で26.3m前後、⑥区で25.2m前後である。従って、今回の調査成果からは、北東→南西方向に蛇行しながら流れていた河道と推定できよう。【堆積土】旧河道2号流路内では、全般にⅡ層の堆積が薄く、Ⅰ層を除去した段階でⅢ～V層の良好な堆積が認められる。Ⅲ層は、上述してきたとおり、洪水堆積層と判断される土層で、10～60cmの層厚を測り、遺物は磨滅した土器破片が多く、時期は縄文晩期や弥生前期（※極一部縄文中期葉も含まれる）を中心とする。土師器は認められない。洪水の発生時期は特定できないが、含まれる遺物から時期の上限は弥生前期、時期の下限はTo-aテフラ降下時期以前である。参考までに、このⅢ層上面から出土した炭化材の年代測定を実施したが（測定名「炭4」）、 $2,440 \pm 30$ yrBPの年代が得られた（※ただし、この年代測定値が洪水の発生時期を反映しているかは疑問で要検討事項としたい）。Ⅳ層は、層厚10～80cm以上、平均的には30cmほどで堆積が認められ、①'区や⑦区で特に厚く堆積し、⑦区南部のSI01堅穴住居跡検出地の東側付近では最大層厚80cm以上にある。また、直接廃棄した様相で捉えられる縄文晩期後葉土器も出土した。詳細は不明にあるが、Ⅳ層形成途中に、旧河道2号が捨て場として利用されていた可能性が考えられる。V層は層厚15～40cmで、①'・②・③・④・⑤・⑦区で堆積が認められる。傾向的に遺物量は少なく、また小破片が多い。調査全体的にみてV層からの遺物量は、旧河道2号の流路外からが多い。IV・V層は第

6図A断面作成地点を見る限り、西側では酸化鉄の集積が顕著に見られるが東側では認めがたい。西側の酸化鉄の集積が顕著な部分は水成作用を受けた地層と判断され、これらはIV a層・IV b層・IV c層、及びV a層と命名し細分を試みた。IV a～IV c層及びV a層は、洪水現象に伴い堆積・形成されたと捉えられるⅢ層と比較して、調査区内で確認できた分布範囲が狭い。また、出土遺物はほとんどなかった。強く言及できる状況はないが、縄文中期以降～弥生時代前期において、小規模な洪水現象が数回発生したことを予見させる土層内容と考えられる。【遺物】（第28～33・34・35・36・38・39・40・41・43図143～220・228・236・253・254・267・269・276・296・306・317、写真図版22～26・27・29・30・31）出土遺物は土器類70.725g、石器類20点（その内黒曜石製剥片6点）出土した。ただし、調査当初に旧河道2号と認知する前に取り上げたものを含めると、土器類103.908g以上、石器37点以上が出土している。土器類78点、土製品2点、石器類9点を掲載した。土器は層位毎に、土製品・石器類は種別毎に掲載した。層位毎の遺物の主体時期は、Ⅲ層は縄文晩期後葉～弥生前期を、IV層は縄文晩期中葉～末葉を主体に弥生前期や縄文中期中葉、V層は縄文中期中葉～末葉を主体に後期初頭まで認められる。Ⅲ層出土遺物は、本来はIV層中に包含していた縄文晩期や弥生時代の遺物が再堆積により、混入したと考えられよう。【時期】旧河道2号からは縄文前期の土器が認められない。また、Ⅲ層出土とIV層出土では縄文晩期後葉～弥生前期の土器が接合関係を示すものがある。さらに、②区や⑥区の土層観察からはTo-aテフラ降下期より古い時代に埋没していることを把握できる。推定の域は出ないが、旧河道2号は縄文前期頃には存在し、埋没が開始された時期はV層の形成時期の中でもやや新期の縄文中期中葉～後期初頭と推定される。

## 2 堅穴住居跡

SI01堅穴住居跡（第12図、写真図版5・6）【位置・検出状況】⑦区南部に位置する。検出状況はIV層を除去した段階で石圓炉を検出したことから認知した。明確には把握できなかつたが、本遺構東側の壁・床面は、旧河道に関係して既に消失していると推定される。【重複関係】本遺構の床面を裁りSU01集石が構築されている。【平面形・規模】平面形・規模ともに不明である。第12図には床面と判断した面の連続性から推定プランを図示した。ただ、西側調査区境の土層観察から壁の立ち上がりを確認できなかつたことから、あるいは既に旧河道に流れ、炉付近以外は消失している可能性もある。【壁・床面】壁は未検出である。床面は炉の検出面を考慮し基本層序V層中と判断した。【堆積土】1層と命名した暗褐色シルトによる単層と調査判断された。【炉】土器埋設石圓炉を検出した。炉石は北西側が二重に配置された重厚な作りで、南側が開放される（炉石が設置されない）。規模は、長径約60cm、短径約50cmである。埋設土器は、深鉢型土器の胴～底部（※口縁～胴部中位付近まで欠損する）を用いている。正立て埋設されている。【柱穴】未検出である。〈付属施設〉石圓土器埋設炉の外側で囲むような位置より環状気味に巡る焼土を検出した。現地性で、直径113cm前後、深さ10cm前後で発達している。精査の結果、石圓土器埋設炉が焼土を破壊して作られていることが分かった。炉や床の作り替えを行った様子は看取できなかつたことから、用途などは不明にある。【遺物】（第21・35・40図1～9・242・251・252・291、写真図版18・27・30）出土遺物は土器類6.359.7g、石器類は製品13点と黒曜石製剥片9点が出土した。1～9・242・251・252・291を掲載した。【時期】炉に埋設されていた土器は地文のみの粗製深鉢で土器型式の特定はできないが、胎土や地文の様相などから縄文時代中期末葉と推定される。

SI02竪穴住居跡（第13図、写真図版7）【位置・検出状況】⑦区南部に位置する。I層を除去した段階で黒褐色シルトによる円形気味のプランを検出し認知した。【平面形・規模】平面形・規模ともに不明である。第13図には、残存する北壁や床面と判断されるやや硬い面の連続性から平面の推定プランを示した。【壁・床面】北壁の一部分の検出に留まる。緩く外傾する。また、径20cm前後の礫が北壁際に2個見られるが、意図的に設置されているかどうか判断できなかった。床面は基本層VI層中で、全体的にやや硬い。【堆積土】黒褐色シルトによる単層と調査判断された。黄褐色粘土の含有割合の多少で1・2層に細分した。自然堆積と判断される。【炉】未検出である。【柱穴】4個検出した。【遺物】（第21図10～13、写真図版18）出土遺物は土器類1,261.8g出土した。大木10式の新段階（大木10b式）を中心とする。【時期】出土土器から縄文時代中期末葉と判断される。

SI03竪穴住居跡（第13・14図、写真図版8・9）【位置・検出状況】①'区中央部に位置する。検出状況は水田耕作土直下で検出した。本遺構南側や南東側は灌漑用水路で破壊されている。また、北西側床面も暗渠排水溝で破壊を受けている。【平面形・規模】全体形状は楕円形基調にあるが、北壁・西壁・南壁を個々に見れば多角形にも捉えられる。長径4.5m前後、短径3.7m前後と推定される。【壁・床面】壁は緩く外傾するが、明らかな立ち上がりは認められない。床面はやや凹凸があり、全体的にはVI層地山粘土で、部分的に貼り床が施されている。【堆積土】黒褐色粘土質を主体とし、黄褐色粘土ブロックが10%ほど混入する。自然堆積と捉えたが、明確には特定できていない。【炉】南西壁際より複式炉を検出した。小土坑状の円形の掘り込み部+楕円形の前庭により構成され、両者を仕切るような位置に炉石が設置されている。円形の掘り込み部から南側床面にかけて焼土の発達が顯著にみられる。炉の規模は、長径135cm、短径55～58cmである。炉の中軸方向はN-50°-Eである。【柱穴】7個検出した。炉の周囲に位置するPP1～5は、柱穴同士の重複が無く同時性が高いと判断される。特にPP1～4は平面規模や深度（全般に50cmを越える）にも共通性が窺える。また、PP1は、平面規模は上記の4個とほぼ同様にあるが深度が浅い（約20cm）特徴がある。【遺物】（第21・35・38・39・42図14・15・245・272・277・312、写真図版18・27・29・31）出土遺物は土器類1,964.4g、石器類製品10点、黒曜石製剥片6点である。14・15を掲載した。【時期】出土土器から縄文時代中期末葉と判断される。

SI04竪穴住居跡（第14図、写真図版10）【位置・検出状況】③区南端に位置する。検出状況はV層の掘削中にVI層（地山）上面で石囲炉を検出した。状況からは、本来の遺構検出はV層中であった可能性が高い。【平面形・規模】平面形・規模ともに不明である。第14図には柱穴の位置、床面や土層の連続性などから推定プランを示した。【壁・床面】壁は未検出である。床面は、石囲炉の検出面からVI層地山中と判断された。ほぼ平坦である。貼り床は看取されないが、炉周辺を中心にやや硬い。【堆積土】黒褐色シルトによる単層である。基本層V層に由来すると考えられる。【炉】石囲炉を検出した。規模は33×25cmである。石囲炉内やその周辺からは焼土が認められない。【柱穴】6個検出した。【遺物】（第21・38図16～18・273、写真図版18・29）出土遺物は土器類1,888g、石器類1点である。16～18・273を掲載した。【時期】出土土器から縄文時代中期後葉と判断される。

### 3 土 坑

SK01土坑（第15図、写真図版11）【位置・検出状況】調査区⑦区南側に位置する。検出層位はⅢ層で

ある。【平面形・規模】平面形は円形である。規模は91×86cm、深さは26cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面は中央が皿状に凹む。【堆積土】黒褐色粘土質シルトである。【遺物】土器125.3gが出土している。出土土器は縄文晚期後半と推定されるが、磨滅した小破片で詳細な時期特定ができない。【遺構時期】検出面からは弥生時代以降に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK02土坑（第15図、写真図版11）【位置・検出状況】調査区⑦区南側に位置する。検出層位はⅢ層である。【平面形・規模】確認できた平面形は半円形であり、遺構は調査区外に延びていく。規模は95×38cm、深さは5cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は中央が皿状に凹む。【堆積土】黒褐色粘土質シルトである。【遺物】土器24.6gが出土している。出土土器は縄文晚期後半と推定されるが、磨滅した小破片で詳細な時期特定ができない。【遺構時期】検出面からは弥生時代以降に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK05土坑（第15図、写真図版11）【位置・検出状況】調査区⑦区南側に位置する。検出層位はⅢ層である。【平面形・規模】平面形は梢円形である。規模は60×48cm、深さは7cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】黒色・暗褐色シルトである。【遺物】なし。【遺構時期】検出面からは弥生時代以降に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK06土坑（第15図、写真図版11）【位置・検出状況】調査区①'区北部に位置する。検出層位はVI層である。【平面形・規模】平面形は円形である。規模は119×116cm、深さは56cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面は中央が皿状に凹む。【堆積土】黒褐色粘土質シルトが主体で3層に細分される。【遺物】（第21・35図19・250、写真図版18）土器106.5g、石器2点が出土している。19は大木8a式の深鉢である。250の尖頭器は頁岩製尖頭器である。【遺構時期】出土遺物から縄文時代中期中葉もしくはその前後期に属すると推定される。

SK07土坑（第15図、写真図版11）【位置・検出状況】調査区①'区中央に位置する。検出層位はVI層である。【平面形・規模】平面形は不整形である。規模は131×129cm、深さは72cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】黒褐色シルトが主体である。【遺物】（第21・35図20・243、写真図版18）土器56.2点、石器3点（黒曜石剥片）が出土している。土器は、そのほとんどが小破片である。20は土器型式不明だが縄文時代中期後葉と思われる深鉢である。243の石錐は頁岩製である。【遺構時期】堆積土や出土遺物から周辺の遺構と同様の縄文時代中期に属するものと思われる。

SK09土坑（第16図、写真図版12）【位置・検出状況】調査区⑤区北部に位置する。検出層位はIV層である。【平面形・規模】平面形は梢円形である。規模は212×180cm、深さは55cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸が認められるが概ね平坦である。【堆積土】褐色シルト（Ⅲ層）が主体である。【遺物】土器45.6g、石器1点が出土している。【遺構時期】堆積土から古代以降に属するものと思われる。

SK10土坑（第16図、写真図版12）【位置・検出状況】調査区①'区北部に位置する。検出層位はVI層

である。【平面形・規模】 平面形は、開口部は長楕円形であるが、壁中部～底部が長方形の箱形を呈する。規模は191×92cm、深さは103cmである。【壁・底面】 壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】 暗褐色粘土質シルトを主体に4層に細分される。他の造構とは異なり堆積過程において洪水堆積層を確認している。【遺物】 なし。【遺構時期】 堆積土から周辺の遺構と同様の縄文時代中期に属するものと思われる。また、遺構の形態から用途は陥し穴の可能性もある。

SK11土坑（第16図、写真図版12）【位置・検出状況】 調査区⑨区南側に位置する。検出層位はVI層上面である。【平面形・規模】 平面形は円形である。規模は75×70cm、深さは11cmである。【壁・底面】 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】 黒褐色シルトである。【遺物】（第41図300、写真図版30）石器3点が出土している。300は敲磨器Ⅰ類である。【遺構時期】 堆積土から縄文時代に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK12土坑（第16図、写真図版12）【位置・検出状況】 調査区④区西側に位置する。検出層位はV層上面である。【平面形・規模】 平面形は円形である。規模は71×68cm、深さは5cmである。【壁・底面】 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】 黒褐色粘土質シルトである。【遺物】 なし。【遺構時期】 堆積土から縄文時代に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK13土坑（第16図、写真図版13）【位置・検出状況】 調査区④区西側に位置する。検出層位はV層上面である。【平面形・規模】 確認できた平面形は半円形であり、遺構は調査区外に延びていく。規模は91×58cm、深さは15cmである。【壁・底面】 壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】 黒褐色・暗褐色粘土質シルト主体で4層に細分される。自然堆積と推定されるが、明確ではない。【遺物】 土器9.7gが出土している。何れも小破片のため、時期の特定・判断は難しいが中期若しくは晩期と推定される。【遺構時期】 堆積土から縄文時代に属するが、出土土器は小破片で詳細な時期については判然としない。

SK14土坑（第17図、写真図版13）【位置・検出状況】 調査区④区西側に位置する。検出層位はV層上面である。【平面形・規模】 平面形は円形である。規模は118×112cm、深さは33cmである。【壁・底面】 壁はやや内湾しながら立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】 黒色・黒褐色シルト主体で5層に細分される。自然堆積と推定される。【遺物】 土器19.4gが出土している。【遺構時期】 堆積土から縄文時代に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK15土坑（第17図、写真図版13）【位置・検出状況】 調査区④区西側に位置する。検出層位はV層上面である。【平面形・規模】 平面形は楕円形、規模は106×95cm、深さは20cmである。【壁・底面】 壁は外傾ないしやや外反しながら立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】 黒褐色粘土質シルトが主体で4層に細分される。【遺物】 なし。【遺構時期】 堆積土から縄文時代に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK16土坑（第17図、写真図版13）【位置・検出状況】 調査区⑤区中央に位置する。検出層位はIV層である。【平面形・規模】 平面形は円形である。規模は106×104cm、深さは65cmである。【壁・底面】 壁は直立ないし外傾しながら立ち上がる。底面は概ね平坦であるが、中央がやや皿状に凹む。【堆積土】

黒褐色シルトが主体で8層に細分される。【遺物】（第22図22・23、写真図版18）土器209.3g、石器1点が出土している。22・23は縄文時代中期末葉大木10式新段階の深鉢である。【遺構時期】主体となる堆積土及び出土遺物から周辺の遺構と同様の縄文時代中期末葉に属すると思われる。

SK17土坑（第17図、写真図版13・14）【位置・検出状況】調査区⑤区中央に位置する。検出層位はVI層である。【平面形・規模】平面形は円形である。規模は62×60cm、深さは19cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】黒褐色粘土質シルトが主体で3層に細分される。【遺物】なし。【遺構時期】検出面から縄文時代に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK18土坑（第17図、写真図版14）【位置・検出状況】調査区⑤区中央に位置する。検出層位はIV層である。【平面形・規模】確認できた平面形は梢円形の縁辺である。規模は85×20cm、深さは29cmである。【壁・底面】確認できた壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は確認できないため不明である。【堆積土】黒褐色シルトが主体で3層に細分される。【遺物】（第39図279、写真図版29）土器137g、石器1点が出土している。279は敲磨器Ⅲ類である。【遺構時期】検出面から縄文時代に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK19土坑（第18図、写真図版14）【位置・検出状況】調査区⑤区中央に位置する。検出層位はV層である。【平面形・規模】平面形は円形である。規模は150×143cm、深さは47cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】黒褐色シルトが主体で10層に細分される。【遺物】土器44.5gが出土している。【遺構時期】検出面から縄文時代中期以前に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK20土坑（第18図、写真図版14）【位置・検出状況】調査区⑤区中央に位置する。検出層位はV層である。【平面形・規模】平面形は円形である。規模は124×121cm、深さは74cmである。【壁・底面】壁は外傾から直立気味に立ち上がる。底面は中央が皿状に凹む。【堆積土】黒褐色シルトが主体で6層に細分される。【遺物】土器185.6gが出土している。【遺構時期】検出面から縄文時代中期以前に属するが、詳細な時期については判然としない。

SK21土坑（第18図、写真図版14）【位置・検出状況】調査区⑥区東側に位置する。検出層位はV層である。【平面形・規模】平面形は不整形である。規模は143×121cm、深さは78cmである。【壁・底面】壁は直立からオーバーハングしながら立ち上がる。底面は若干の凹凸が認められるものの概ね平坦である。【堆積土】黒褐色シルト質粘土が主体で9層に細分される。自然堆積と推定される。検出面付近では黄色のテフラ（十和田中振テフラ？）を確認している（※分析結果からはTo-Cuテフラ粒子は検出されなかったが肉眼観察からはTo-Cuの可能性が極めて高いと調査判断される）。【遺物】（第22図24～26、写真図版18）土器78.6gが出土している。24～26は縄文原体及び胎土から縄文時代前期前葉と推定される深鉢である。【遺構時期】テフラ及び出土遺物から縄文時代前期前葉に属する。埋土上位出土炭化材について年代測定を実施したが、 $5,440 \pm 30$ yrBPの測定結果を得られた。

SK22土坑（第19図、写真図版15）【位置・検出状況】調査区⑤区北側に位置する。検出層位はV層下

位～VI層である。【平面形・規模】確認できた平面形は半円形である。規模は164×88cm、深さは68cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】黒褐色粘土質シルトが主体で12層に細分される。【遺物】（第22図27～29、写真図版18）土器334.1gが出土している。27が縄文時代晚期、28・29が縄文時代中期の深鉢である。【遺構時期】堆積土及び出土遺物から縄文時代中期に属するものと思われる。

SK23土坑（第19図、写真図版15）【位置・検出状況】調査区⑤区中央に位置する。検出層位はVI層である。【平面形・規模】平面形は円形である。規模は88×86cm、深さは23cmである。【壁・底面】壁は直立して立ち上がる。底面は中央が皿状に凹む。【堆積土】黒褐色粘土質シルトが主体で7層に細分される。【遺物】（第22図30、写真図版19）土器216.1gが出土している。30は縄文時代中期後葉の深鉢である。【遺構時期】出土遺物から縄文時代中期後葉に属すると推定される。

SK24土坑（第19図、写真図版15）【位置・検出状況】調査区⑤区北側に位置する。検出層位はVI層である。【平面形・規模】平面形は円形である。規模は130×117cm、深さは34cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】黒褐色粘土質シルトが主体で8層に細分される。【遺物】（第22図31、写真図版19）土器73g、石器1点が出土している。31は縄文時代前期前葉の深鉢である。258は頁岩製搔器である。【遺構時期】出土遺物から縄文時代前期前葉に属すると推定される。

#### 4 燃 土

SN01焼土（第19図、写真図版16）【位置・検出状況】調査区⑦区南部に位置する。検出層位はⅢ層中である。【平面形・規模】平面形は不整形である。規模は49×40cm、層厚は6cmである。【遺物】なし。【遺構時期】検出面から弥生時代以降の可能性はあるが、詳細な時期は不明である。

SN02焼土（第20図、写真図版16）【位置・検出状況】調査区⑤区に位置する。検出層位はIV層上面で、現地性焼土である。【平面形・規模】平面形は不整形である。規模は84×83cm、層厚は18cmである。【遺物】（第22・42図34・35・309、写真図版19）土器526.5g、石器2点が出土している。33・34は縄文時代中期末葉と推定される深鉢である。309はデイサイト製礫器である。不掲載とした石器1点は黒曜石製楔形石器である。【遺構時期】出土遺物は縄文時代中期末葉であるが、検出面から晩期の可能性はあるが、時期は特定できない。

SN05焼土（第20図、写真図版16）【位置・検出状況】調査区⑤区に位置する。検出層位はIV層上面で、現地性焼土である。【平面形・規模】平面形は不整形である。規模は75×66cm、深さは11cmである。【遺物】土器38.1gが出土している。【遺構時期】検出面から縄文時代の可能性はあるが、詳細な所属時期については判然としない。

#### 5 埋 設 土 器

SR01埋設土器（第20図、写真図版16）【位置・検出状況】調査区①区に位置する。検出層位はIV層上

面である。【埋設土器の状態】土器は倒立している。【平面形・規模】掘り方の平面形は梢円形である。規模は長軸65cm、深さは6cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】掘り方は黒褐色シルトである。【遺物】(第22・36図32・33・257、写真図版19・28)土器812g、石器1点が出土している。32は埋設されていた深鉢で縄文時代晩期末葉のものである。257は珪質頁岩製搔器である。【遺構時期】出土遺物から縄文時代晩期末葉に属すると推定される。

## 6 集 石

SU01集石（第20図、写真図版17）【位置・検出状況】調査区⑦区に位置する。検出層位はV層下位である。礫が比較的まとまって出土した範囲を遺構として捉えている。【重複関係】SI01堅穴住居跡より新しい。また、状況から旧河道2号のIV層埋没時期より古い。【平面形・規模】長梢円形を呈した礫を中心に並列させ、その周間に礫を点在するように配置している。規模は長軸90cmを測る。【堆積土】断面図には礫の下に層序を記載しているが、基本的には自然堆積に因るものと思われる。礫直下はIV層、さらにもう10cmほど下位からV層となる。【遺物】石器2点が出土している。【遺構時期】詳細な時期は特定できないが、遺構の構築面からは縄文晩期の可能性が高い。

## 7 柱 穴 状 土 坑

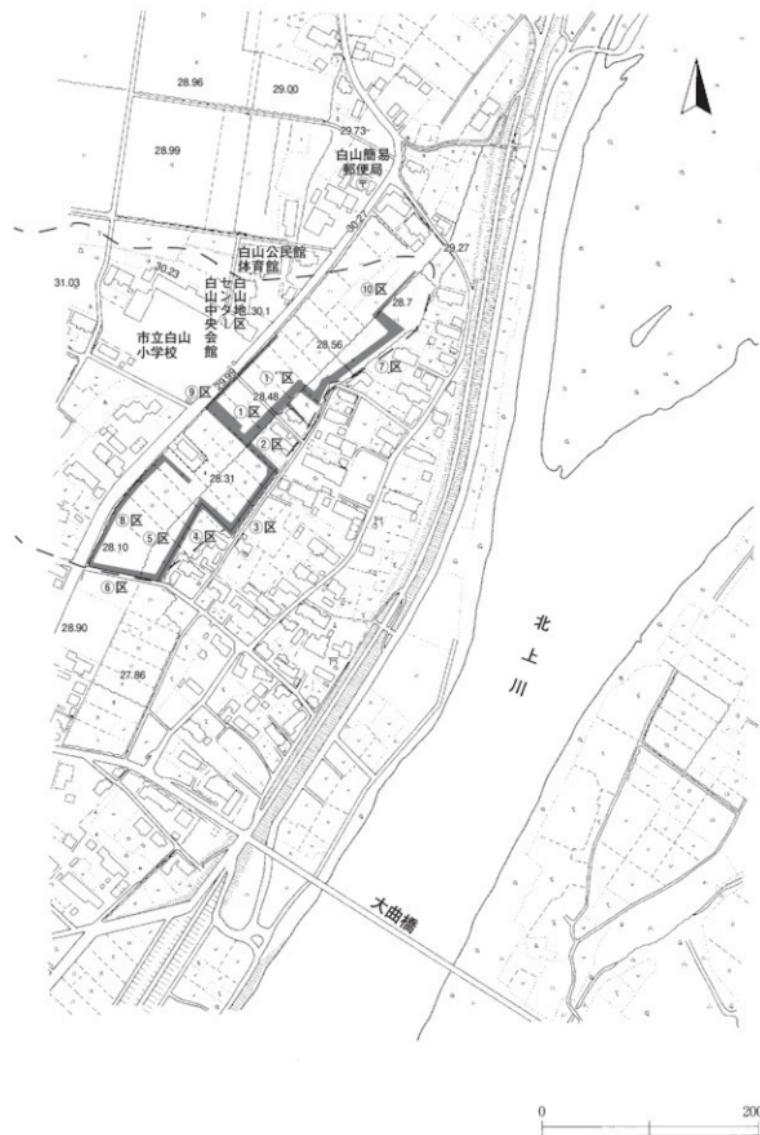
108個を検出した。検出区毎に記述する（北側に位置する調査区から順に）。

⑦区北部(P59・60) 2個を検出した。検出面はV層とVI層の漸移層である。縄文時代と判断されるが、詳細な時期は特定できない。周辺の検出作業時には縄文前期前葉や後期初頭などの土器が微量出土している。

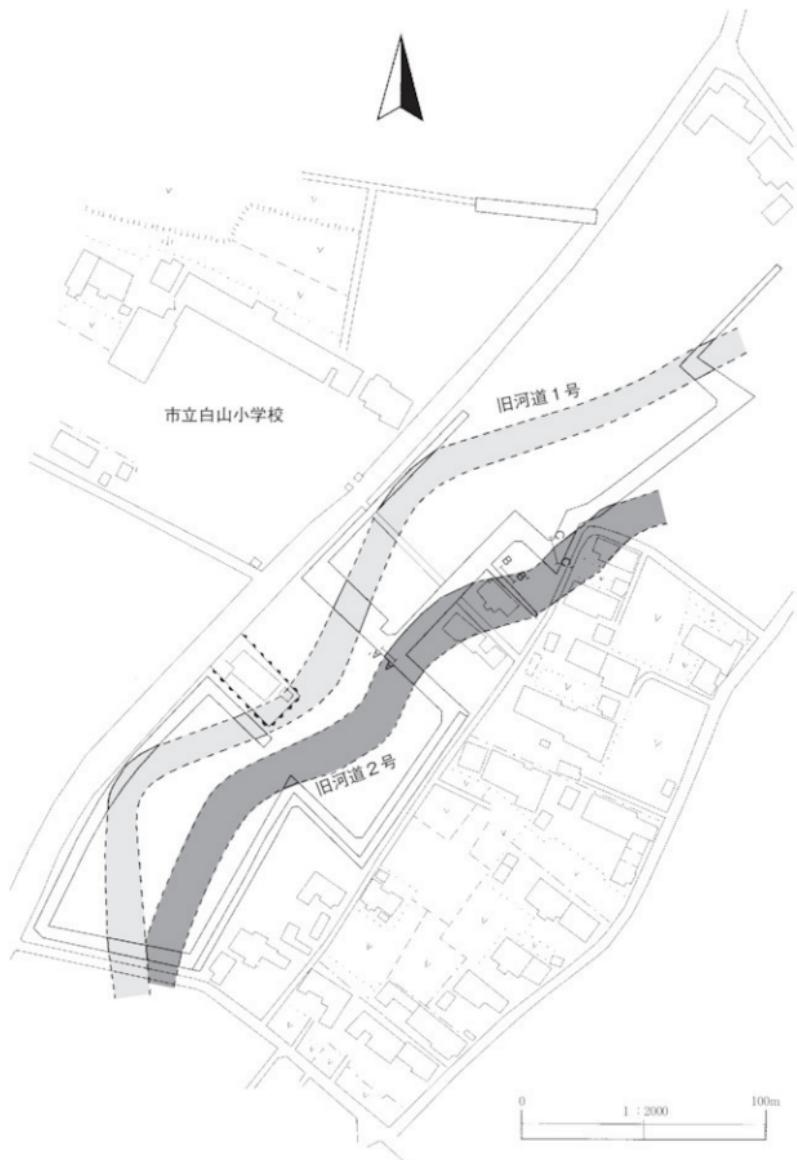
⑦区南部(P1～33・39～43・46・48・50～58・61～70・72～75・78・83～104) SI02堅穴住居跡の検出地より東側や南東側から86個を検出した。表土を除去した段階でIII層面（洪水堆積層）を中心に検出した。柱穴の平面規模は15～30cmが多い。時期の詳細は不明にある。検出面からは弥生前期以降～現代までの時期幅で捉えられる。

①'区北部(P200～211) SI03堅穴住居跡やSK06・07・10土坑の検出地付近から12個を検出した。VI層上面で検出した。出土遺物は、P202から土器類2.9g、P211から土器類111.8gである。土器の時期は縄文中期末葉を中心とする。柱穴状土坑の時期は明確には不明にあるが、SI03堅穴住居跡などとの関連から、縄文中期末葉を中心とする可能性がある。

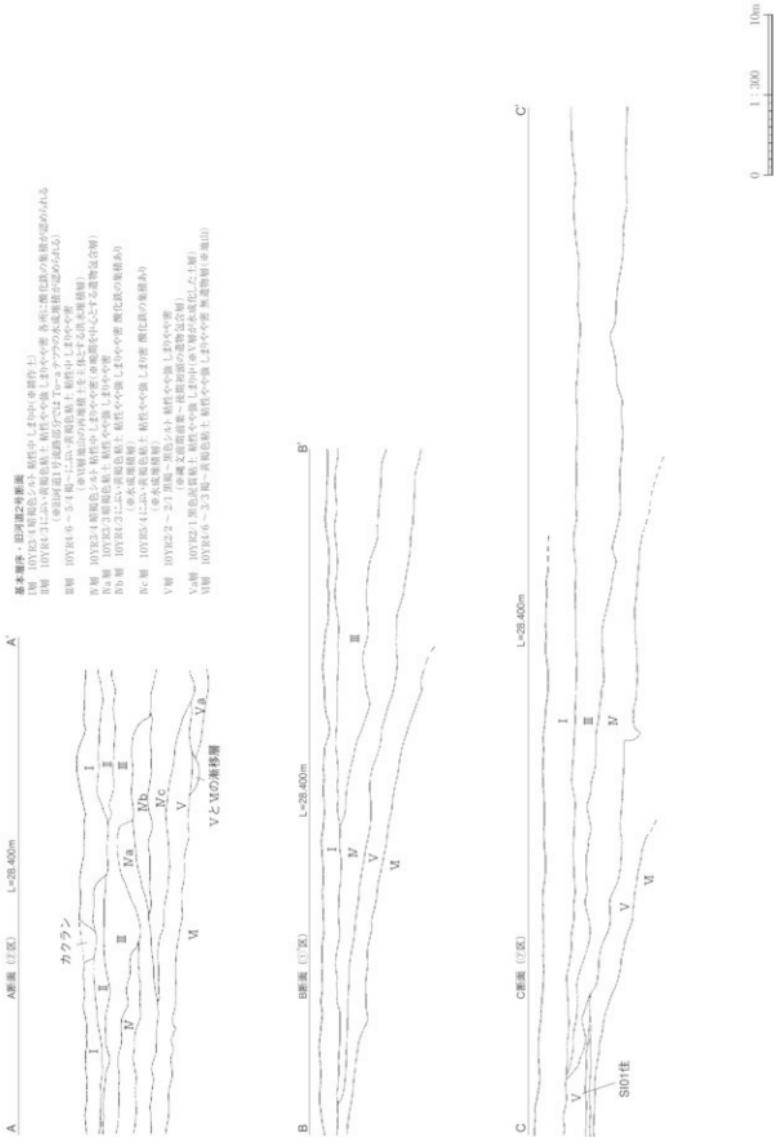
⑨区南西部(P251～254) 4個を検出した。SK11土坑の検出地の近隣に位置する。I・II層を除去した段階で、VI層上面で検出した。時期は不明であるが、堆積土の様相などから古代若しくはそれ以降と推定される。



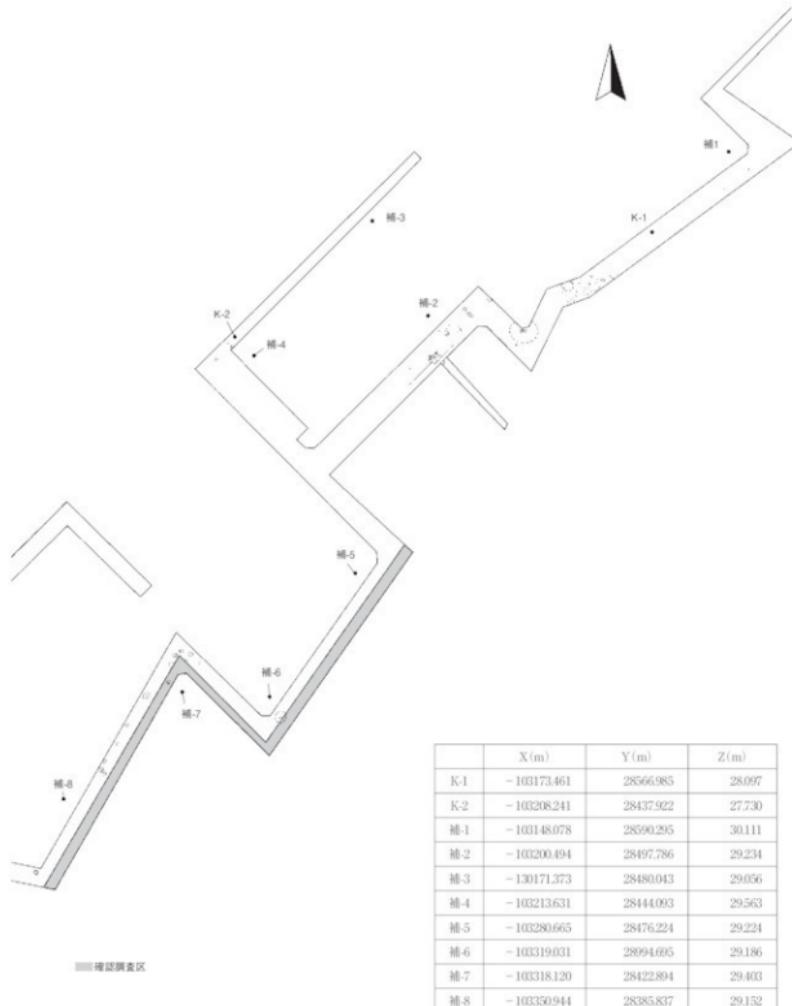
第4図 調査区位置図



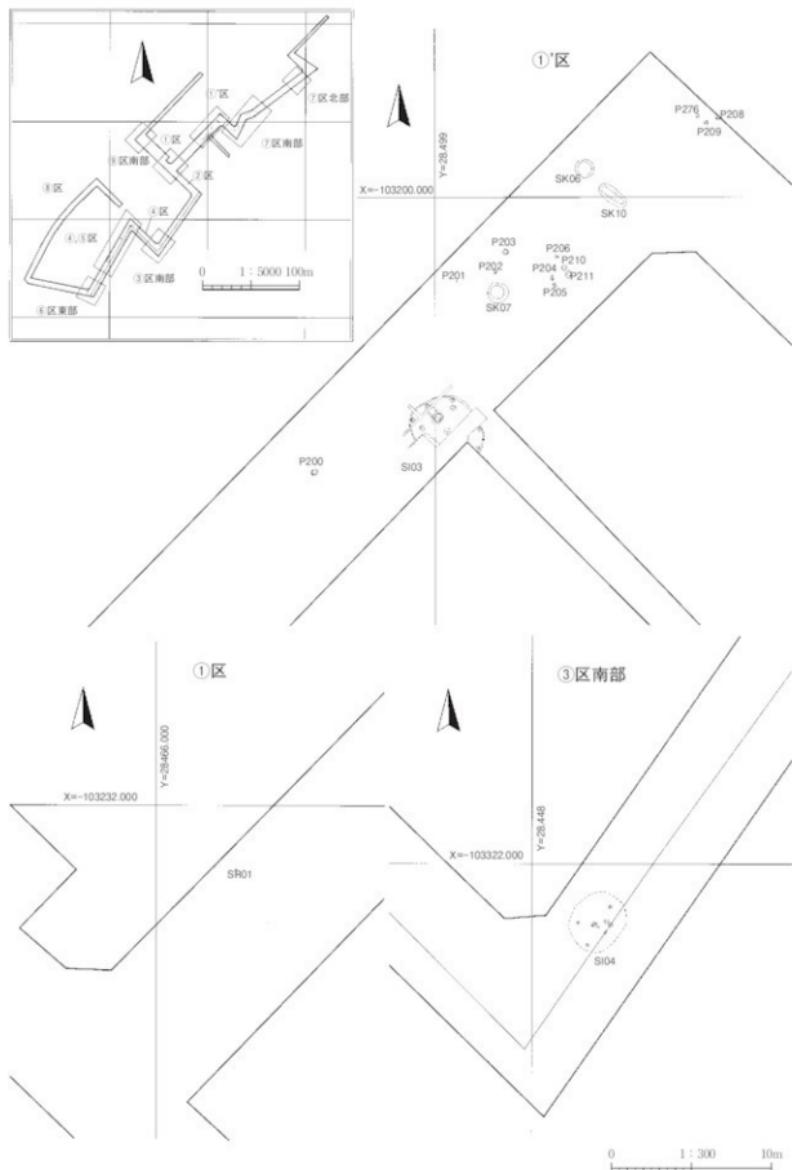
第5図 旧河道流路推定図



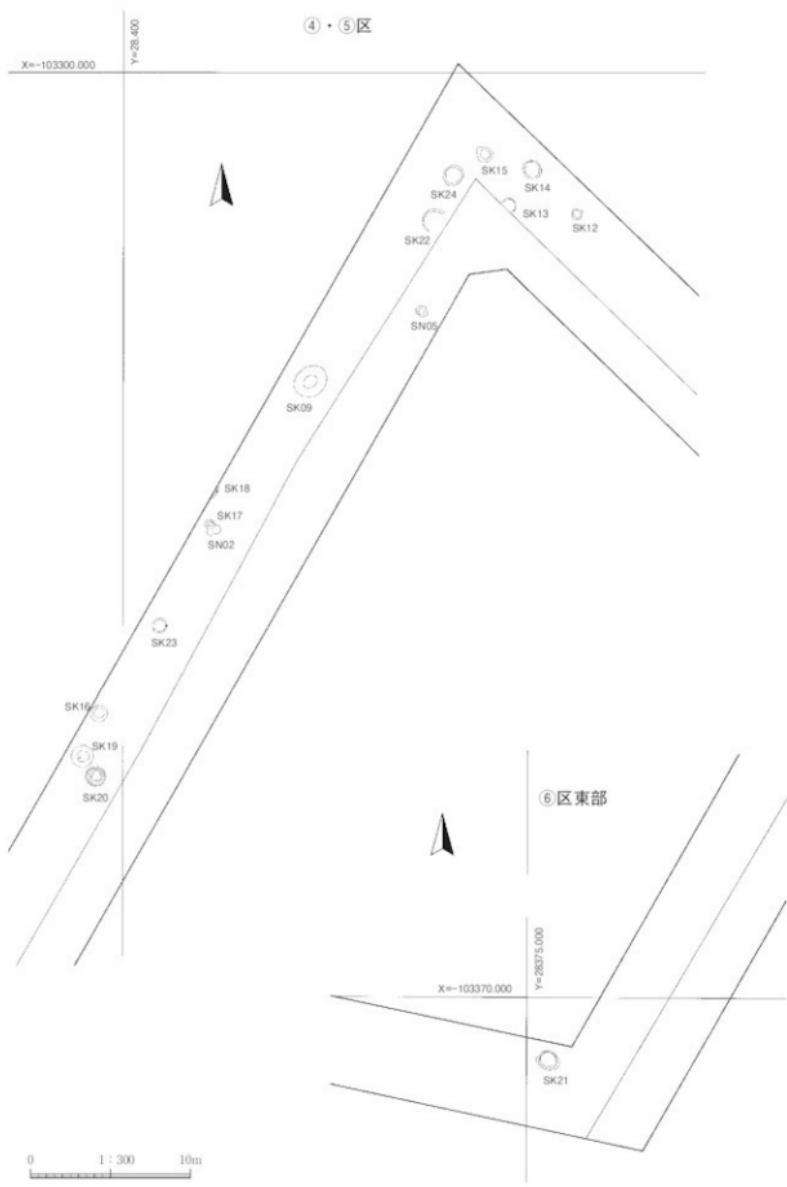
第6図 旧河道2号断面図



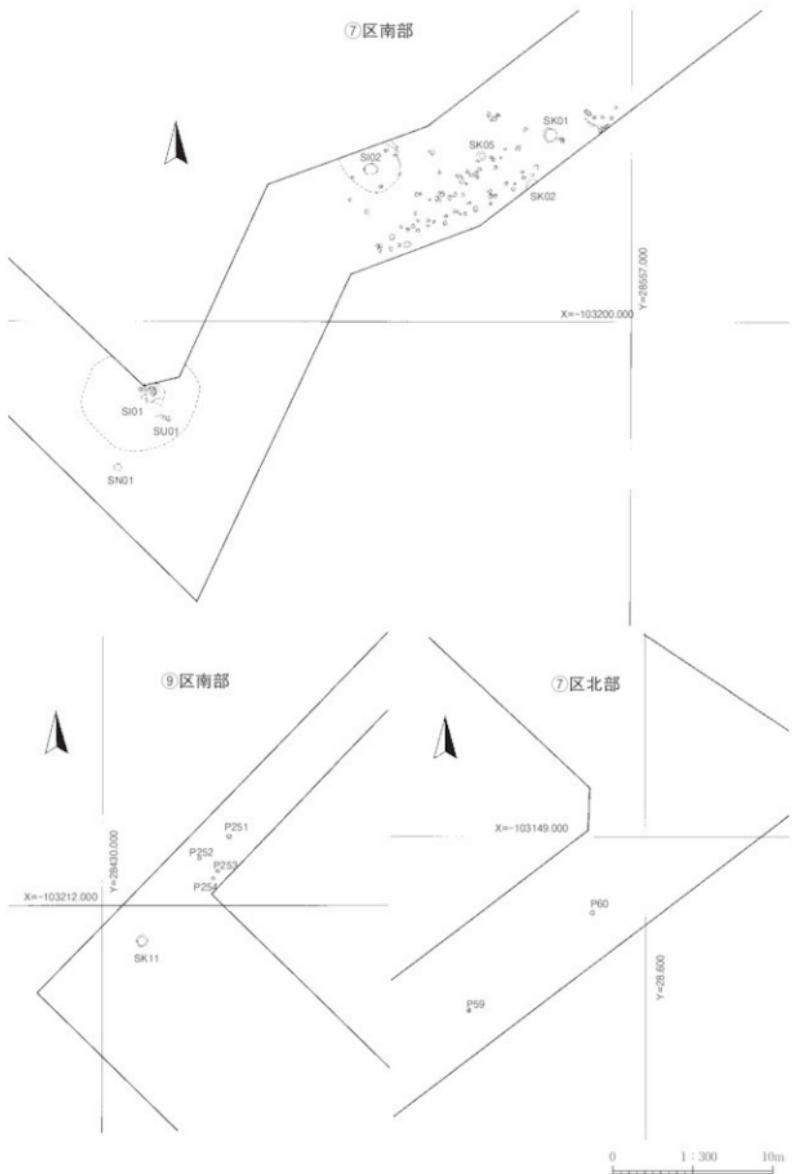
第7図 遺構配置図(1)



第8図 遺構配置図(2)

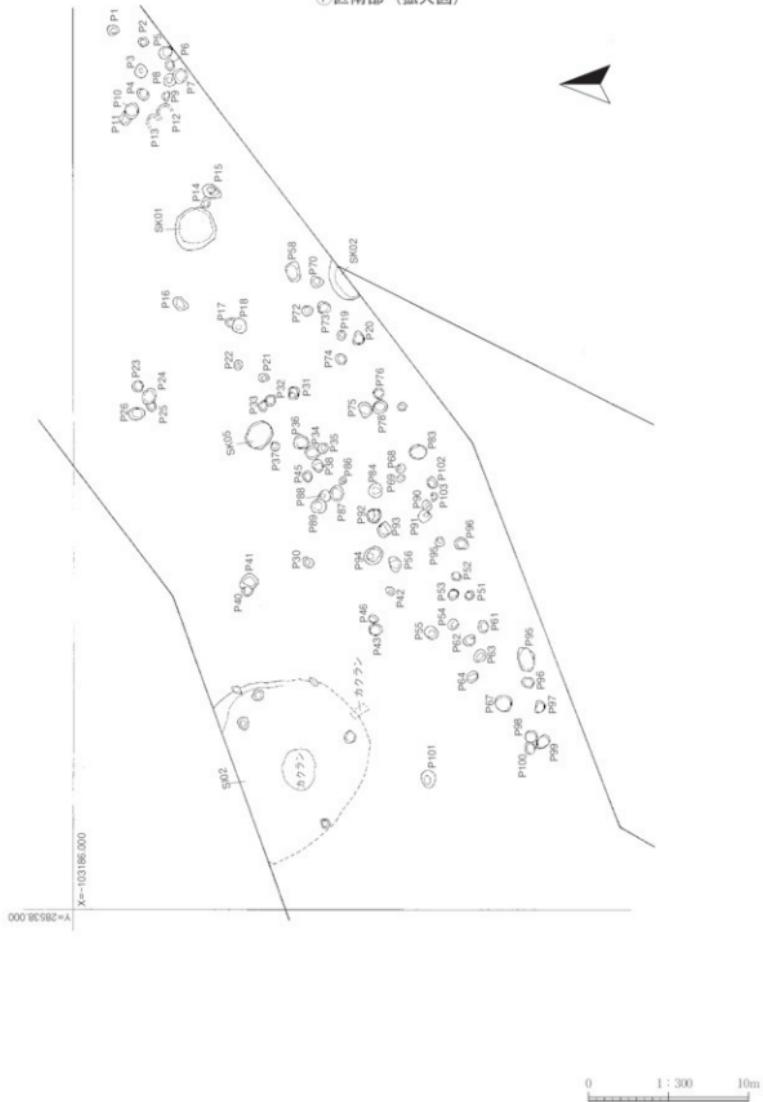


第9図 遺構配置図（3）

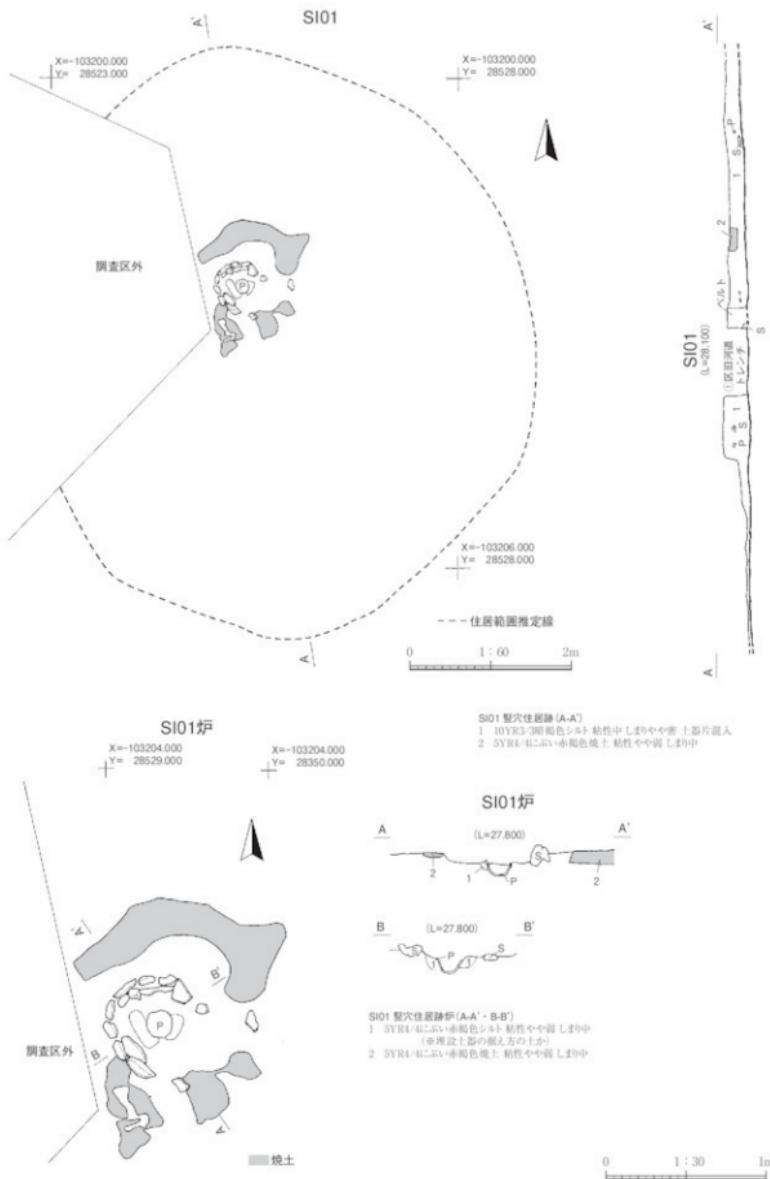


第10図 遺構配置図（4）

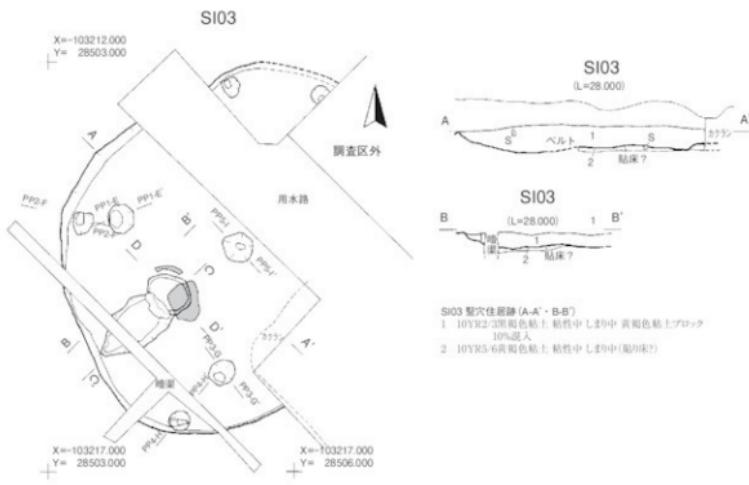
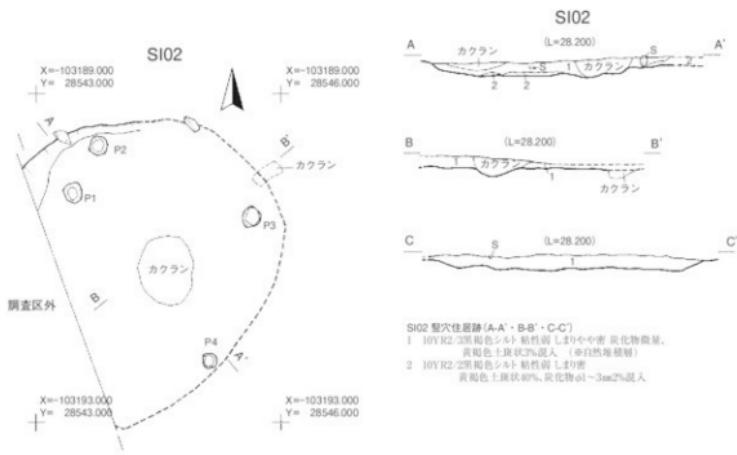
⑦区南部（拡大図）



第11図 潜構配置図（5）

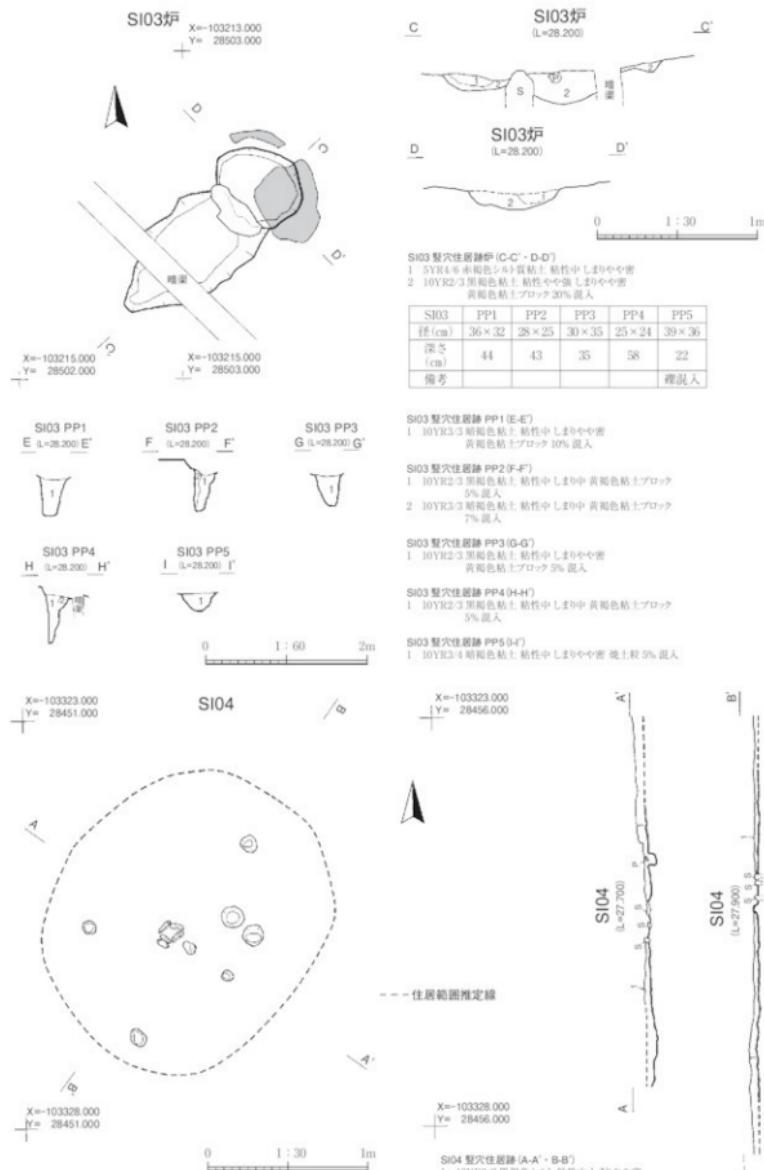


第12図 SI01壁穴住居跡

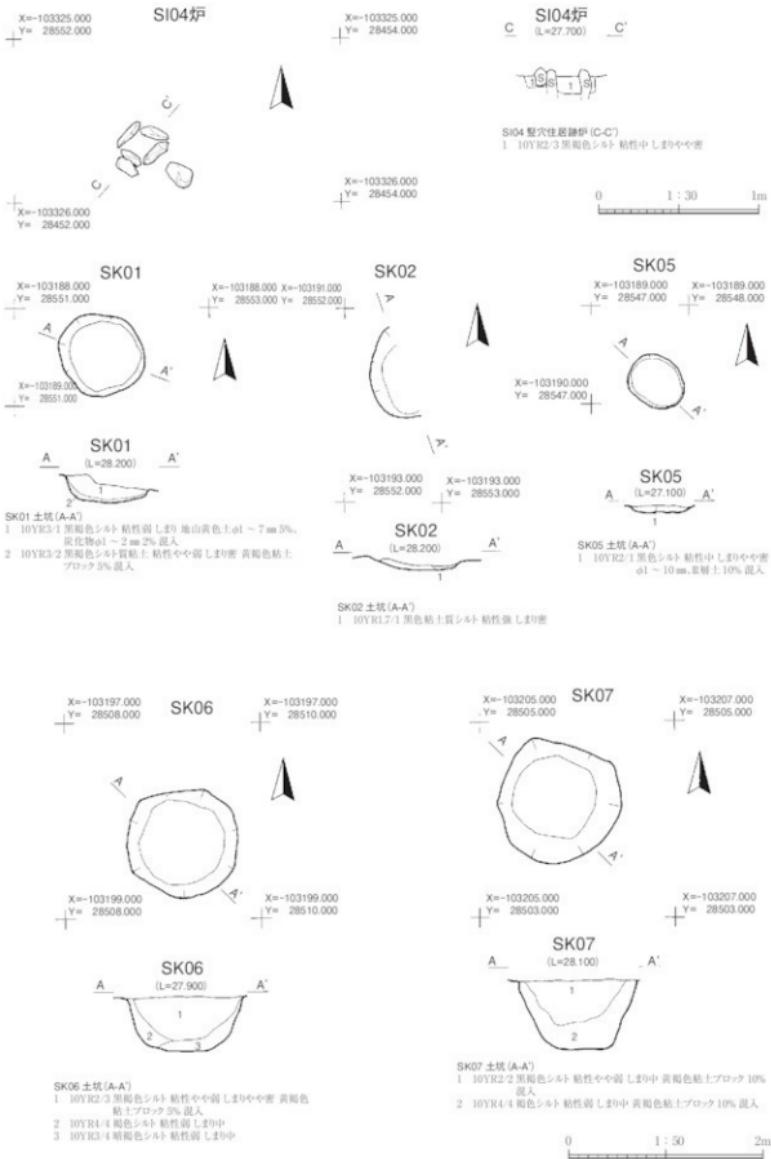


0 1 : 60 2m

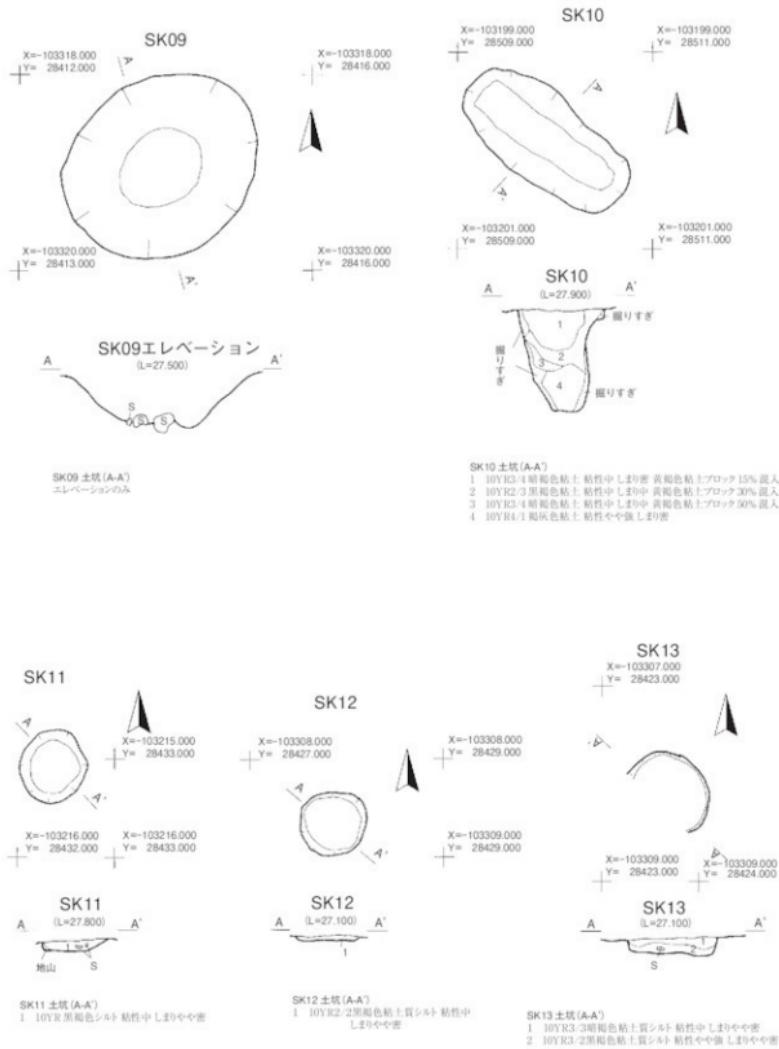
第13図 SI02・03穴住居跡



第14図 SI03・04竪穴住居跡



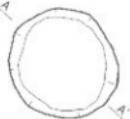
第15図 SK01・02・05~07土坑



0 1 : 50 2m

第16図 SK09～13土坑

X=103305.000 SK14  
Y= 28424.000



X=103307.000  
Y= 28424.000

X=103307.000  
Y= 28425.000

SK14  
(L=27.100)  
A S 3 2 1 A' 2 B  
5

X=103304.000 SK15  
Y= 28421.000



X=103306.000  
Y= 28421.000

SK15  
(L=27.100)  
A 2 3 1 A'

X=103304.000  
Y= 28423.000

#### SK14 土坑(A-A')

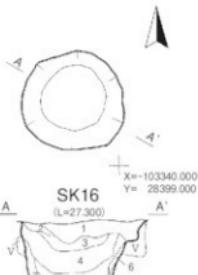
- 1 10YR3-2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり密
- 2 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性弱 しまりや密 寸2cm の炭化粧微量混入
- 3 10YR2-1 黑色シルト 粘性弱 しまりや密 寸5cm 未満の炭化粧微量混入
- 4 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性やや弱 しまり密 寸5mm の炭化粧微量混入
- 5 10YR2-3 黑褐色粘土質シルト 粘性中 しまり密

#### SK15 土坑(A-A')

- 1 7.5YR3-2 黑褐色粘土質シルト 粘性やや強 しまり密
- 2 10YR2-2 黑褐色粘土質シルト 粘性中 しまり密
- 3 10YR3-4 喀斯特灰岩 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密
- 4 10YR3-1 黑褐色粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密

#### SK16

X=103338.000 X=103338.000  
Y= 28398.000 Y= 28399.000



SK16  
(L=27.300)  
A A'

#### SK16 土坑(A-A')

- 1 10YR3-1 黑褐色シルト 粘性中 しまりやや密 (※V-V'層相当)
- 2 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性中 しまりやや密 (※V-V'層相当)
- 3 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや密 (※V-V'層相当)
- 4 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 (※V-V'層相当)
- 5 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 (※V-V'層相当)
- 6 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 黄褐色粘土小ブロック2% 混入 (※V-V'層相当)
- 7 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 (※V-V'層相当)
- 8 10YR2-2 黑褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 (※V-V'層相当)

#### SK17

X=103327.000 X=103327.000  
Y= 28405.000 Y= 28406.000



SK17  
(L=27.400)  
A 2 3 A'

#### SK18

X=103325.000 X=103326.000  
Y= 28405.000 Y= 28406.000



SK18  
(L=27.500)  
A 2 1 3 A'

#### SK17 土坑(A-A')

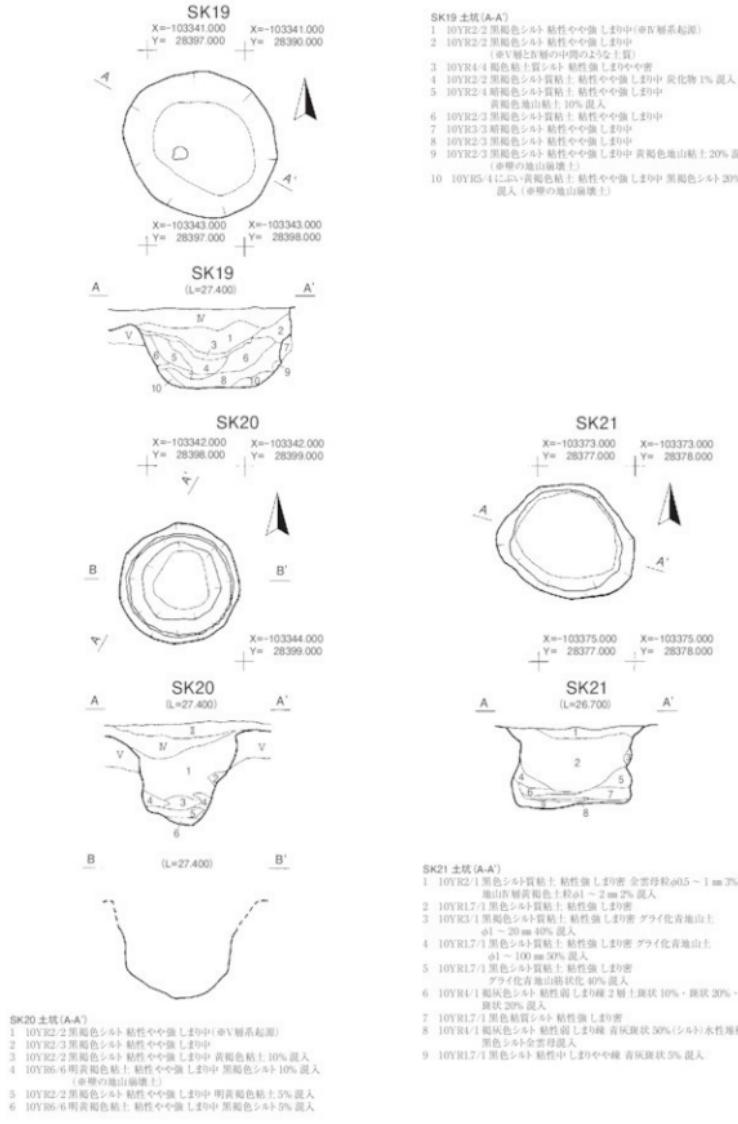
- 1 10YR2-2 黑褐色粘土質シルト 粘性やや弱 しまり密 V-V'層底状2% 混入
- 2 10YR2-1 黑色粘土質シルト 粘性強 しまり密 V-V'層底状10% ,  
1層底状3% 混入
- 3 10YR2-1 黑色粘土質シルト 粘性強 しまり密 V-V'層底状40% 混入

#### SK18 土坑(A-A')

- 1 10YR2-3 黑褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 (※V-V'層相当)
- 2 10YR2-3 黑褐色シルト 貨粘土 粘性やや強 しまりやや密  
(※V-V'層とV-V'層の遷移層)
- 3 10YR2-4 暗褐色粘土 粘性やや強 しまり密 (※V-V'層相当)

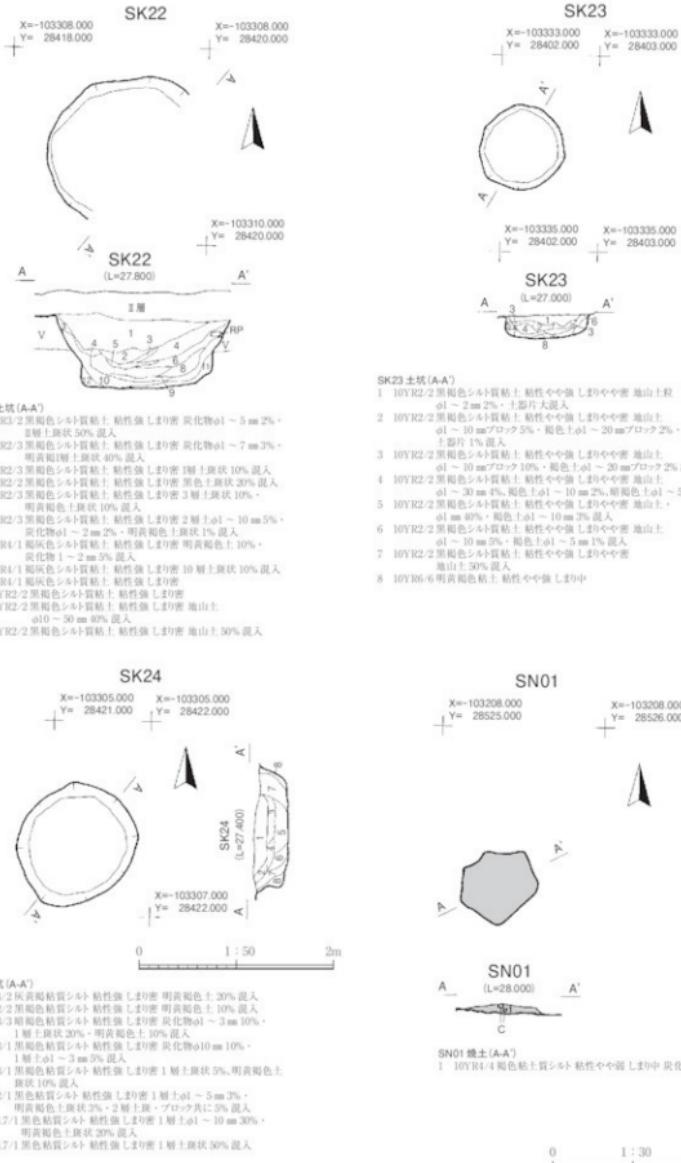
0 1 : 50 2m

第17図 SK14～18土坑

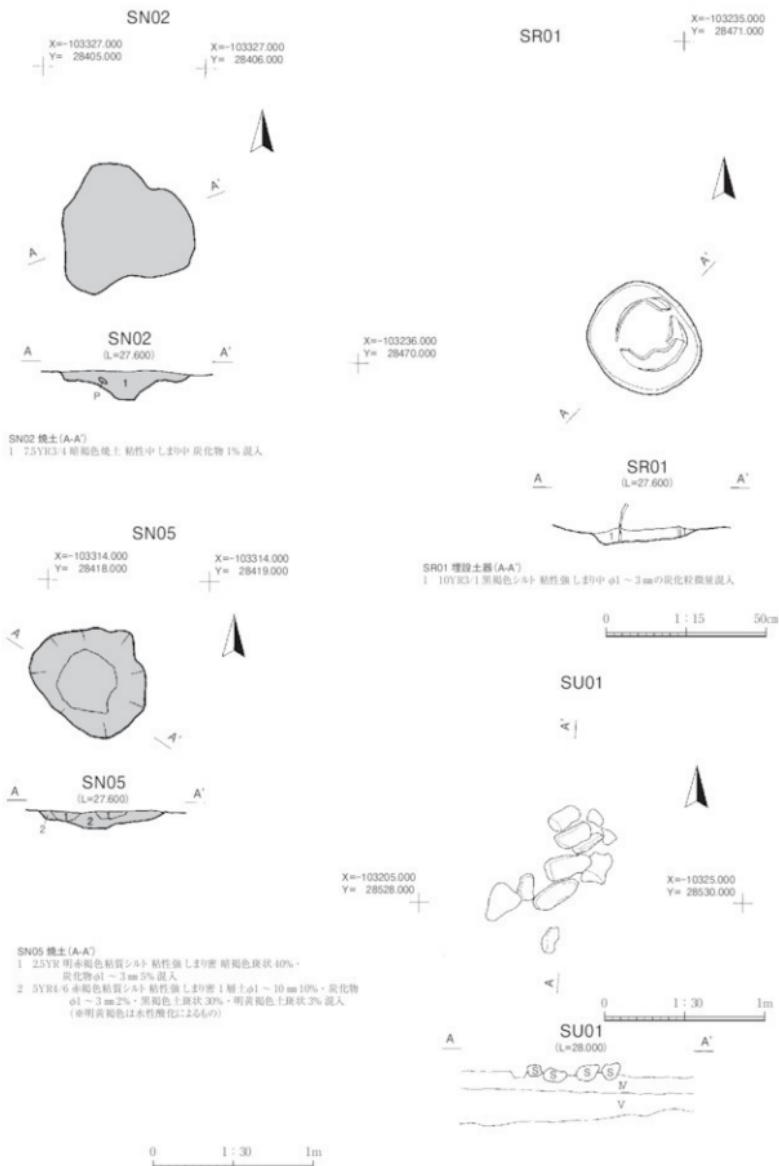


0 1 : 50 2m

第18図 SK19~21土坑



第19図 SK22～24土坑、SN01燃土



第20図 SN02・05燃土、SR01理設土器、SU01集石

## V 出 土 遺 物

遺物は大コンテナ（42×32×30cm）で約28箱分が出土した。内訳は、縄文土器大コンテナ約16箱（約226kg）、弥生土器小コンテナ（42×32×10cm）約1箱分、古代土器9号ビニール袋1分、陶器2点、石器類大コンテナ約11箱分（410点）、土製品17点である。ここでは、遺構内出土と遺構外出土を合せて扱うこととする。

### 1 縄文土器・弥生土器

縄文時代前期前葉～弥生時代前期（以後本章では「時代」は省略する）までの時期幅のものが出土している。出土量は縄文晚期後葉～末葉、次いで縄文中期末葉、縄文中期中葉～後葉の順が多い。層位的傾向としては、V層より縄文中期中葉～末葉主体に前期前葉～後期初頭まで、IV層より縄文晚期中葉～末葉主体、III層より晚期中葉～弥生前期が出土している。

掲載基準を明記すると、①遺構出土、②層位的資料、③完形・略完形・大きめの破片、④出土点数は少ないと判断したもの、の順に優先して選択し220点を掲載・図化した。土器型式への比定に際しては、『縄文総覧』（2008：小林）を基本文献に参考とした。以下には各時期の土器の概略を記述することとし、土器個々の内容については、基本的に遺物観察表を参照いただきたい。

#### （1）縄文前期前葉・中葉の土器

縄文前期前葉大木2a・中葉3式に相当する土器である。全体的な出土量としては少量である。器種は、深鉢以外認知していない。

【前期前葉】：前期前葉と推定される土器を集めた（24～26・31・128～134・141・142・220）。全て小破片で全体の器形を窺える資料はない。大木2a式に比定できそうなものとしては24・25・128・129・141が挙げられる。特徴としては、単軸絡条体第1類や不整撫糸文（※単軸絡条体第3類と推定されるものを含むが全てではない）、羽状縄文（非結束、結束の両者がある）などが挙げられる。胎土中に纖維が混入するものは6点認められるが半数以下であることから、本遺跡資料からは纖維混入の有無が絶対的な当該土器抽出のメルクマールにはなり難いと言える。出土地は、SK21土坑・SK24土坑を除き、⑤区V層から主体的に出土している。SK21土坑は埋土最上位の1層に中摺テフラの可能性がある黄色の粉末が少量混入し、それより下位の埋土より24～26が出土している。なお、今回の調査で大木2b式土器は認知していない。

【前期中葉】：前期中葉大木3式と判断した資料で今回の調査では2点出土した（126・127）。126は山形状口縁を呈し、RL横位施文後に細い粘土紐による貼付隆線が付加され、隆線上には器面に達する深く細かい刺突文が列で施される。胎土にはわずかに纖維の混入が認められる。127は付加縄文を施文し、沈線による弧状にモチーフされる土器であるが、大木3式に比定するには若干躊躇がある。胎土中に纖維の混入は認められない。これらは⑤区V層から出土した。

#### （2）縄文前期末葉～中期初頭の土器

前期末葉大木6式～中期初頭大木7a式の時期幅と判断される土器を集めた（65～67・115～125・

135・137・140)。出土量は少ない。器種は全て深鉢で、当該時期に特徴的に見られる球胴型深鉢は未確認にある。以下には特徴的なものを取り上げ記載する。

【前期末葉】: 114は⑤区V層出土で、折り返し口縁で貼付隆線が付加され、口縁下に沈線による弧状氣味のモチーフが描かれる。124・125は、④区V層から一括出土した同一個体で、接合しなかったことから別々に掲載した。波状口縁で、口縁端部に半裁竹管文が施文され、口縁～胴部には半裁竹管工具による沈線で三角形を基調としたモチーフが描かれる。そして、胴部文様の基点にはボタン状貼付文が付加される。114は大木6式新段階、124・125は大木6式古段階に相当しよう。

【中期初頭】: 116は横位隆帯の上に刺突文が施文され、胴部には綾位の綾繩文(LR+R)が施文される。117と118は同一個体で、口縁部に沈線文(太目)、頸部に竹管文、胴部RL・LRによる結束羽状繩文が施文される。その他として、115・119～123・135に見られる多条に沈線が引かれた櫛引文とした土器は、大木7a式もしくは大木6式と推定されるが、土器型式を特定できない。

### (3) 繩文中期中葉～末葉の土器

縩文中期中葉～末葉大木8a・9・10式が出土している。一定量の出土を得られている。なお、大木8b式は認められない。器種は、鉢3点、浅鉢1点を除き全て深鉢と捉えられる。

【中期中葉】: 中期中葉大木8a式に比定される土器を集めた(19・64・79・110～113・148・149・177・178・205～210・218・219)。⑤区V層や旧河道2号より比較的多くの資料が得られた。なお、明確に大木8b式と特定できるものは見られない。特徴としては、口縁形状がキャリバー状を呈する器形と、粘土紐の貼付隆線や沈線による文様施文が挙げられる。胴部地文は全て綾回転である。以下には代表的なものを取り上げ記載する。149・178・209・218などは、口縁部に太目の粘土紐の貼付による横位連結渦巻文が見られ、胴部には単節の綾回転施文後に細目の粘土紐による貼付文様が施される。これらは大木8a式新段階に相当しよう。219は口縁部上半に綾位の原体圧痕文が連続施文され、LR横位施文後に隆線によるクランク状文が貼付される。そして、胴部にはLR綾回転施文の後に綾方向に粘土紐貼付の隆線が垂下し、隆線上に刺突文が施される。これらの特徴から大木8a式古段階若しくは大木7b式との過渡期と考えられる。

【中期後葉】: 中期後葉大木9式に比定される土器を集めた(8・16～18・30・77・78・97～107・109)。SI04住やSK23土坑及び⑤区V層からの出土を中心とする。本遺跡資料の主体は、地文(LR・RL・RLRによる綾回転)施文→沈線による楕円形文若しくは逆U字状文→磨消繩文の施文順をみるものが主体で、大木9式新段階に相当する。例外的なものとしては、30・105・107など隆線により区画若しくは渦巻文が構成されるものや、100の沈線による早蕨状のモチーフをみるもので、大木9式古段階の可能性がある。

【中期末葉】: 中期末葉大木10式と推定されるものを集めた(1・4・6・10・11・14・22・23・29・34・35・58～63・74～76・87・88・95・96・108・202～204・216・217)。後期初頭との分離が難しいものも含めた。出土遺構としてはSI01・02・03住をはじめ、SK16・22土坑、SN02焼土遺構が挙げられる。遺構外は、旧河道2号IV層・V層を中心に①・①'・②・④・⑤・⑦区など、広範囲にわたり出土している。次の後期初頭門前式と比較すると大木10式は、旧河道2号の堆積土や、旧河道2号の近隣から検出された遺構に多い特徴がある。文様の施文順序は地文→沈線による区画文様→磨消繩文をみると多くのが多く、明確な充填繩文は認められない。地文の種類は、RLR、単軸絡条体第1類、LR、RLの順に多い。0段多条の原体を用いる62は、胎土の様相が大木10式に類似するが異時期の可能性もあることを補足する。大木10式を新古に分離すると、今回の調査では大木10b式に比定される

新しい段階（6・11・14・58・74・75・95・96など）のものが多い様相で、明らかに大木10a式に比定できる古い段階のものは抽出できない。

#### （4）縄文後期の土器

縄文後期の土器は、中葉1点以外は全て初頭である。文様から当該時期と判断されるものを見る限り、出土量は多くない。器種は全て深鉢である。

【後期初頭】：後期初頭門前式と推定されるものを集めた（57・73・86・89～94・215）。出土地は④・⑤区V層を主体とする。量的には少ない。92や94は、連鎖状隆起線文とボタン状貼付文の属性を持つ。89や90は磨消縄文手法によるY字状文の一端と見て取れる。破片資料を持って細分は難しいが、稻村氏の提示した門前式編年（稻村:2008）に比定させると門前式第2～3段階の資料が中心と判断される。

【後期中葉】：後期中葉と推定される土器は85の口縁突起1点のみである。④区V層から出土した。側面から貫通孔が開けられた装飾突起で、精巧な胎土で施文される縄文原体の節が細かい特徴がある。

#### （5）縄文晚期中葉～弥生時代前期の土器

縄文晚期の土器は今回の調査で最も多く出土している。大洞C2～A'式に相当し、弥生前期の青木畠式との過渡期と推定されるものが含まれる。なお、今回の調査では大洞B～C1式は認められない。主な出土地としては①・⑦区の旧河道2号Ⅲ～Ⅳ層が挙げられる。また、特異な出土地として、晚期中～後葉の土器が一定量出土した⑧区の中央部や南側の地点が挙げられるが、黒褐色泥質土が狭い範囲に分布することから、精査当初は竪穴住居跡など遺構の存在を想定した地点で、晚期中～後葉の単純包含層の様相を呈する。器種は、本時期より多様化の傾向で捉えられる。そして、鉢・浅鉢・壺などの口縁内面には横位の沈線の施文が顕著で、2条引かれるものもある。

【晚期中葉】：晚期中葉大洞C2式に比定される土器で、一部後葉との線引きが困難なものも含めた（36・46～52・83・167～169・192・199・200）。48～52は⑧区Ⅳ層出土の一括資料である。器種は、深鉢、鉢、浅鉢、壺が認められる。施文技法は、地文→沈線による雲形文などのモチーフ→磨消縄文→沈線引き直しによる。地文は、縄文原体を把握できる資料全てLR横回転である。刻み目が特徴的に見られ、口縁端部に持つもの（49・52など）や、沈線内に刻み目を持つもの（83・168・169）がある。

【晚期後葉】：工字文などの特徴から晚期後葉大洞A式と判断したものを集めた（27・33・37・44・45・163・190・191・193～197・212）。旧河道2号Ⅳ層から主体的に出土している。器種は深鉢、鉢、浅鉢、壺、四脚付浅鉢が認められる。地文は横回転で、原体の種類は1点RLRが認められたが、他は全てLRである。

【晩期末葉】：変形工字文などの特徴から晩期末葉大洞A'式と判断したものを集めた（21・・40・43・・143・144・146・155・158・164・166・175・176・180・183～188・211）。出土地は旧河道2号Ⅲ層・Ⅳ層を中心とする。器種は深鉢、鉢、丸底鉢、浅鉢、壺、広口壺などである。地文は全てLRの横位回転である。局所的に地文をナデ消しているものがある。43と158はAMS年代測定を実施した。43は $2,483 \pm 26$ yrBP、158は $2,466 \pm 26$ yrBPの測定結果が得られている。

【晚期後葉～弥生前期の幅で捉えた土器】：晚期後葉大洞A式～弥生時代前期の時間幅で捉えられる土器を一括する（32・38・39・42・54～56・69・81・145・147・150～154・159～162・165・172・173・179・180・181・185・189）。その中で、弥生前期の青木畠式に相当すると考えられる土器として38・54・55・56・150・179を挙げておきたい。それ以外は、口縁形状が小波状を呈し口縁部が無文の深鉢を縄文晚期後葉～弥生前期と幅を設けて捉えたが、それらは凡そ晩期末葉の範疇に収まると思

われる。ただ、微妙な要素で縄文晩期末葉と弥生前期を区分する知見に乏しいこともあり、弥生前期までの可能性を提示した。出土地は旧河道2号Ⅲ層・Ⅳ層から主体的に出土している。42はAMS年代測定を実施したが、 $2,800 \pm 26$ yrBPの測定結果が得られている。

## 2 土 師 器

古代の土器は磨滅した小破片のみで、底部の様相が把握できる221・222の2点を掲載した。221・222は、内面黒色処理が施され、底部回転糸切りによるロクロ整形の坏である（※222については鉢の可能性もある）。何れも平安時代9世紀代と推定される。

## 3 陶 器

陶器2点が出土した（223・224）。223は①'区I層出土で、胎土中に海綿骨子の混入が認められる。産地や時代は特定できないが、東北産の中世陶器と仮に推定しておきたい。224は⑧区北部II層から出土した。この⑧区はTo-aテフラが入る旧河道1号を検出しているが、旧河道1号の検出地よりやや北側より出土している。常滑産の甕で時期は12世紀代と推定される。

## 4 土 製 品

土製品は17点出土した。内訳は、土偶4点、ミニチュア土器2点、円盤状土製品10点、三角形土製品1点である。

### （1）土 偶

土偶は4点出土した（225～228）。出土地は⑦区南部Ⅲ・Ⅳ層中心である。部位別にみると、225が結髪土偶の顔、226と228が右足部、227が肩部？である。その内、228は中空で、他の3点は中実である。時期は、225は晩期後～末葉、その他は晩期中葉～末葉と推定される。

### （2）ミニチュア土器

ミニチュア土器は2点出土した（229・230）。229は⑤区V層出土で無文の脚付鉢である。時期は特定できないが、出土層位や胎土の様子から縄文中期と推定される（中期中葉～末葉の可能性が高い）。230は⑦区中央部IV～V層出土の鉢若しくは深鉢の胴部下半～底部である。地文はLR継回転が施されている。詳細な時期は不明であるが、原体が継回転であることと、胎土の様子から縄文中期と推定される。

### （3）円 盤 状 土 製 品

円盤状土製品と認知したのは10点である（231～240）。⑤区IV～V層から1点、⑤区V層から3点、⑦区南部IV層から4点、⑧区IV層から1点、旧河道2号（①'区）IV～V層より1点である。土器片を再利用し、周縁を打ち欠き円形に整形されている。その内、縁全周が磨かれているもの（231・232・235・238）、縁の一端が磨かれているもの（233・236・237・240）、磨かれた痕跡が無く打ち欠きのまま（234・239）がある。規模は、長さ（長径）2.7～4.8cm、幅（短辺）2.5～4.3cm、厚さ0.5～0.9

cm、重さ6.7~17.9gである。時期について、帰属時期を特定できる文様はないが、以下には胎土の様相などから大凡の時期を推定してみる。胎土中に纖維が混入する238・239は縄文前期前葉と推定される。撚糸文が施文される234・237は、胎土の様相も加味すると縄文中期末葉～後初頭と推定される。235は出土地・層位の共伴関係から縄文晚期中葉～後葉の可能性が高い。231~233・236は、胎土の様相や出土層位から縄文晚期後葉～末葉の可能性がある。

#### (4) 三角形土製品

土器片を再利用し、周縁を打ち欠き三角形状に整形されたものである(240)。⑤区V層から出土した。規模は長径3.0cm、短径2.8cm、厚さ0.9cm、重量9.3gである。地文にLRL複節が用いられていることや胎土の様相から縄文中期末葉の可能性がある。

### 5 石 器

石器は遺構からの出土点数は少なく、大半が包含層及び旧河道からである。その一覧は第3表の通りである。包含層は縄文晚期後半主体のIV層と、縄文中期主体のV層からなるが、それらの出土量はほぼ同じである。

主な石器を図化しており、各器種の概要は以下の通りである。

- ・石鎌(242~249)。基部形状が有茎と凹基がある。未製品・失敗品段階のものが多数認められている。
- ・尖頭器(250・251)。全て欠損し基部側のみ確認できており、全体形状は不明である
- ・範状石器(252・253)。表裏面共に縁辺部を中心に刃部が作出されている。
- ・石匙(254・255)。どちらも縦型の形状である。
- ・搔器(256~259)。不定形のものまで含めている。刃部が基本的に縁辺に作出されている。
- ・磨製石斧(260・261)、磨製石斧未製品(262~269)。完成品と未製品では、未製品の方が多い。
- ・敲磨器類：礫を用いた石器は数多く出土している(270~303)。分類基準は以下の通りである

I類：礫の周縁部に敲打痕が認められるもの。 II類：礫面に凹痕が認められるもの。

III類：礫の扁平な面に磨面が認められるもの。 IV類：I + II類の痕跡が認められるもの。

V類：I + III類の痕跡が認められるもの。 VI類：II + III類の痕跡が認められるもの。

VII類：I + II + III類の痕跡が認められるもの。 VIII類：特殊磨石と称されているもの。

基本的にI~V類の割合が多く、組み合わせたVI~VIII類はそれよりは少なくなる。また、VIII類は主体時期となるV層だけで無く、IV層からも確認されている。

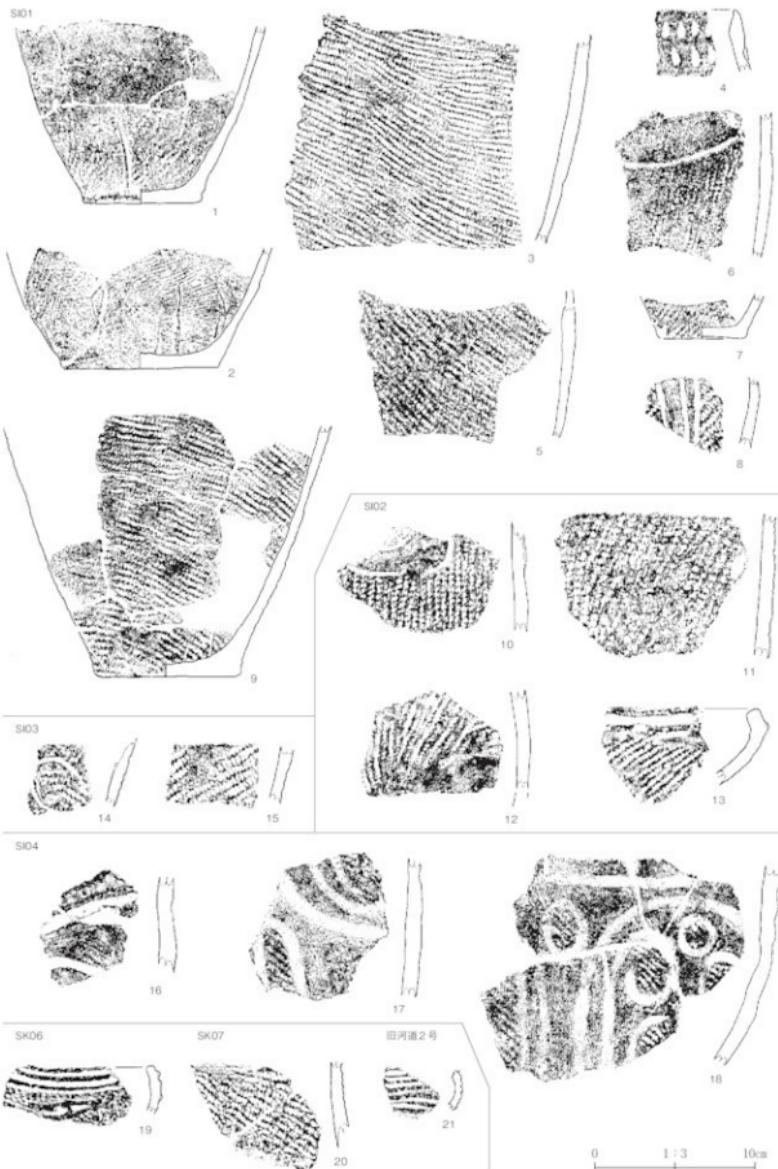
- ・石鍤(304~306)。端部もしくは両端部に剥離による抉りが認められる。
- ・礫器(307~310)。縁辺部に剥離が認められるものである。
- ・石皿(311~316)。全て欠損品である。
- ・石製品(317)。石皿を模倣したものである。

#### 石器材料について

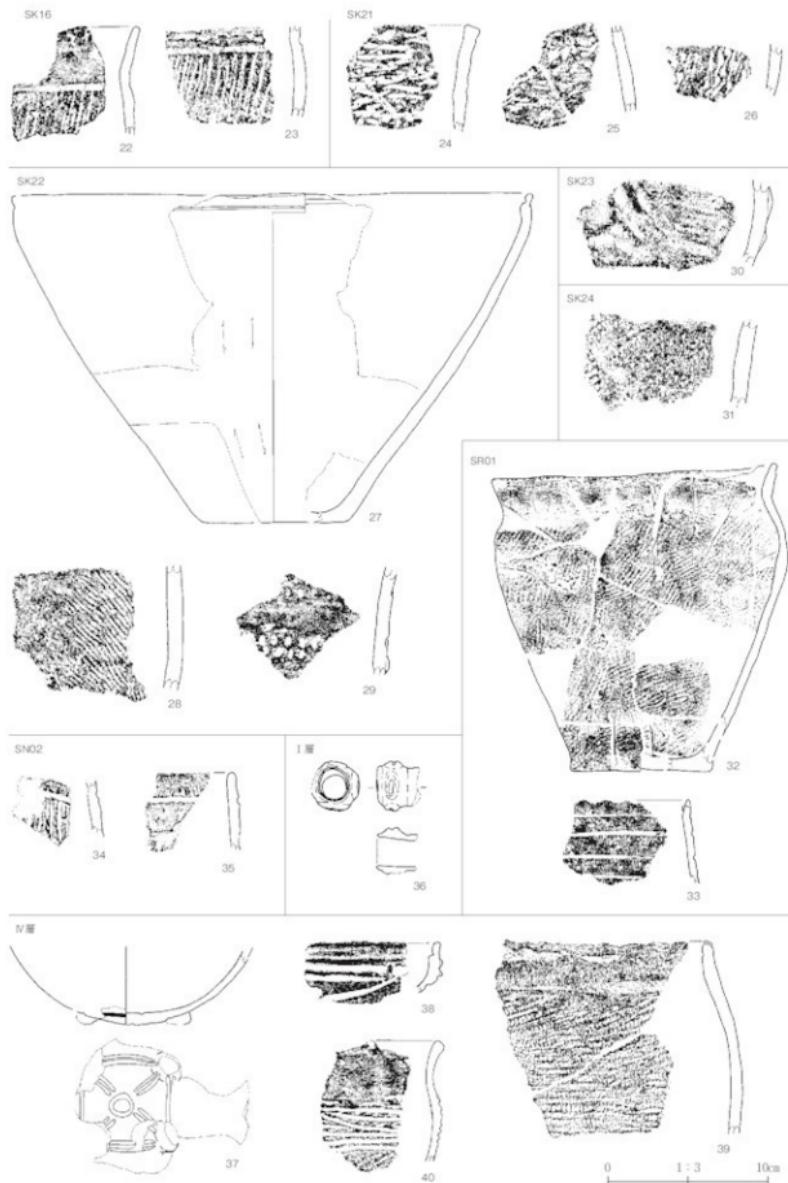
石器に使われた石器材料は、剥片石器と礫石器では大きく異なる。剥片石器は頁岩を主体に、瑪瑙、赤色頁岩、黒曜石が用いられている。礫石器はデイサイトを主体に用いられている。今回の調査で得られた成果は、過去の成果と概ね同じ傾向である。ただし、今回の調査では黒曜石の出土量が多く、産地は北上系産である。

第3表 石器組成表

	石頭	尖頭器	石刃	刮器	施狀石器	楔形石器	調片	チップ	石核	磨製石斧 磨製石斧 品類	最磨石							禮器	石錘	台石	石組	計		
											I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII						
											5	2	8	5	1		1		1	2	40			
S101	1	1			1		13					2	1	1								4		
S102																								
S103	1			1			6					1	3	4	1	1					1	1	20	
S104									1						1	1			1			1	5	
SK06		1						1															2	
SK07	1						2																3	
SK08											1	1											2	
SK09												1											1	
SK11											1		1					1					3	
SK16														1									1	
SK18														1									1	
SK24		1																					1	
SR01		1																					1	
SN02							1					1											2	
P202							1																1	
P211	1																2						1	
1号集石																						2		
河底土 <small>(下)</small>	I						7		1														8	
	II																						0	
	III	2			1		10				2	1	1	1							1	19		
	III~IV						1				1	1	1	1	1						1	1	8	
	IV	2	1	6			26	2	1	7	11	16	8	5	6	2	1	4	3	5	1	16		
	III~V						2																2	
	IV~V	1					11	1			4	3	2		1								23	
	V	2	2	7			21	2	2	1	26	10	12	5	4	2	3	5	1	2	5	112		
	黑色土																					0		
	不明						3															3		
不明				1			2				1	2	3	4	1	3						1	16	
							8		2		1			2									13	
	計	11	3	2	19	1	1	123	1	7	4	11	58	39	47	20	16	6	4	10	6	3	15	3 410



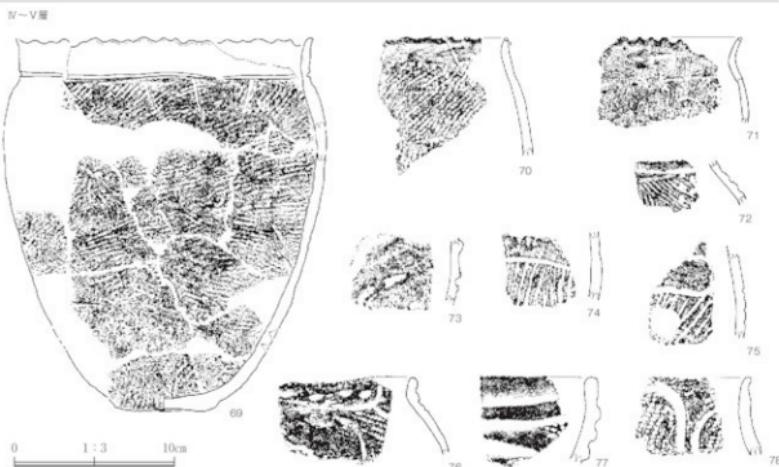
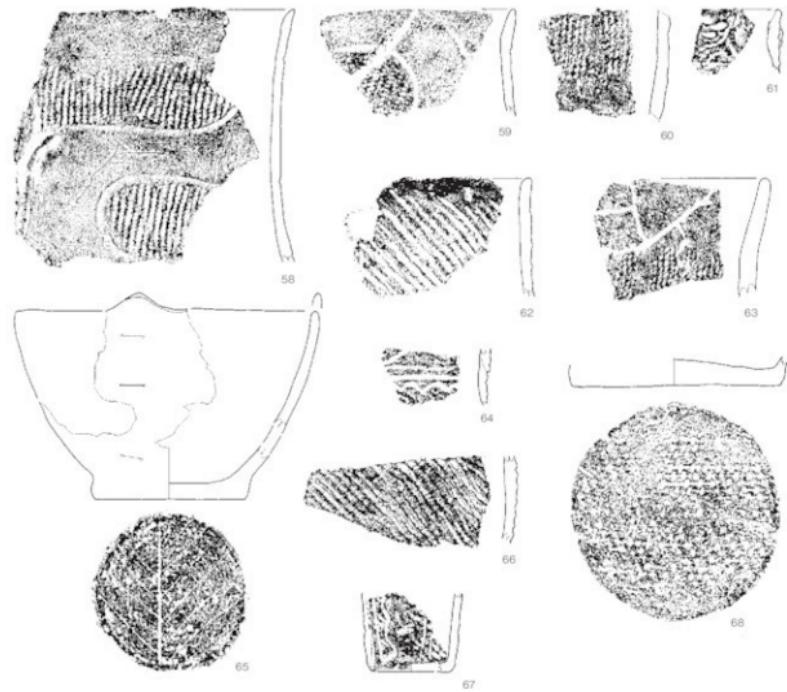
第21図 出土土器 (1)



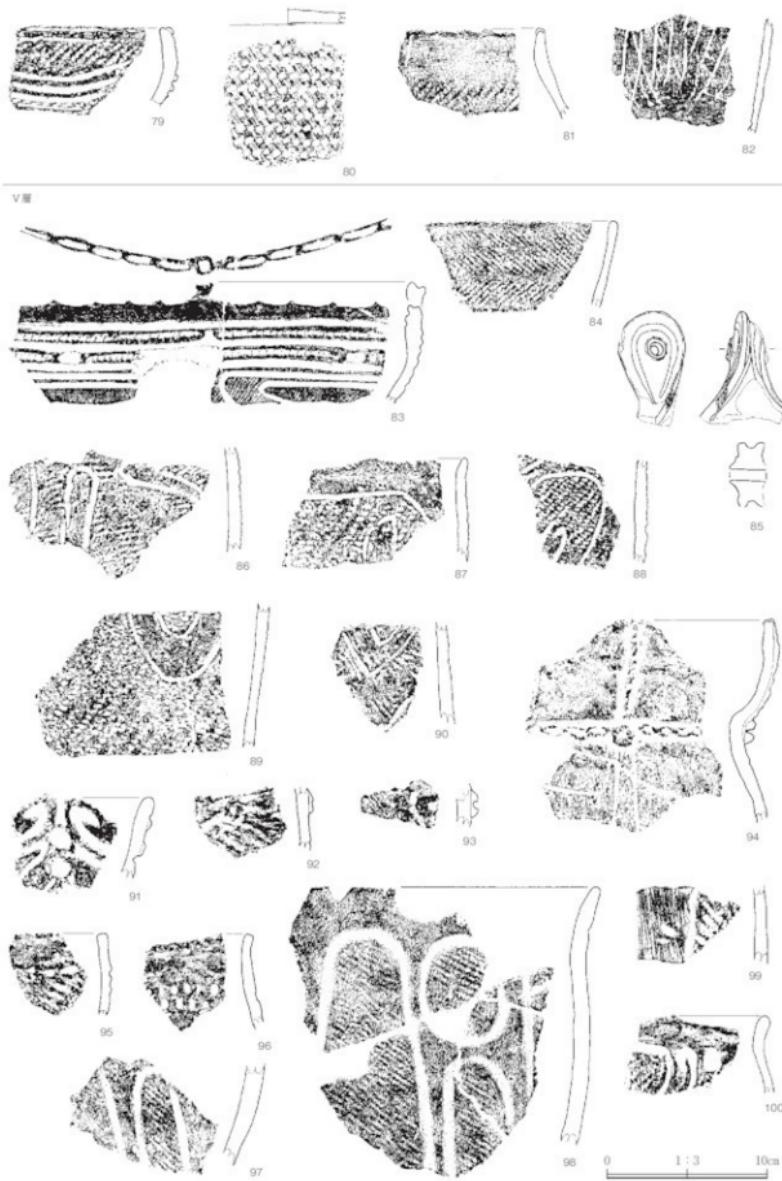
第22図 出土土器 (2)



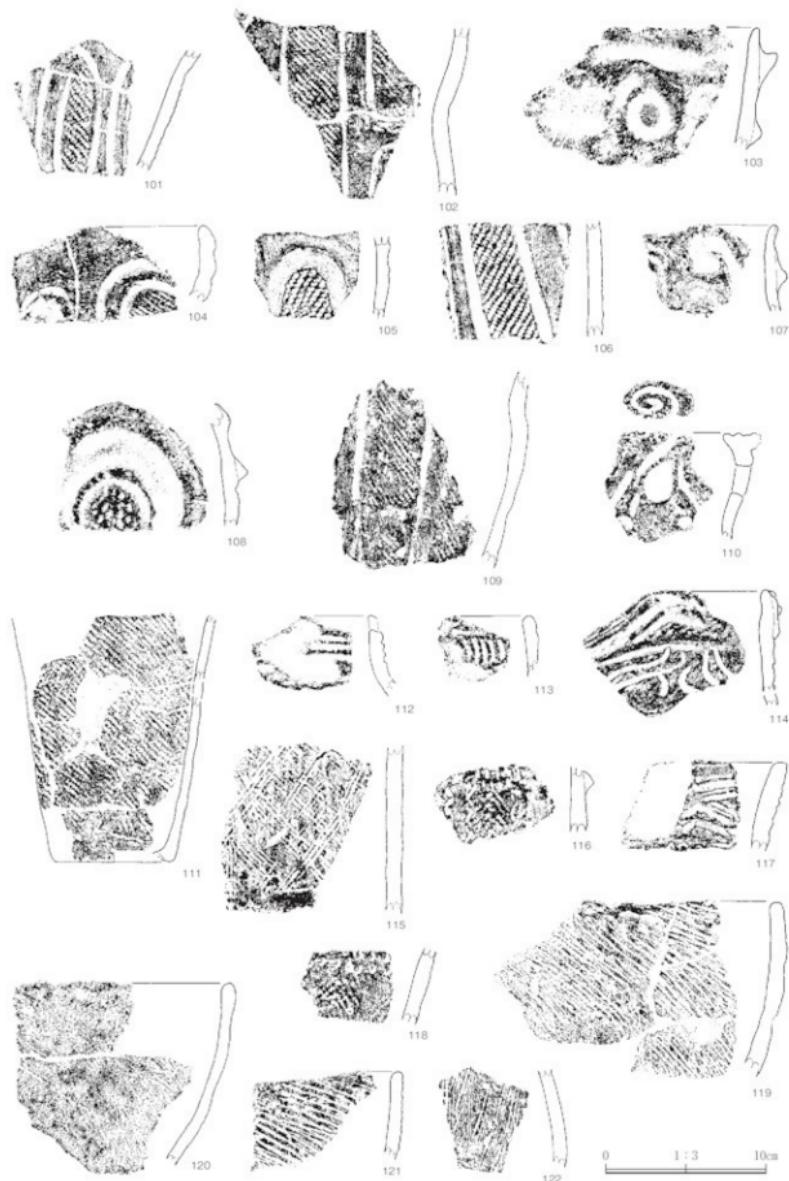
第23図 出土土器 (3)



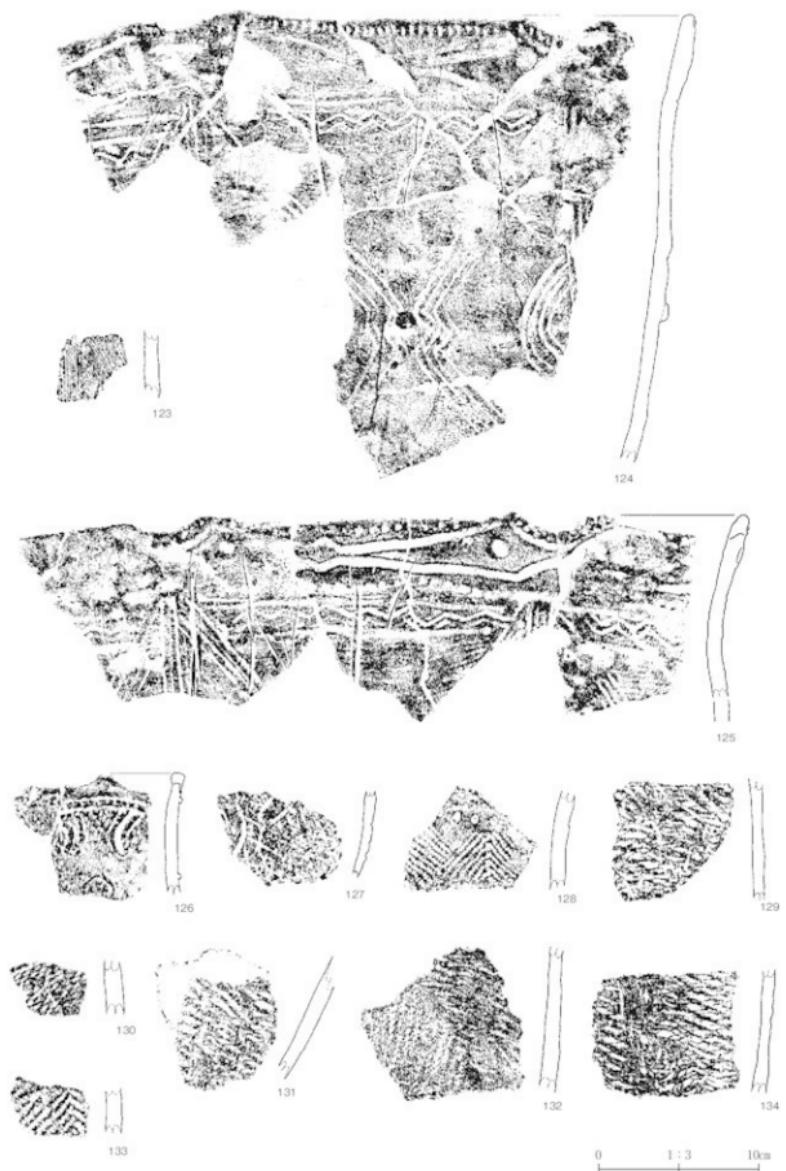
第24図 出土土器 (4)



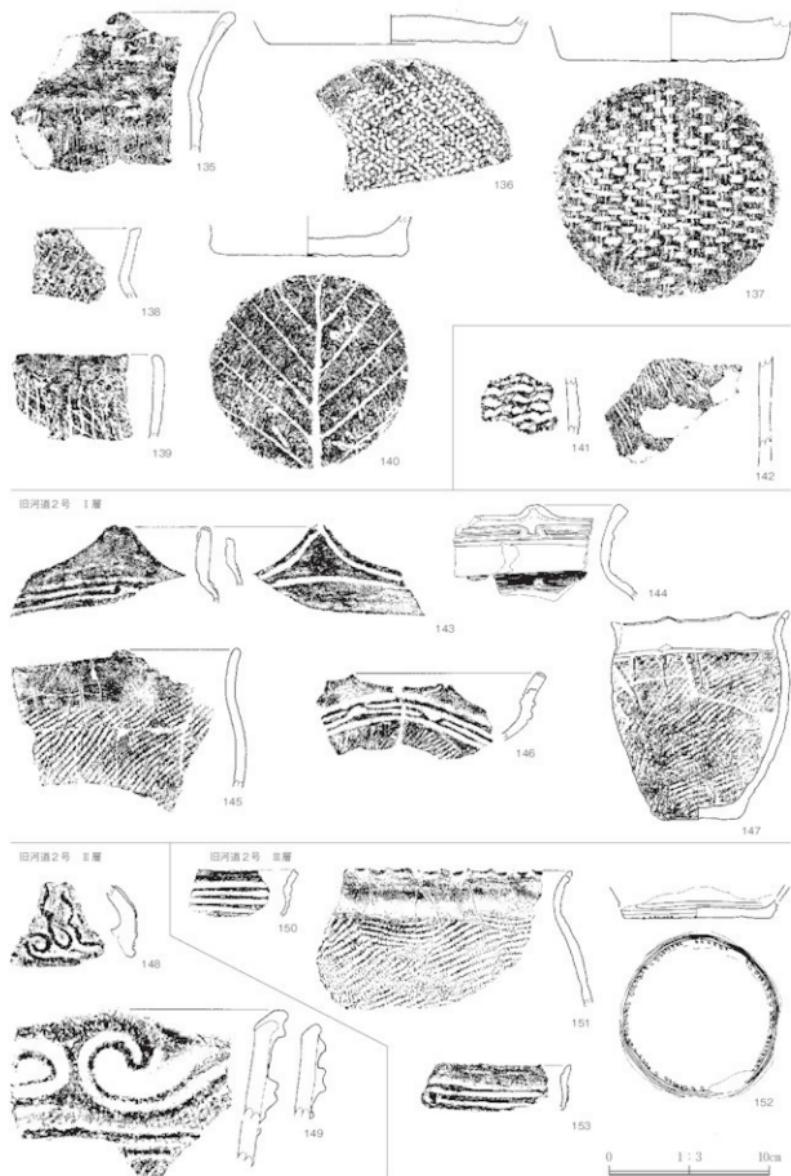
第25図 出土土器 (5)



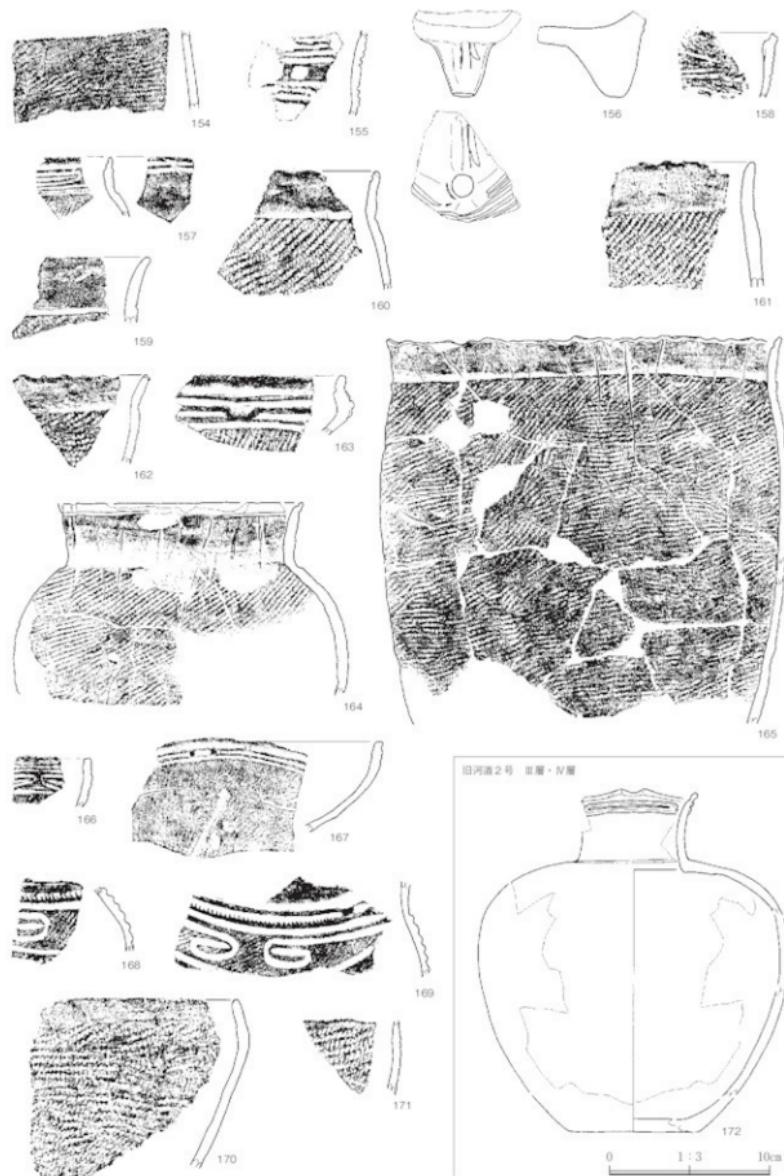
第26図 出土土器 (6)



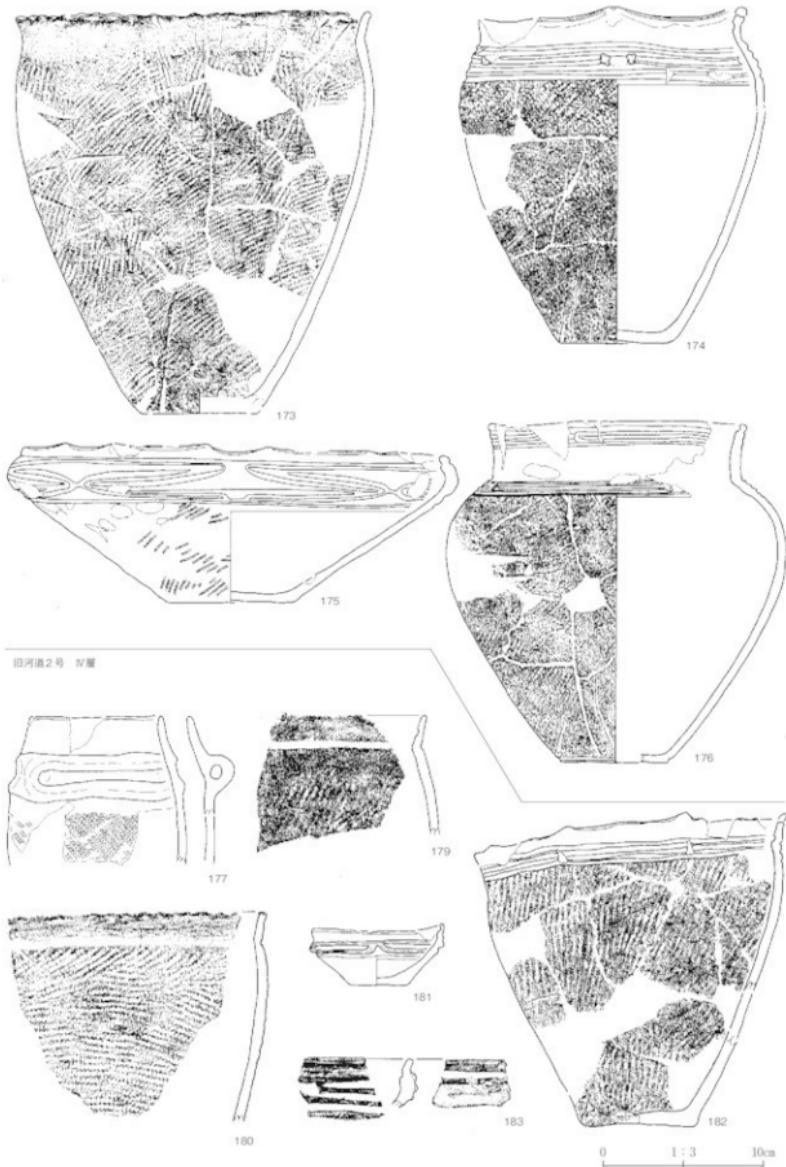
第27図 出土土器 (7)



第28図 出土土器 (8)



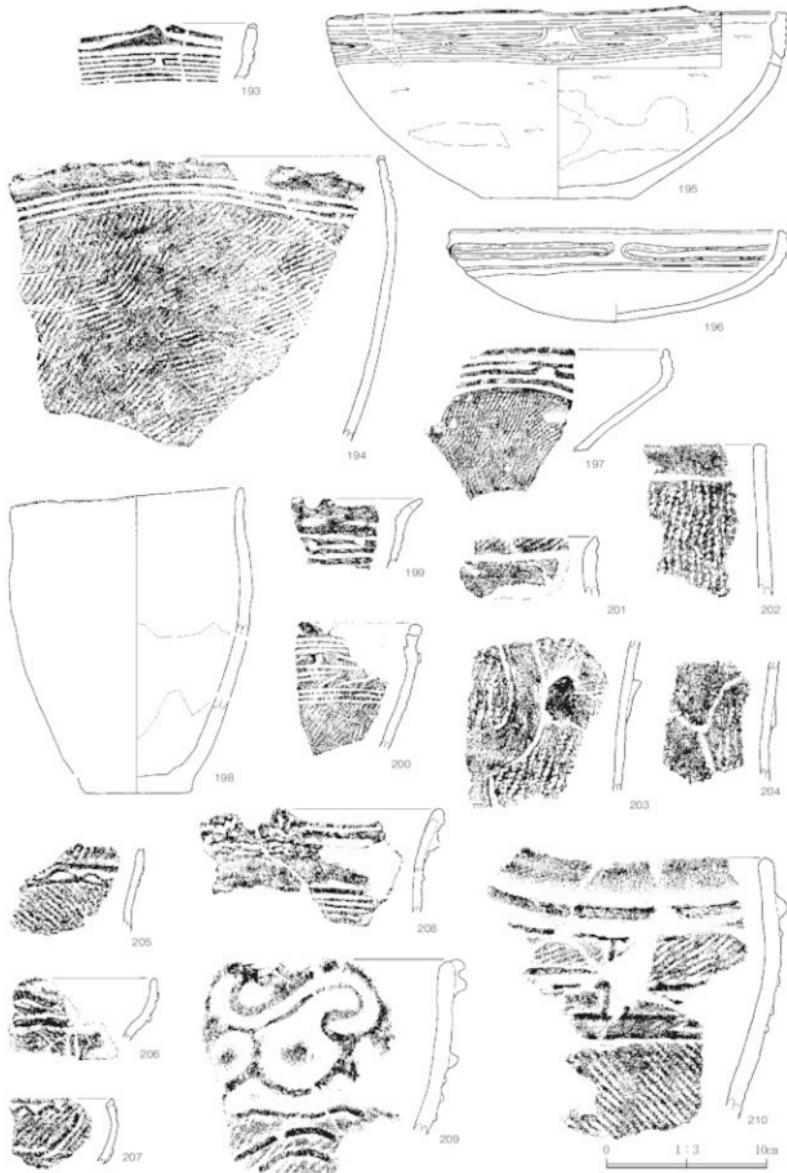
第29図 出土土器 (9)



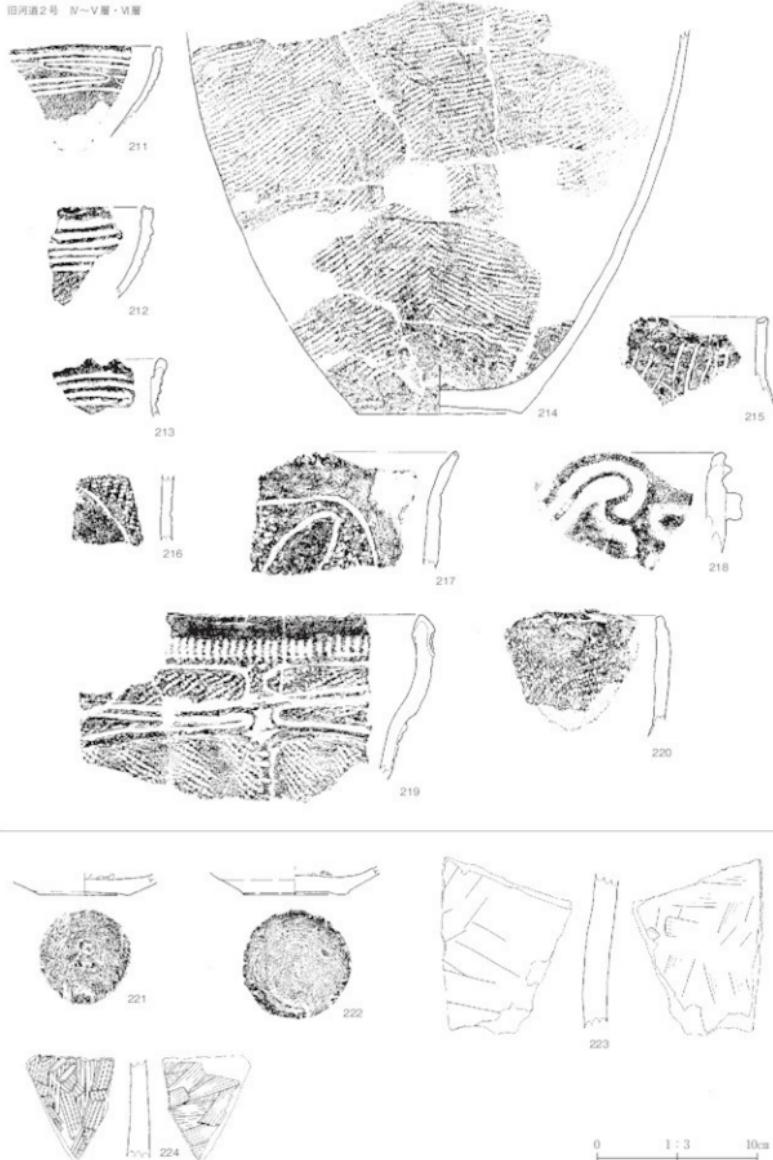
第30図 出土土器 (10)



第31図 出土土器 (11)



第32図 出土土器 (12)

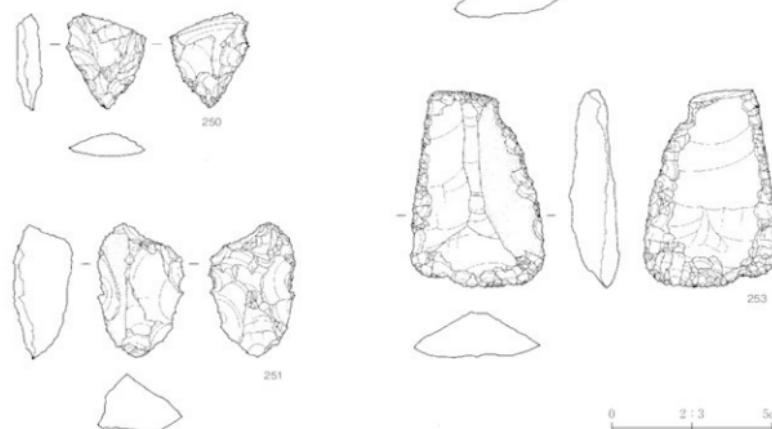
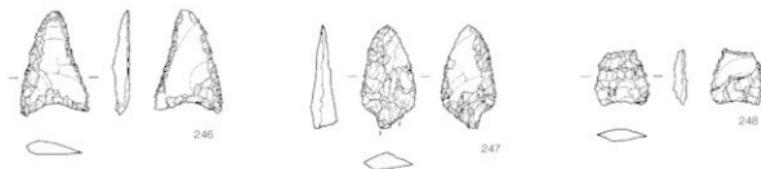
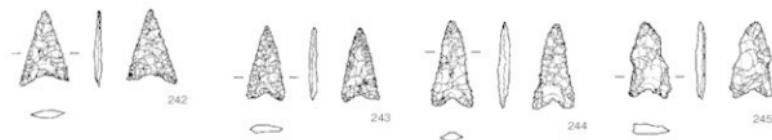


第33図 出土土器 (13)・土師器・陶器



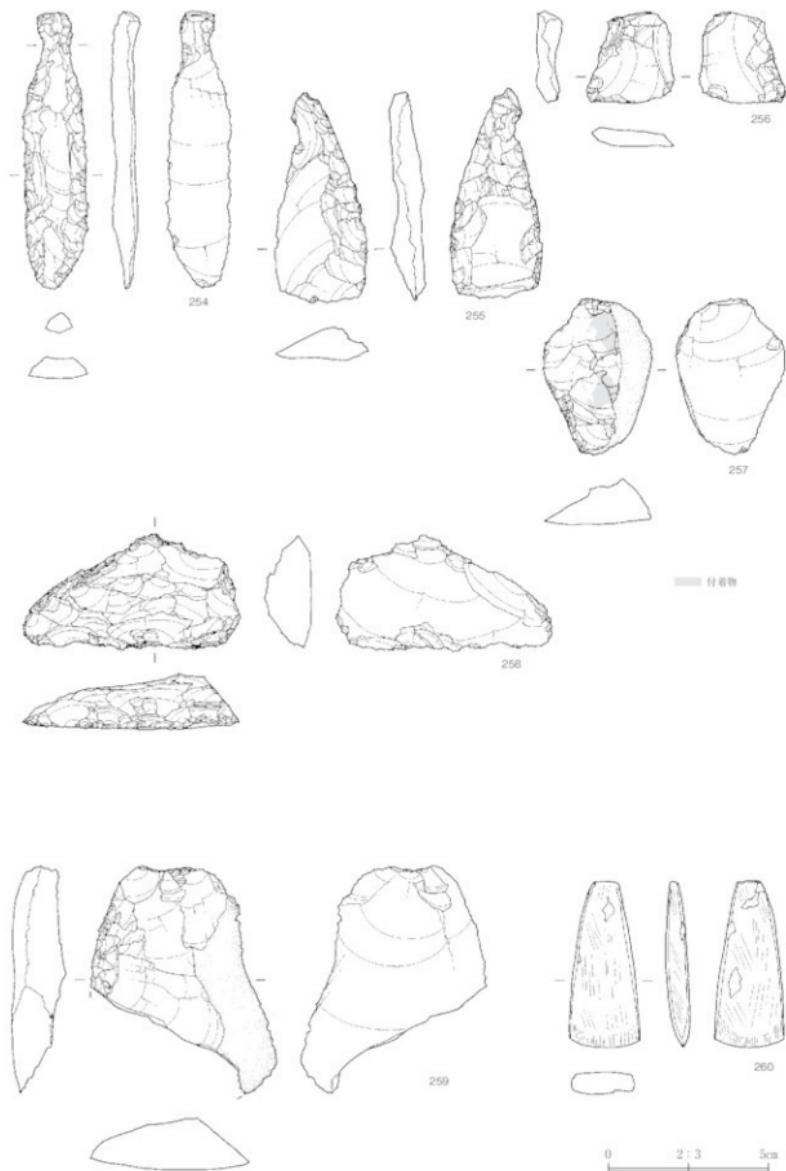
0 1 : 2 5cm

第34図 出土土製品

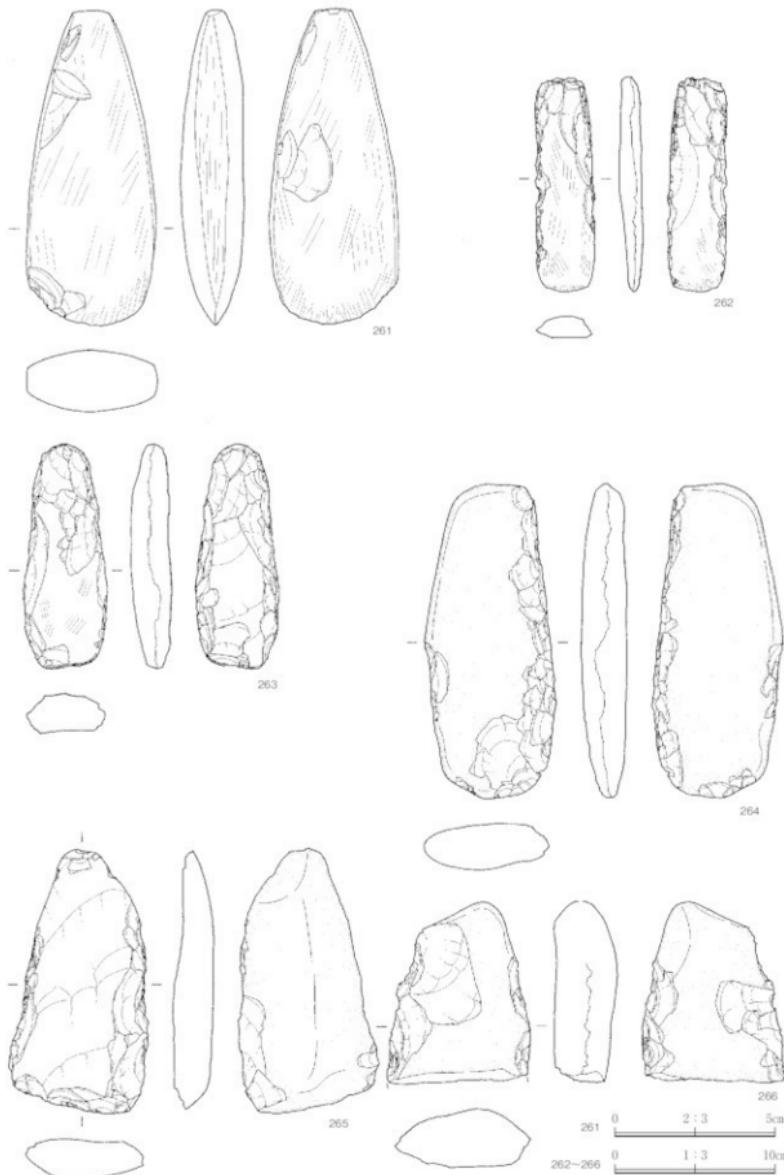


0 2 : 3 5cm

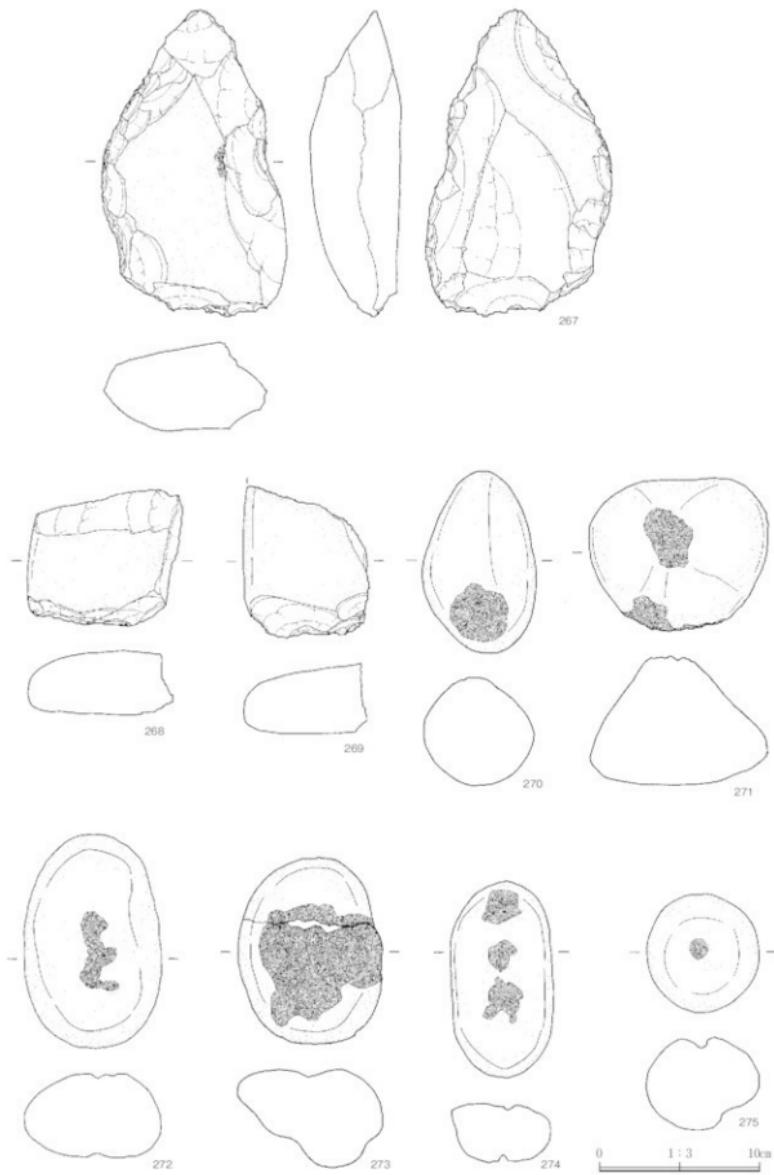
第35図 出土石器 (1)



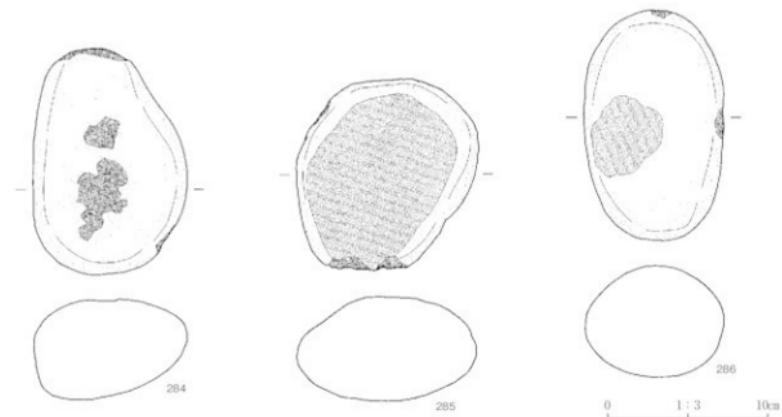
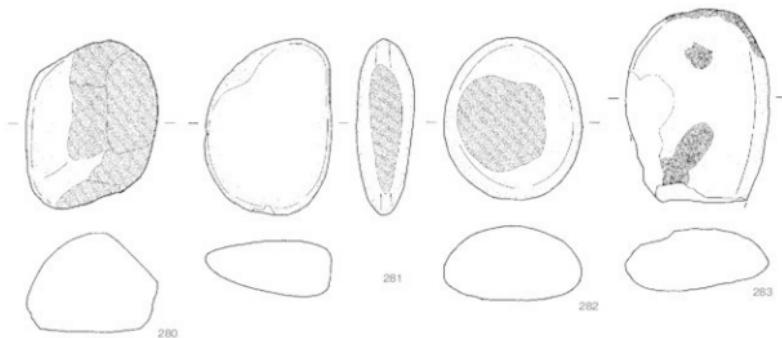
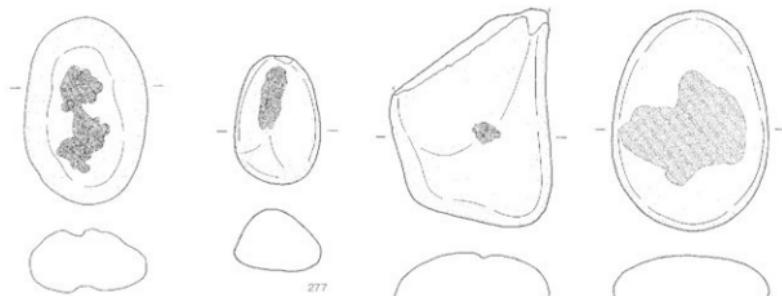
第36図 出土石器（2）



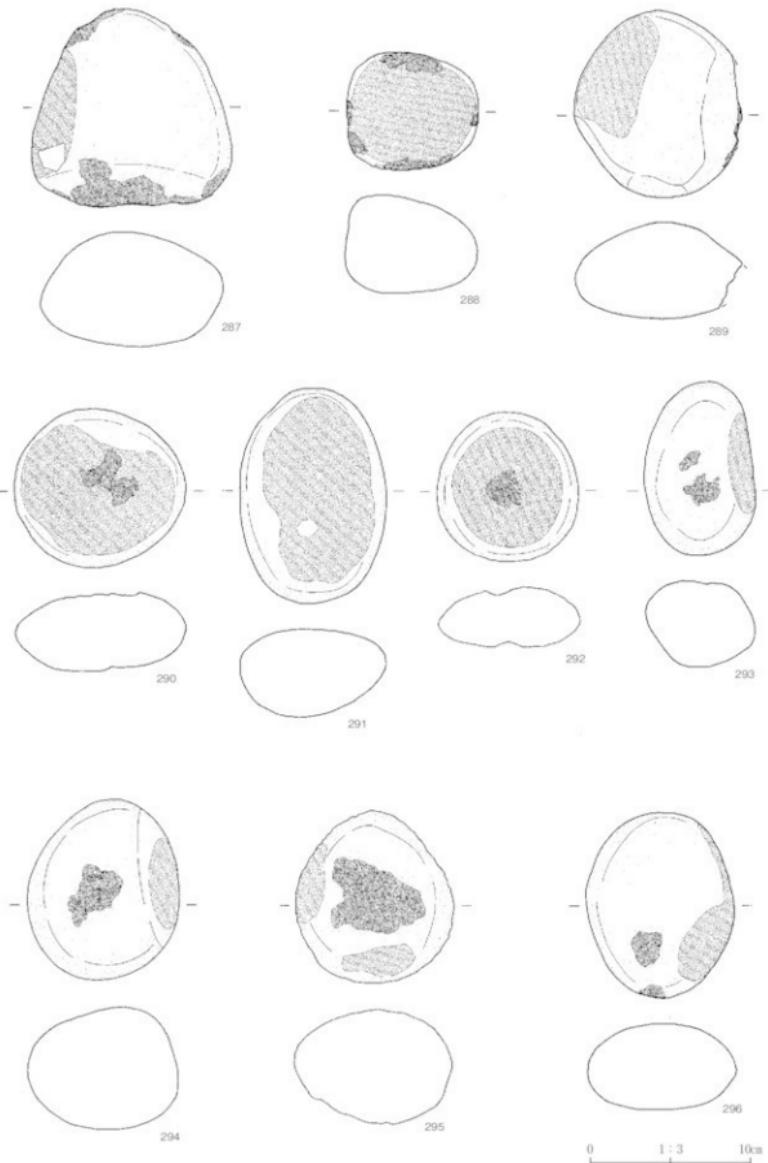
第37図 出土石器（3）



第38図 出土石器 (4)



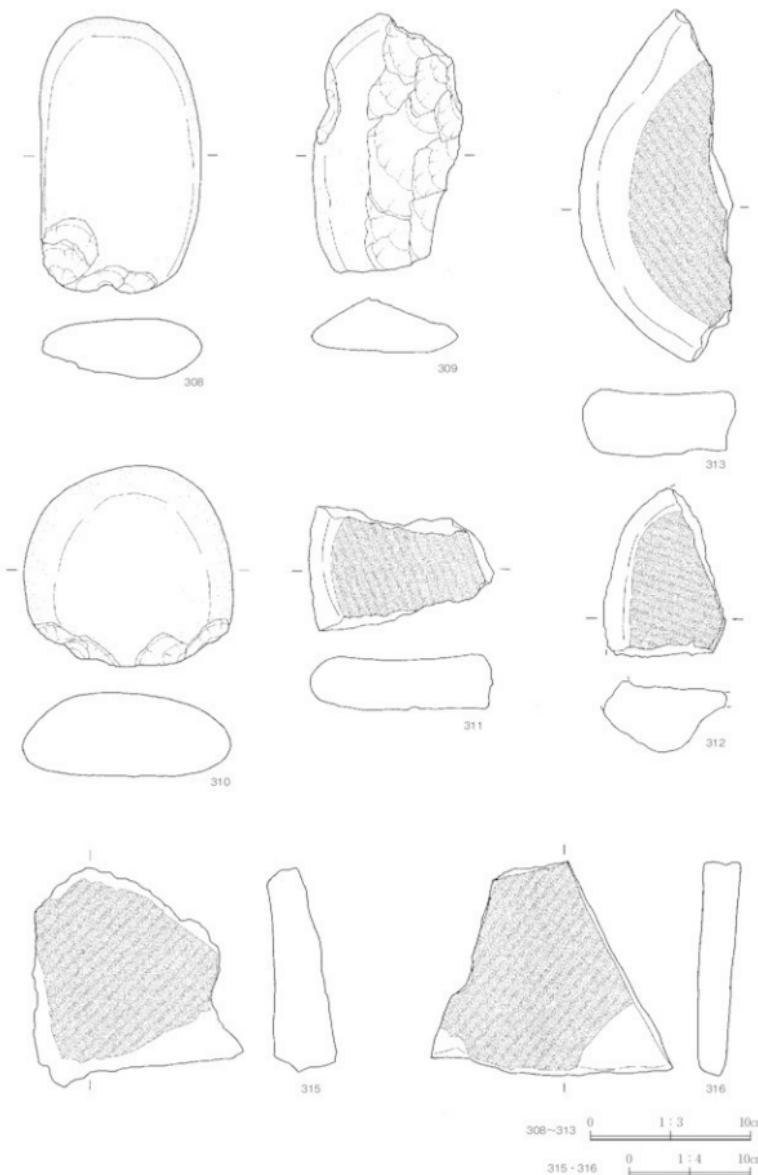
第39図 出土石器（5）



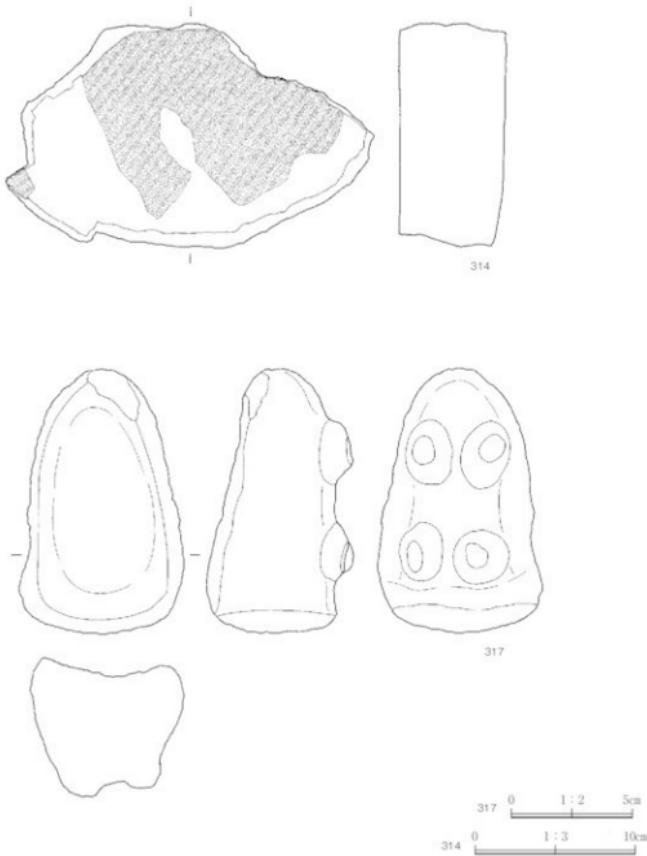
第40図 出土石器（6）



第41図 出土石器 (7)



第42図 出土石器 (8)



第43図 出土石器 (9)

第4表 土器観察表（1）

施設番号	出土地点	層別	部種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	備考
1 SJ01	⑨Ⅲ段土器	深鉢	側下平～底部	LR横位			中期末期		直面ナデ	
2 SJ01	石橋如直上	深鉢	側下平～底部	LR横位			中期		直面ケズリ	
3 SJ01	朱直	深鉢	側部	LR縦位		ナデ	時期不明			
4 SJ01	朱直	深鉢	口縁部	平縁	刺突文	ミガキ	中期末期	大柄10		
5 SJ01	朱直	深鉢	側部	LR縦位			中期			
6 SJ01	朱直	深鉢	側部	RL縦位		ミガキ	中期末期	大柄10b		
7 SJ01	朱直	深鉢	底部	LR横位			中期?			小形土器
8 SJ01	朱直	深鉢	側部	RL縦位→沈縫→磨消繩文		ミガキ	中期後期	大柄9		
9 SJ01	渡り上位	深鉢	側～底部	LR縦位		タマリ→ミガキ	中期		直面に横Vテヌアリ	
10 SJ02	朱直	深鉢	側部	縦状突起		ミガキ	中期末期	大柄10b	11と同じ個体	
11 SJ02	朱直	深鉢	側部	RL横位		ミガキ	中期末期	大柄10b	10と同じ個体	
12 SJ02	渡り上括	深鉢	側部	RL縦位			中期?			
13 SJ02	渡り上括	浅鉢	口縁部	平縁部	LR横位	ミガキ	中期			
14 SJ03	渡り中位	深鉢	口縁部	平縁	LR縦位	ミガキ	中期末期	大柄10P		
15 SJ03	渡り中位	深鉢	側部	RL縦位			中期			
16 SJ04	渡り中	深鉢	側部	無文		ナデ	中期後期	大柄9		
17 SJ04	渡り中	深鉢	側部	LR縦位→沈縫区画→磨消			中期後期	大柄9	18同じ一個体	
18 SJ04	渡り中	深鉢	側部	LR縦位→沈縫区画→磨消繩文		ナデ	中期後期	大柄9	渡り中位、17と同じ個体	
19 SK06	渡り中	深鉢	口縁部	平縁	LR対立	ヨコミガキ	中期中葉	大柄8a		
20 SK07	渡り中	深鉢	側部	RL縦位			中期?			
21 III河通2号⑦Ⅱ段前部	渡り中	浅鉢	側部	變形丁字文		ナデ	初期未熟	大柄A		
22 SK16	渡り中	深鉢	口～側部上半	平縁	口：直文、側：平縁斜条 体胎斜条	ヨコナデ	中期末期	大柄10		
23 SK16	渡り中土	深鉢	口縁部	側部	単輪筋条体第1型	ナデ	中期末期			
24 SK21	渡り中	深鉢	口縁部	平縁	結節凹輪文(平縁斜条体第3型)	前期前葉	大柄2a	織合む		
25 SK21	渡り中土	深鉢	側部	平縁	結節凹輪文(平縁斜条体第3型)	前期前葉	大柄2a			
26 SK21	渡り中	深鉢	側部	平縁	単輪筋条体第2型	前期前葉			織合む	
27 SK22	渡り中土	深鉢	1/3完形	平縁	縦Vガキ、無文、黒色顕料斑布	ミガキ	中期後期			
28 SK22	渡り中	深鉢	側部	LR縦位			中期			
29 SK22	渡り中土	深鉢	側部	刺突文			中期末期	大柄10		
30 SK23	渡り中	深鉢	側部	LR縫	沈縫による区画(LR縫)		中期後期?	大柄9?		
31 SK24	渡り中土	深鉢	側部	LR横位			前期前葉			
32 SJ01	渡り上器	深鉢	略定形	平縁、口唇に 横筋	RL- 横位	ヨコナデ、 ヨコミガキ	晚期後期～	大柄A～青 色	内外面環付着	
33 SJ01	渡り中土	深鉢	口縁部	平縁、刻み目	彫縫	ナデ	晚期後期			
34 SN02	渡り中土	深鉢	側部	彫縫	単輪筋条体第1型	ナデ	中期末期?		24・25と同じ 個体?	
35 SN02	渡り中土	深鉢	口縁部	平縁	彫縫	ナデ	中期末期?			
36 3区	I層	注口上器	注口部	4段位で横円形の貼付文 (貼付文)			晚期中～後葉		井口部	
37 3区	II層	井脚付浅鉢	底部	沈縫文	内面に凹文		晚期後葉	大柄A	四足浅鉢	
38 3区	II層	浅鉢	口縁部	変形工字文		ナデ	乳生前葉	青色		
39 3区	II層	井脚付上器	深鉢	口～側部上半	平縁、刻み目	ミガキ	晚期黄葉一	大柄A～青 色	乳生前葉	
40 2区	II層	深鉢	口縁部	波状	LR横位		晚期後葉	大柄A	内面環	
41 T区南部	II層上位	鉢	口～側	平縁、變形A 型とB型 型に付加	更扁化工字文、LR横位→部 分的ミガキ	ミガキ	晚期後葉～	大柄A～大 柄C		
42 T区南部	II層	深鉢	口縁部	彫縫	彫縫→沈縫		晚期後葉～	大柄A～青 色	内面環多見 2400±260ryBP	
43 ①・②区	II層・Ⅲ層	深鉢	口～側	小波状、大完 整化半位、2個 一对の窓突起 有り	LR横位→沈縫による変形 工字文、RL横位、乳面 に穿孔有り	ヨコミガキ	晚期末期	大柄A'	C1年代(英) 2483±267ryBP	
44 T区南部	II層	鉢	口縁部	浅波状	工字文		晚期後葉	大柄A		
45 T区南部	II層	浅鉢	略定形	2個～1つの小完 整化半位	工字文、RL横位、乳面 に穿孔有り	ヨコミガキ	晚期後葉	大柄A		
46 8区	Ⅳ層(黒褐色泥 質土)	浅鉢	口～側	平縁、小突起	LR・RL横位終了羽根文	ミガキ	晚期中～後葉	大柄C2～A		
47 7区南部	II層	深鉢	略定形	小波状	突起文		晚期中葉	大柄C2		
48 8区	Ⅳ層(黒褐色泥 質土)	深鉢	略定形	波状	LR横位→沈縫→磨消繩文	ミガキ	晚期中葉	大柄C2		
49 8区	Ⅳ層(黒褐色泥 質土)	深鉢	口縁部	LR横位			晚期中葉	大柄C2		
50 8区	Ⅳ層(黒褐色泥 質土)	深鉢	口縁部	平縁	LR横位→沈縫		晚期中葉	大柄C2		
51 8区	Ⅳ層(黒褐色泥 質土)	深鉢	側部	LR横位→沈縫→磨消繩文 →沈縫引き直し			晚期中葉	大柄C2		
52 8区	Ⅳ層(黒褐色泥 質土)	深鉢	口縁部	平縁	LR横位→沈縫→磨消繩文 →沈縫引き直し		晚期中葉	大柄C2		
53 ①区	II層	深鉢	口～側部上半	平縁、口唇部に 凹窓状压痕	凹窓状压痕平行沈縫、 側：上凹窓	ナデ	晚期			
54 ①区東部	II層	鉢	側部	沈縫文			乳生前葉	青色	55・56と同じ 個体?	

第5表 土器観察表（2）

施設番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	備考
55	③区北部	V層	壺	肩～胴部上半		沈縞文、LR横位		弥生前南	吉本縦	34・56と同一 層位
56	③区東部	V層	壺	肩部(肩部?)		沈縞		弥生前南	吉本縦	54・55と同 層位?
57	⑦区中央部	V層	深鉢	口縁部	中空突起			後期初期?		
58	⑦区南部	V層	深鉢	口縁部	平縁	波及縞位→沈縞区画→普 通縞文、縦状突出		中期末葉	大本10b	
59	①区東部	V層	深鉢	口縁部		LR縞位		中期末葉	大本10	
60	①区北部	V層	深鉢	口縁部		單輪筋条体第1型		中期末葉?	大本10	
61	①区北部	V層	深鉢	口縁部	平縁?	陰窓、刺突文	ミガキ	中期末葉	大本10	
62	①区	V層	深鉢	口縁部	平縁	(RZ多条)LR縞位		中期末葉	大本10	
63	④区	V層	深鉢	口縁部		單輪筋条体第1型		中期末葉		
64	①区北部	V層	深鉢	肩部		LR縞位→沈縞		中期中葉	大本8a	
65	③区	V層	鉢	1/4形	平縁、山形狀 突起	無文	ヨコナガリ、 ヨコミガキ	中期初期?		底面に本素面
66	①区北部	V層	深鉢	肩部		(RZ多条)LR縞位		中期?		
67	⑨区東部	V層	深鉢	底部		沈縞	ミガキ	中期?		小糸土器、大 木6-7a分
68	⑧区	骨轉(黒褐色泥 質?)	深鉢	底部		網代鉢(一本腰り二本腰 丸)		中期?		
69	⑤区中央部	N-V層	深鉢	1/4形	浅波状	LR縞位・斜位	ヨコケズリ	後期後葉~ 中期前葉	大洞A~青 木畑	34・57と同 層位?
70	⑤区東部	N-V層	深鉢	口縁部	浅波状	付加条(LR+L)		中期?		34・54と同 層位?
71	⑤区中央部	N-V層	深鉢	口縁部	浅波状	無文		中期?		
72	⑤区中央部	N-V層	深鉢	肩部		RL横位		中期?		
73	⑤区東部	N-V層	深鉢	肩部		波及縞位起縞文、RL	ナゾ	後期初期	円面	
74	⑤区北部	N-V層	深鉢	肩部		横位北端、單輪筋条体第 1型	ナゾ	中期末葉	大本10b	34・75と同 層位?
75	⑤区東部	N-V層	深鉢	肩部		横位北端、單輪筋条体第 1型	ナゾ	中期末葉	大本10b	34・74と同 層位?
76	⑦区南部	N-V層	深鉢	口縁部		LR縞位		中期末葉	大本10	
77	⑦区南部	N-V層	深鉢	口縁部		沈縞		中期後葉	大木9	
78	⑤区東部	N-V層	深鉢	口縁部		RL若しくはRLR		中期後葉	大木9	
79	⑦区東部	N-V層	深鉢	口縁部		LR縞位・貼付陰窓		中期中葉	大本8a	
80	③区南部	N-V層	深鉢	底部		網代鉢		時期不明		
81	⑤区中央部	N-V層	深鉢	口縁部		LR縞位		後期後葉	大洞A~青 木畑	底面は付加条 から
82	⑦区南部	N-V層	深鉢	肩部		單輪筋条体第1型		時期不明		
83	③区東部	V層	鉢	口縁部	小波状、尖突、 口唇部に刻沈縞	雲雷文(L/R)、沈縞文(沈 縞内縞み)	ヨコミガキ	中期中葉	大洞C2	
84	⑤区南部	V層	深鉢	口縁部		LR・RL若結合起縞文	ナゾ	中期?		
85	④区	V層	深鉢	口縁部	中空突起	LR、沈縞	ミガキ	後期中葉	トモ内2	加曾利B
86	⑥区中央部	V層	深鉢	肩部		LR→沈縞		後期初期	円面	
87	④区中央部	V層	深鉢	口縁部	波状	RL縞位→沈縞→消沈縞 文	ナゾ	中期末葉	大木10	
88	④区中央部	V層	深鉢	肩部		RL縞位→沈縞→消沈縞 文	ナゾ	中期末葉	大木10	
89	④区中央部	V層	深鉢	肩部		RL縞位→沈縞→消沈縞文	ミガキ	後期初期	円面	砂粒含む
90	④区中央部	V層	深鉢	肩部		RL縞位→沈縞→消沈縞 文	ミガキ	後期初期	円面	砂粒含む
91	④区中央部	V層	深鉢	口縁部	波状	波沈縞による強状のモ チーフ、円形容突文	ナゾ	後期初期	円面	砂粒含む
92	④区南部	V層	深鉢	肩部		波及縞位起縞文→ボタン 状貼付文、LR縞位	ナゾ	後期初期	円面	砂粒多量含む
93	④区中央部	V層	深鉢	肩部		ボタン・状貼付文	ナゾ	後期初期	円面	
94	④区(SNO2付近)	V層	鉢	肩～胴部上半	大波状	波及縞位起縞文→ボタン 状貼付文、沈縞文	ミガキ	後期初期	円面	砂粒多量含む
95	④区東部	V層	深鉢	口縁部	平縁	LR縞位		中期末葉	大木10b	
96	④区東部	V層	深鉢	口縁部	平縁	2Pの刺突窓		中期末葉	大木10b	
97	④区東部	V層	深鉢	肩部		LR縞位→沈縞→消沈縞文	ミガキ	中期後葉	大木9	
98	④区南部	V層	深鉢	口縁部		LR縞位		中期後葉	大木9	
99	④区(SNO2付近)	V層	深鉢			LR		中期後葉	大木9	
100	④区(SNO2付近)	V層	深鉢	口縁部	波状	沈縞文(早彫状)、LR縞位 →沈縞→消沈縞文	ミガキ	中期後葉	大木9/古段階	
101	④区南部	V層	深鉢	肩部		LR縞位→沈縞→消沈縞文	ミガキ	中期後葉	大木9	
102	④区南部	V層	深鉢	肩部		LR縞位→沈縞→沈縞区画→消 沈縞文	ナゾ	中期後葉	大木9	
103	④区南部	V層	深鉢	口縁部	波状	LR縞位→沈縞→消沈縞文	ミガキ	中期後葉	大木9	
104	④区南部	V層	深鉢	肩部		LR縞位→沈縞→消沈縞文	ミガキ	中期後葉	大木9	
105	④区東部	V層	深鉢	口縁部	波状?	波沈縞による渦巻文	ナゾ	中期後葉	大木9	
106	④区中央部	V層	深鉢	肩部		LR縞位		中期後葉	大木9	
107	④区中央部やや南	V層	深鉢	口縁部	波状	波沈縞による渦巻文		中期後葉	大木9/古 内外面芳化著 し	
108	④区	V層	深鉢	口縁部	口唇部欠損	波沈縞による円筒区画(区 画内側突文)	ミガキ	中期末葉	大木10	
109	④区中央部	V層	深鉢	肩部		LR縞位		中期後葉	大木9	
110	④区南部	V層	深鉢	口縁部	中空突起	孔の周縁に波沈縞が展開 する	ミガキ	中期中葉	大木8a	
111	④区	V層	深鉢	肩～底部		LR縞位		中期中葉?	大木8a?	内面僅付着

第6表 土器観察表(3)

施設番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時間	形式	備考
112	3区中央部やや北	V層	深鉢	口縁部	平縁?	横位置付後縁	ミガキ	中期中葉?	大木Ru?	
113	3区中央部やや北	V層	深鉢	口縁部	波状?	切底部による三日月状	ミガキ	中期中葉?	大木Ru?	
114	3区北部	V層	深鉢	口縁部	波状	折り返し口縁、脇付後縁、沈縁による弧状のモチーフ、LR横位?	ナゾ	前期末葉	大木6	
115	3区中央部	V層	深鉢	胴部		多量泥付による方形容溝のモチーフ	ミガキ→ケズリ	中期初葉?	大木7a?	
116	3区中央部	V層	深鉢	胴部		横位置付後縁、RL+R(穂縫文)	ミガキ	中期初葉	大木7a	117と同一個体
117	3区中央部	V層	深鉢	口縁部	平縁	沈縁、竹管文	ミガキ	中期初葉	大木7a	116と同一個体
118	3区中央部	V層	深鉢	胴部		竹管文、RL+R縫 東・羽状紋	ミガキ	中期初葉	大木7a	
119	(1)・(2)・3区	V層上面	深鉢	口縁部	微波状	鶴引文	ミガキ	中期初葉?	砂粒含む	
120	4区中央部	V層	深鉢	口縁部	平縁	鶴引文	ミガキ	中期初葉?	砂粒多量含む	
121	4区中央部	V層	深鉢	口縁部	平縁	鶴引文	ミガキ	中期初葉?		
122	4区中央部	V層	深鉢	胴部		前縁未葉~	ミガキ	前期未葉~		
123	3区北部	V層	深鉢	胴部		前縁未葉~	ミガキ	前期未葉~		
124	4区中央部	V層	深鉢	口・胴部上半	波状	手縫竹管文、沈縁文、赤タシ筋付後縁、RL横位?	ヨコナデ	前期未葉	大木6c	125と同一個体
125	4区中央部	V層	深鉢	口・胴部上半	波状	手縫竹管文、沈縁文、RL横位?	ヨコナデ	前期未葉	大木6c	124と同一個体
126	4区中央部	V層	深鉢	口縁部	平縁、突起	RL横位・脇付後縁(隠れ上計の風貌)	ヨコナデ	前期中葉	大木3	穂縫微量含む
127	3区中央部やや南	V層	深鉢	胴部		付加窓か	ミガキ	前期中葉?	大木3?	
128	3区中央部	V層	深鉢	胴部		竹管文、RL+R縫 東・羽状紋	ミガキ	前期前葉	大木2a	
129	3区南部	V層	深鉢	胴部		不整然文	ミガキ	前期前葉	大木2a	
130	3区中央部	V層	深鉢	胴部		原体不明	ミガキ	前期前葉?		
131	3区南部	V層	深鉢	胴部		LR横位	ミガキ	前期前葉?		134と同一個体
132	3区南部	V層	深鉢	胴部		09(多刺)RL縫付、RLR縫付	ミガキ	前期前葉?		穂縫微量含む
133	3区中央部	V層	深鉢	胴部		09(多刺)RL+R縫付、東・羽状紋	ミガキ	前期前葉?		穂縫含む
134	3区南部	V層	深鉢	胴部		LR横位	ミガキ	前期前葉?		131と同一個体
135	4区	V層	深鉢	口・胴部上半	波状	(口)無文、銅・鶴引文	ナゾ	中期初葉?		
136	4区	V層	深鉢	底部		銅代窓(一本割り一本越え)	ミガキ	中期不明		
137	3区南部	V層	深鉢	底部		銅代窓(一本割り一本越え)	ミガキ	中期?		
138	3区中央部	V層	深鉢	口縁部		RL横位	ミガキ	中期不明		
139	3区	V層	深鉢	口縁部	平縁	銅口状然系文(平輪縫条体第1型?)	ミガキ	中期不明		
140	3区	V層	深鉢	底部		本葉紋	ミガキ	中期?		
141	3区	層位不明	深鉢	胴部		不整然文	ミガキ	前期前葉	大木2a	穂縫含む
142	3区	層位不明	深鉢	胴部		單輪縫条体第1型?	ナゾ	前期前葉?		
143	III河道2号	I層	浅鉢	口縁部	山形狀	工字文	ミガキ	晚期未葉	大洞A新	
144	III河道2号	I・II層	広口1巻	口・胴部	平縁、A突起	工字文	ヨコナデ	晚期未葉	大洞A古	
145	III河道2号	I層	深鉢	口縁部		LR横位	ミガキ	晚期未葉~	大洞A~青木畠	共生前段
146	III河道2号	I層	深鉢	口・胴部	小波状	LR横位・斜位	ミガキ	晚期未葉	大洞A	
147	III河道2号	I・II層・斜形	小形鉢	略定形	波状、小突起	LR横位	ミガキ	口・側身中葉	大洞A~青木畠	共生前段?
148	III河道2号	II層	深鉢	口縁部	突起	貼付後縁	ミガキ	中期中葉	大木8a	砂粒多量含む。
149	III河道2号	II層	深鉢	口縁部	小波状	口・貼付後縁による横位置付後縁、RL横位、頭み縫付平行後縁	ナゾ	中期中葉	大木8a	178と同一個体?
150	III河道2号	II層	深鉢	口縁部	平行	平行波縫	ミガキ	中期前葉?	青木畠	
151	III河道2号	II層	深鉢	口・胴部上半	平行、口野部に筋縫压痕	(口)無文、銅・LR斜・横位	ヨコナデ	中期後葉~	大洞A~青木畠	共生前段
152	III河道2号	II層	深鉢	底部		2条の横縫平行後縫、頭み縫付	ミガキ	中期後葉~	大洞A~青木畠	共生前段
153	III河道2号	II層	深鉢	口縁部	平縁	工字文	ミガキ	中期後葉~	大洞A~青木畠	共生前段
154	III河道2号	II層	深鉢	胴部		LR横位	ミガキ	中期後葉~	大洞A~青木畠	共生前段
155	III河道2号	II層	丸底鉢	胴部		横位置付後縫	ナゾ	晚期未葉	大洞A'	
156	III河道2号(3区)	II層	四足鉢	脚部		沈縫文	ミガキ	晚期後~	大洞A~A'四足組の脚部	
157	III河道2号(3区)	II層	深鉢	口縁部	平縁	工字文、LR横位	ナゾ	晚期後~	大洞A~A'	
158	III河道2号(3区東部)	II層	深鉢	口縁部	平縁、2段口縁	変形工字文	ミガキ	晚期未葉	大洞A'	背面彌多量、C14年代(炭2)2466±36yrBP
159	III河道2号	II層	深鉢	口縁部	平縁	横位置付後縫、LR横位	ミガキ	晚期未葉	大洞A~青木畠	
160	III河道2号	II層	深鉢	口縁部	小波状	LR横位	ミガキ	中期後葉~	大洞A~青木畠	
161	III河道2号	II層	深鉢	口・胴部上半	平縁、口野部に筋縫压痕	(口)無文、銅・LR横位	ミガキ	中期後葉~	大洞A~青木畠	共生前段
162	III河道2号	II層	深鉢	口・胴部上半	平縁、口野部に筋縫压痕	(口)無文、銅・LR斜・横位	ナゾ	中期後葉~	大洞A~青木畠	背面彌多量付

第7表 土器観察表(4)

番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・裏体・その他	内面	時間	型式	備考
163	田河通2号	Ⅲ層	浅鉢	口縁部	平縁	工字文、LR横位	ミガキ	晩期後葉	大鉢A	
164	田河通2号	Ⅲ層	壺	口～胴	平縁	横位沈縫、LR横位	ケズリ	晩期末葉		
165	田河通2号	Ⅲ層	深鉢	口～胴	平縁口唇部に指印痕文	口：無文、胴：LR横・斜位	ナダ	晩期後葉～大鉢A～青木畠		
166	田河通2号	Ⅲ層	浅鉢	口縁部	平縁	変形工字文	ナダ	晩期末葉	大鉢A'	
167	田河通2号	Ⅲ層	鉢	口～胴部	小底状、口唇部に刻沈縫	横位平行沈縫、LR横位	ヨコナダ	晩期中～後葉	大鉢C2～A	
168	田河通2号	Ⅲ層	壺	胴部上半		茎葉文(工字)、沈縫文(沈縫内刻有り)	ヨコナダ	晩期中葉	大鉢C2	169と同一個体
169	田河通2号	Ⅲ層	壺	胴部上半		茎葉文(工字)、沈縫文(沈縫内刻有り)	ヨココマ	晩期中葉	大鉢C2	168と同一個体
170	田河通2号	Ⅲ層	深鉢	口～胴部	平縁	口：無文、胴：LR横・斜位	ナダ	晩期		
171	田河通2号	Ⅲ層	鉢	胴部		LR横	ナダ	時間不明		晩期未葉か?
172	田河通2号	Ⅲ・IV層	壺	1/3定形	小底状	口：2条の横位平行沈縫、斜一重・無文	ナダ	晩期後葉～大鉢A～青木畠		
173	田河通2号	Ⅲ・IV層	深鉢	1/2定形	平縁、口唇部に指印痕文	口：無文、胴：LR横・斜位	ヨコナダ	晩期後～大鉢A～青木畠		
174	田河通2号	Ⅲ・IV層	深鉢	略定形	波状(6段位)	口上：LR横位(局所的にナダ消している)	ミガキ	晩期後～末葉	大鉢A～A'	内面糊付村
175	田河通2号	Ⅲ・IV層	浅鉢	略定形	平縁、2箇所に斜位平行沈縫、LR横位、斜の小底状8段位	口上：工字文、LR横位、斜の小底状8段位	ヨコミガキ	晩期末葉	大鉢A'	
176	田河通2号	Ⅲ・IV層	壺	略定形	平縁	口上：無文、口下：工字文、胴：LR横・斜位	ミガキ	晩期末葉	大鉢A'	
177	田河通2号	Ⅳ層上位	深鉢	口～胴部	平縁	LR横位、中空把手		中期中葉	大本8a	
178	田河通2号(7区)	Ⅴ層下位	深鉢	口～胴部	平縁	口：貼付隕縫による横位連続溝文、LR横位、斜の2条の横位平行沈縫、胴：LR横位(局所的にナダ消している)	ナダ	中期中葉	大本8a	149と同一個体?
179	田河通2号	Ⅴ層	鉢	口～胴部上半	平縁	口：無文、胴：横位沈縫、斜位	ナダ	弥生前段		
180	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	口縁部	平縁、口唇部に指印痕文	口：無文、胴：LR横・斜位	ケズリ	晩期後葉～大鉢A～青木畠		
181	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	浅鉢	略定形	平縁	口：工字文、胴：無文		晩期後葉～大鉢A～青木畠	小形	
182	田河通2号	Ⅴ層	鉢	1/2定形	平縁、小突起	口：3条の横位平行沈縫(突起上に斜窓)、胴：LR横位	ミガキ	晩期後～末葉	大鉢A～A'	
183	田河通2号	Ⅴ層	浅鉢	口縁部	平縁	変形工字文	ヨコミガキ	晩期末葉	大鉢A'	
184	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	口縁部	平縁、口唇部に指印痕文	口：無文、胴：LR横位	ヨコミガキ	晩期末葉	大鉢A'	
185	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	口縁部	小底状	LR横位		晩期後葉～大鉢A～青木畠		
186	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	鉢	口縁部	平縁	変形工字文、LR横位		晩期末葉	大鉢A'	
187	田河通2号	Ⅴ層	深鉢	口縁部	平縁、口唇部に沈縫	LR横・斜位		晩期末葉?		
188	田河通2号	Ⅴ層	浅鉢	口縁部	変形工字文	ミガキ		晩期末葉	大鉢A'	
189	田河通2号	Ⅴ層	深鉢	略定形	波状	LR横位	ミガキ	晩期末葉	大鉢A'	
190	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	壺	口～胴部上半		胴上：工字文、沈縫糊要文、胴中：無文	ナダ	晩期後葉	大鉢A	
191	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	壺	胴		胴上：工字文、胴中：LR横位(局所的にナダ消している)	ミガキ	晩期後葉	大鉢A?	
192	田河通2号(7区)	Ⅴ層	深鉢	口縁部	波状	数条の横位沈縫、LR横位		晩期中～後葉		
193	田河通2号(7区)	Ⅴ層	鉢	口縁部	波状	工字文	ヨコミガキ	晩期後葉	大鉢A	
194	田河通2号	Ⅴ層	鉢	口～胴部	小底状	口：3条の横位平行沈縫、胴：LR横位	ミガキ	晩期後葉	大鉢A	砂粒含む
195	田河通2号	Ⅴ層	深鉢	略定形	平縁	工字文、無文	横ナダ	晩期後葉	大鉢A2	
196	田河通2号	Ⅴ層	浅鉢	略定形	平縁	工字文、無文	ミガキ	晩期後葉	大鉢A	
197	田河通2号	Ⅴ層	浅鉢	1/4定形	平縁	口：工字文、胴：LR横・斜位(局所的にナダ消している)	ミガキ	晩期後葉	大鉢A	
198	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	定形	平縁	無文		晩期		
199	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	口縁部	平縁、突起	工字文		晩期中～後葉	大鉢C2～A	
200	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	鉢	口縁部		LR横位～沈縫		晩期中葉	大鉢C2	
201	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	口縁部	平縁	LR横位、沈縫文	ナダ	晩期		
202	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：無文、胴：中空把手類(全体屈曲)		中期末葉	大本10b	
203	田河通2号	Ⅴ層	深鉢	胴部		LR横位～貼付隕縫～沈縫区画(アルファベット文)→区画内側消文→ビレ状突起付加	ナダ	中期末葉	大本10b	204と同一個体
204	田河通2号	Ⅴ層	深鉢	胴部		LR横位～貼付隕縫～沈縫区画(アルファベット文)→区画内側消文→ビレ状突起付加	ナダ	中期末葉	大本10b	203と同一個体
205	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	口縁部	平縁	LR横位～貼付隕縫		中期中葉	大本8a	
206	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	鉢	口縁部		LR横位～貼付隕縫		中期中葉	大本8a	
207	田河通2号(7区東部)	Ⅴ層	深鉢	口縁部		LR横位～貼付隕縫		中期中葉	大本8a	
208	田河通2号	Ⅴ層	深鉢	口～胴部	平縁、突起	口：口唇に貼付隕縫、無文、胴：貼位隕縫、沈縫	ナダ	中期中葉	大本8a	

第8表 土器観察表（5）

施設番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	備考
209	田河道2号	V層	深鉢	口～胴部上半	波状	口：貼付隆起による横位置変化、原体：L縁位→貼付隆起 口上：無文、口下：貼付隆起による横位置粘付クラシック文、胴：L縁位	ナゲ	中期中葉	大本8a	
210	田河道2号	N層	深鉢	口～胴部上半	波状	口：無文、口下：貼付隆起による横位置粘付クラシック文、胴：L縁位	ミザキ	中期中葉	大本8a	
211	田河道2号（T区東部）	V層	浅鉢	口～胴部	平縁	口：變形工字文、胴：L/R縁位	ナゲ→ミガキ	晚期末葉	大洞A'	
212	田河道2号	N～V層	鉢	口～胴部上半	平縁、口唇部に波紋	口：工字文、胴：L/R縁位	ミガキ	晚期後葉	大洞A	
213	田河道2号	N～V層	浅鉢	口縁部	波状、突起	平行沈縁	ミガキ	晚期後葉	大洞A～A'	
214	田河道2号	層位不明	深鉢	胴～底部		L/R縁、繩目	ツイリ→繩 ツイリ	晚期		
215	田河道2号（T区東部）	N～V層	深鉢	口縁部	波状	半輪切垂体第1期	ナゲ	後期初頭?		
216	田河道2号（T区東部）	V層	深鉢	胴部		SLR縁位→沈縁→磨消繩文		中期末葉	大本10	
217	田河道2号（T区南部）	V層	深鉢	口縁部	波状	SLR縁位→磨消繩文		中期末葉	大本10	
218	田河道2号（T区南部）	N～V層	深鉢	口縁部	波状	T1：貼付隆起による横位置粘付急急文	ナゲ	中期中葉	大本8a	
219	田河道2号	N～V層	深鉢	口縁部		口：LR縁位、L/R縫 位→貼付隆起による横位置粘付クラシック文、胴：L/R縫位→繩目背縫（縫線上に軋突）		中期前～中葉	大本7b～8a	
220	田河道2号	N～V層	深鉢	口～胴部上半	平縁	L/R縁位	無いケズリ	前期前葉?	繩縫少含む	

第9表 土製品觀察表

編號 番号	出土地點 出土地点	層位 層位	器種 器種	文様・特徵 文様・特徵	長さ (cm) <5.2>	幅(cm) <5.2>	厚さ (cm) <4.6>	重量 (g) <47>	時期 時期	備考 備考
225	丁区南部	Ⅴ層	土偶	結髪、中実				757	晚期後～末葉?	頭
226	丁区南部	Ⅴ層	土偶	中実、沈線	<5.2>	3.0		242	晚期	右足部
227	丁区南部	Ⅴ層	土偶	中実、沈線	<4.5>	2.9		183	晚期	肩部?
228	田河道2号	Ⅴ層	土偶	中空	<4.6>	3.2		17.3	晚期	右足部
229	3区	V層	ミニチュア器	無文	1.1 (47)	0.7	0.1	底径3.2	45.9 中期?	
230	丁区中央部	Ⅳ～V層	ミニチュア器	LBR縫合		器高 <2.5>		底径2.9	14.2 中期?	
231	丁区南部	Ⅴ層上位	円盤状土製品	RLLR	3.2	2.9	0.6	7.2	晚期後葉～末葉?	
232	丁区南部	Ⅴ層相当	円盤状土製品	RLLR	3.1	3.3	0.8	10.0?	晚期後葉～末葉?	
233	丁区南部	Ⅴ層	円盤状土製品		3.9	3.6	0.6	10.8	晚期後葉～末葉?	
234	丁区南部	Ⅴ層上位	円盤状土製品	無文	3.8	3.8	0.6	10.0?	中期末葉～後期初期	
235	3区	舌刷(黒褐色泥質?)	円盤状土製品	RLR	2.7	2.5	0.5	4.16	晚期小～後葉?	
236	田河道2号(1区東部)	Ⅳ～V層	円盤状土製品		3.0	3.3	0.5	6.78	晚期後葉～末葉?	
237	3区	Ⅳ～V層	円盤状土製品	無文	4.8	4.3	0.8	17.9	中期末葉～後期初期	
238	3区	V層	円盤状土製品		4.5	4.2	0.8	13.4	前期前葉	織錐混入
239	3区中央	V層	円盤状土製品	LRL	3.6	3.5	0.9	10.9	前期前葉	織錐混入
240	3区南部	V層	円盤状土製品	RLR	2.8	3.0	0.9	9.3	中期末葉?	
241	3区南部	V層	三角形土製品	無文	3.4	3.6	0.8	9.2	後期?	

第10表 陶磁器觀察表

編號 番号	出土地點 出土地点	層位 層位	種別 種別	形種 形種	部位 部位	時期 時期	備考 備考
221	3区北部	Ⅲ層	土師器	片	瓶部	平安	底部斜削系切口、内部黑色處理
222	3区道橋外	Ⅰ層	土師器	片or跡	瓶部	平安	底部斜削系切口、内部黑色處理
223	1'区	Ⅰ層	陶器	?	瓶部	中期?	動物上面飾骨合存
224	3区北部	Ⅲ層	甕	甕	瓶部	12世紀	

第11表 石器観察表（1）

測定 No	形種	出土地点	剖位	長さ (cm)	幅(cm)	厚さ (cm)	重量(g)	石材	備考
242	石鏟	S801	埋土中	2.3	1.5	0.3	0.6	珪質頁岩	
243	石鏟	S807	埋土中	2.3	1.2	0.2	0.5	頁岩	
244	石鏟	3区	V型	2.7	1.3	0.4	0.8	黑曜石	产地 北上系A
245	石鏟	S803	埋土中	2.4	1.3	0.3	0.7	黑曜石	产地 北上系A
246	石鏟	7区	Ⅲ層上面	3.3	2.1	0.5	2.3	頁岩	
247	石鏟	7区	Ⅲ層	(3.2)	1.7	0.8	2.6	頁岩	
248	石鏟	①・④区P211	埋土中	(1.6)	1.6	0.4	1	頁岩	
249	石鏟	3区	V型	4.4	2.8	1	10.6	頁岩	
250	尖頭器	S806	埋土中	(3.0)	(2.4)	(0.6)	4.4	頁岩	
251	尖頭器	S801	埋土中	4.3	2.6	1.8	16.4	珪質頁岩	
252	挑状石器	S801	埋土中	5.4	3.3	1.5	22.7	頁岩	
253	挑状石器	田河道2号	Ⅳ層	6.0	4.1	1.3	33.3	頁岩	
254	石鏟	田河道2号(1区北端)	V層直上	8.5	2.0	0.9	13	頁岩	
255	石鏟	3区中央部	V型	6.5	2.8	1.0	15.5	頁岩	
256	核器	3区	V型	2.8	2.7	0.6	5.2	頁岩	
257	核器	S801	埋土中	4.8	3.4	1.4	20.8	珪質頁岩	
258	核器	S824	埋土中	3.6	6.7	1.7	31.87	頁岩	
259	核器	3区	V型	(7.0)	(5.1)	(1.7)	51.4	頁岩	
260	磨製石斧	3区	V型	5.1	2.1	0.7	14.5	鈣成岩	
261	磨製石斧	3区	V型	9.7	4.0	2.0	111.5	頁岩	
262	磨製石斧未製品	田河道2号(1区南端)	埋土中	12.9	3.5	1.3	86.8	粘板岩	
263	磨製石斧未製品	3区中央部や北	Ⅳ層	13.7	5.1	2.5	248.8	鈣成岩	
264	磨製石斧未製品	3区	Ⅳ層	19.3	8.1	2.9	61.3	ホルンフェルス	
265	磨製石斧未製品	3区南部	Ⅳ層	16.2	8.5	2.5	415.7	ホルンフェルス	
266	磨製石斧未製品	3区中央部や北	Ⅳ層	(11.0)	(8.8)	4.0	500.83	??	
267	磨製石斧未製品	田河道2号	Ⅳ層	18.3	11.3	5.5	1320.6	砂岩	
268	磨製石斧未製品	1区や北	Ⅳ層	(9.2)	(7.8)	4.3	464.47	ホルンフェルス	
269	磨製石斧未製品	田河道2号	Ⅳ層	(8.2)	(9.5)	3.9	407.9	ホルンフェルス	
270	敲打器1型	3区南部	V型	11.2	6.9	6.6	463.54	安山岩	
271	敲打器1型	3区中央部	V型	9.4	11.0	7.9	996.54	デイサイト	
272	敲打器2型	S803	床面	13.1	8.4	5.2	753.98	デイサイト	
273	敲打器2型	S804	埋土中	11.2	8.8	6	519.44	凝灰岩	
274	敲打器2型	3区南部	Ⅳ層	11.9	6.2	3.6	377.57	デイサイト	
275	敲打器2型	3区	Ⅳ層	7.5	6.9	5.5	205.32	安山岩	
276	敲打器2型	田河道2号	Ⅳ層	11.3	7.5	3.8	484.7	デイサイト	
277	敲打器2型	S803	床面	7.8	5.3	3.8	226	デイサイト	
278	敲打器2型	①・④区東部	V型	(13.2)	9.9	5.2	919.43	デイサイト	
279	敲打器2型	S818	埋土中	13.4	9.6	4.6	856.1	デイサイト	
280	敲打器2型	3区中央部	V型	10.3	8.1	6.1	649.5	凝灰岩	
281	敲打器2型	①・④区東部	V型	10.7	7.8	3.5	418.45	デイサイト	
282	敲打器2型	3区南部	Ⅲ層	10.0	8.5	4.6	532.1	デイサイト	
283	敲打器2型	3区南部	Ⅳ層	(11.8)	8.9	3.3	508.8	デイサイト	
284	敲打器2型	3区	Ⅳ層	13.9	9.4	6.2	1196.39	デイサイト	
285	敲打器2型	3区	Ⅲ～Ⅳ層	11.7	11.2	6.5	1189.07	デイサイト	
286	敲打器2型	3区	Ⅳ～V層	14.3	8.5	6.8	1169.51	デイサイト	
287	敲打器2型	6区	Ⅳ層	12.2	12.3	7.0	1495.1	デイサイト	
288	敲打器2型	3区	Ⅳ層(黒褐色 泥質上)	7.2	8.1	6.1	554.23	デイサイト	
289	敲打器2型	①・④区東部	Ⅲ～Ⅳ層	11.4	(10.3)	5.9	908.3	デイサイト	
290	敲打器2型	3区	Ⅳ層	9.8	10.5	4.6	611.14	デイサイト	
291	敲打器2型	S801	床面	13.2	8.9	5.4	861.65	デイサイト	
292	敲打器2型	3区中央部や北	Ⅳ層	9.3	8.7	3.7	380.1	デイサイト	
293	敲打器2型	①・④区	Ⅳ層	10.6	6.8	5.3	527.57	デイサイト	
294	敲打器2型	3区	Ⅳ層	11.0	9.3	7.5	996.23	安山岩	
295	敲打器2型	3区	Ⅳ層	10.5	9.7	7	782.49	デイサイト	
296	敲打器2型	7区田河道2号	V型	11.4	9.1	5.3	749.9	安山岩	
297	敲打器2型	3区	V型	21.0	10.1	6.5	2220	デイサイト	
298	敲打器2型	3区中央部や北	V型	15.1	6.3	3.3	428.4	デイサイト	
299	敲打器2型	田河道2号(1・4区)	V型	18.6	6.8	3.9	740.1	デイサイト	
300	敲打器2型	S811	埋土中	(11.0)	7.3	3.6	454.46	デイサイト	
301	敲打器2型	3区	V型	(12.1)	7.5	4.7	598.5	デイサイト	
302	敲打器2型	3区	Ⅳ層	(9.8)	8.3	3.3	367.2	デイサイト	
303	敲打器2型	①・④区北部	Ⅳ層	(8.5)	6.6	3.5	3128.8	デイサイト	
304	石鍬	3区中央部	V型	8.4	8.3	4.3	406.69	デイサイト	
305	石鍬	3区	Ⅲ層	7.5	7.1	2.5	148.28	凝灰岩	

第12表 石器観察表（2）

測定 No	形態	出土地点	層位	長さ (cm)	幅(cm)	厚さ (cm)	重量(g)	石材	備考
306	石鍬	旧河道2号(1区北 面)	V層	6.0	6.7	1.2	75.26	デイサイト	
307	理器	1' 区東部	B層	11.5	3.5	2.1	132.1	カルナフルス	
308	理器	8区	B層(黒褐色 泥質土)	16.9	9.8	3.7	903.04	デイサイト	
309	理器	SN02	地土下位	(15.6)	(8.8)	3.2	640.5	デイサイト	
310	理器	2'区	V層	12.3	12.9	5.1	1168.97	デイサイト	
311	石頭	7区	B層	(7.6)	(11.3)	3.3	343.17	デイサイト	
312	石頭	S03	地土上～中位	(10.3)	(7.5)	4.3	212.48	凝灰岩	
313	石頭	8区	B層(黒褐色 泥質土)	(21.3)	(9.4)	4.0	996.9	デイサイト	
314	石頭	1区やや北	B層	(22.6)	(13.6)	6.5	3006.28	安山岩	
315	石頭	4区	B層	(16.9)	(16.7)	5.0	1975.69	デイサイト	
316	石頭	2'区	B層	(19.5)	(17.6)	3.0	1426.22	デイサイト	
317	石頭	旧河道2号	III層	10.9	6.7	6.0	423.2	安山岩	石製品

## VI 自然科学分析

- 1 黒曜石产地推定
- 2 放射性炭素年代測定（AMS測定）
- 3 テフラ同定分析

## 1 黒曜石产地推定

明治大学研究・知財戦略機構 金成太郎  
明治大学名誉教授 杉原重夫

### (1) 測 定 方 法

蛍光X線法を用いて黒曜石の正確な元素分析値を得るには、内部が均質で表面形態が一様な試料を作製し、検量線法などによって定量的に分析を行うのが一般的である。そのためには、試料を粉碎してプレスしたブリケットを作製するか、もしくは溶融してガラスピードを作製する必要がある。しかしながら、遺跡から出土した遺物は、通常、非破壊での測定が要求されるため、上記の方法をとることは困難である。そのため、遺物に直接X線を照射する定性（半定量）分析が行われている。このような直接照射によって発生する蛍光X線の強度そのものは、試料の状態や装置の経年変化によって変動する可能性が高いが、特定元素の強度同士の比を探った場合はその影響は小さいと考えられている。今回は測定強度比をパラメータとして原産地推定を行った。

### (2) 試 料 の 前 処 理

比較用の産出地採取原石については、必要に応じて新鮮な破断面または研磨面を作製し、超音波洗浄器によるクリーニングを行った。遺跡出土遺物は、多くの場合新鮮で平滑な剥離面があるため、試料表面をメラミンスポンジとアルコールで洗浄してから測定を行った。特に汚れがひどい遺物のみ超音波洗浄器を用いた。

### (3) 装 置・測 定 条 件

蛍光X線の測定には明治大学黒曜石研究センター（センター長 小野昭）所管のエネルギー分散型蛍光X線分析装置JSX-3100s（日本電子株式会社）を用いた。X線管球はターゲットがRb（ロジウム）のエンドウンドウ型を使用した。管電圧は30kV、電流は計数率が最適になるよう自動設定とした。X線検出器はSi（ケイ素）/Li（リチウム）半導体検出器を使用した。試料室内の状態は真空雰囲気下とし、X線照射面径は15mmとした。測定時間は240secである。測定元素は、主成分元素はケイ素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、マンガン（Mn）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）の計9元素、微量元素はルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の計4元素の合計13元素とした。また、X線データ解析ソフトには、旧明治大学文化財研究施設製：JsxExtを使用した。

### (4) 原 産 地 推 定 の 方 法

黒曜石はケイ酸、アルミナ等を主成分とするガラス質火山岩であるが、その構成成分は産出地による差異が認められる。とりわけ微量元素のRb、Sr、Y、Zrでは産出地ごとの組成差がより顕著となつ

ている。望月は、この産地間の組成差から黒曜石の産地推定が可能であると考え、上記の4元素にK, Fe, Mnの3元素を加えた計7元素の強度比を組み合わせることで産地分析を行っている（望月ほか1994, 望月1997）。これら7元素による原産地分析の有効性は、ガラスビードを用いた定量分析によつても裏付けられている（鶴野ほか2004）。ここでも、上記した望月の判別方法に準拠する形をとることとし、原産地推定のパラメータにRb分率  $|Rb\text{強度} \times 100 / (A = Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})|$ 、Sr分率 ( $Sr\text{強度} \times 100/A$ )、Mn強度  $\times 100/Fe\text{強度}$ 、 $\log(Fe\text{強度}/K\text{強度})$  を用いて判別図を作製し、判別分析はZr分率 ( $Zr\text{強度} \times 100/A$ ) を加えて行った。

### (5) 黒曜石原産地の判別

#### ①判別図

判別図は、視覚的に分類基準が捉えられる点、および判定基準が分かりやすいというメリットがある。また、測定結果の提示に際し、読者に理解しやすいという点も有効であろう。まず、各産出地採取試料（基準試料）の測定データを基に2種類の散布図（Rb分率vs Mn  $\times 100/Fe$ , Sr分率vs  $\log(Fe/K)$ ）を作製し、各原産地を推定するための判別域を決定した。次に遺物の測定結果を重ね合わせて大まかな判別を行った。基準試料の測定強度比の平均値を表1に示す。

#### ②判別分析

判別図や測定値の比較による原産地の推定は、測定者ごとの恣意的な判断を完全に排除することは難しい。そこで、多変量解析の一つである判別分析を行った。判別分析では、上記のパラメータを基にマハラノビス距離を割り出し、各原産地に帰属する確率を求めた。距離と確率とは反比例の関係にあり、資料と各原産地の重心間の距離が最も短い原産地（群）が第一の候補となる。なお、分析用ソフトには旧明治大学文化財研究施設製：MDR1.02を使用した。また、判別結果の参考資料として、各原産地（重心）間のマハラノビス距離を提示した（表2）。

### (6) 石器の原産地推定結果

今回測定したのは、岩手県奥州市小林繁長遺跡（縄文時代中期中葉～末葉、同時代晚期後葉～弥生時代前期）から出土した黒曜石製造物である。測定した遺物は54点であり、原産地が判別できた遺物は45点であった。図3には、盛岡市川目A遺跡5次や奥州市鶴ノ木南台地遺跡で出土している原産地不明の一群（THK）を示す。IKK3-038, 046, 058は同様の元素強度比を持つと推定されるのでTHKとした。

## 1 黒曜石産地推定

表5 小林繁長遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定結果

試料No	Rb分率	Sr分率	Zr分率	Ma分率 ( $\text{Fe}/\text{K}$ )	Log ( $\text{Fe}/\text{K}$ )	鉱種1	確率	距離	鉱種2	確率	距離	No.	器種	出土地点	剖位	備考
IKC3-024	19.3759	24.6086	42.9862	3.6737	0.4661	北上系A	1.0000	5.1673	ケショマップ系	0.00	58.05	32	石瓢	S803	埋土中	掘範No245
IKC3-025	18.8405	24.6883	41.8389	3.6103	0.4545	北上系A	1.0000	7.2946	ケショマップ系	0.00	56.02	38	石瓢	S803	V層	掘範No244
IKC3-026	18.88174	24.4573	42.5118	3.7267	0.4426	北上系A	1.0000	5.5338	ケショマップ系	0.00	54.30	36	石瓢	調査地区東部	黒色土	
IKC3-027	20.3264	23.9076	41.1538	3.9056	0.4287	北上系A	1.0000	4.6770	ケショマップ系	0.00	51.69	38	石瓢	S803	V層	
IKC3-028	20.5843	23.8641	41.9990	3.6002	0.4510	北上系A	1.0000	13.9604	霞ヶ山系	0.00	45.25	59	石瓢	S803	3区	黒色土
IKC3-029	20.6435	23.7303	41.7015	3.8451	0.4199	北上系A	1.0000	11.3075	ケショマップ系	0.00	48.37	60	石瓢	S803	北東2号	埋土中
IKC3-030	20.5654	22.7853	40.8864	3.9824	0.4243	北上系A	1.0000	3.2794	豊浦系	0.00	56.68	61	石瓢	S801	埋土上位	
IKC3-031	19.3696	24.5438	40.7136	3.5329	0.4521	北上系A	1.0000	16.5002	霞ヶ山系	0.00	49.02	62	石瓢	S801	埋土中	
IKC3-032	19.2034	24.0972	42.8230	3.7845	0.4742	北上系A	1.0000	6.9850	四方野系	0.00	60.09	63	石瓢	S801	埋土中	
IKC3-033	21.2271	21.7641	41.1518	3.9480	0.1382	判別不可	-	-	-	-	-	64	石瓢	S801	埋土中	
IKC3-034	18.6171	24.9255	41.2200	3.6020	0.2219	判別不可	-	-	-	-	-	65	石瓢	S801	埋土中	
IKC3-035	19.1727	24.0223	43.2277	3.5848	0.4645	北上系A	1.0000	8.2942	霞ヶ山系	0.00	53.79	66	石瓢	S801	埋土中	
IKC3-036	19.9898	24.9130	40.6986	3.6049	0.0122	判別不可	-	-	-	-	-	67	石瓢	S801	埋土下位	
IKC3-037	19.6699	23.6745	42.9309	3.6650	0.4841	北上系A	1.0000	12.2643	霞ヶ山系	0.00	61.35	68	石瓢	S801	埋土下位	
IKC3-038	11.8752	14.9672	43.0503	3.4307	0.6701	THK	-	-	-	-	-	69	石瓢	S803	床直	
IKC3-039	19.3269	23.3352	41.1199	3.9216	0.4246	北上系A	1.0000	3.6387	豊浦系	0.00	56.26	70	石瓢	S803 C-C'	埋土中	
IKC3-040	20.6230	22.5566	40.1632	4.0019	0.4379	北上系A	1.0000	12.8258	豊浦系	0.00	66.69	71	石瓢	S803	床直	
IKC3-041	19.5172	23.6211	41.5860	3.9323	0.4479	北上系A	1.0000	3.0366	ケショマップ系	0.00	65.58	72	石瓢	S803 C-C'	埋土中	
IKC3-042	20.3358	24.1502	41.8887	3.5921	0.4647	北上系A	1.0000	8.7925	霞ヶ山系	0.00	50.35	73	石瓢	S803	埋土中-下位	
IKC3-043	19.2213	24.2702	40.3493	3.9796	0.4458	北上系A	1.0000	13.1937	ケショマップ系	0.00	60.76	74	石瓢	S803	埋土中	
IKC3-044	20.3150	22.9784	42.3383	3.6205	0.4688	北上系A	1.0000	19.2521	霞ヶ山系	0.00	48.54	75	石瓢	SK07	埋土中	
IKC3-045	18.4848	23.6957	41.3261	3.6330	0.4743	北上系A	1.0000	6.4798	霞ヶ山系	0.00	62.23	76	石瓢	SK07	埋土中	
IKC3-046	13.2236	14.6332	43.3373	4.2724	0.6844	THK	-	-	-	-	-	77	楕円形石器	SN02	床直	
IKC3-047	19.9969	24.2250	41.7263	3.5099	0.4698	北上系A	1.0000	14.9743	霞ヶ山系	0.00	47.42	78	石瓢	S803	V層	
IKC3-048	20.6580	23.0068	41.0811	3.7413	0.4561	北上系A	1.0000	8.4186	霞ヶ山系	0.00	54.12	79	石瓢	埋土中	二次加工 を有する 石瓢	
IKC3-049	21.4791	22.5193	40.5833	3.8723	0.4492	北上系A	1.0000	17.6549	霞ヶ山系	0.00	56.83	80	石瓢	S803	褐色土	
IKC3-050	39.9564	23.1049	20.8051	16.2450	0.0610	男鹿系	1.0000	11.6632	岩本山系	0.00	35.63	81	石瓢	S803	黒色土-V層	
IKC3-051	9.0097	20.2774	24.6603	4.1219	0.7784	判別不可	-	-	-	-	-	82	石瓢	S803	J区東部	V層
IKC3-052	21.5560	22.1109	40.6925	3.9376	0.2158	判別不可	-	-	-	-	-	83	石瓢	S803	J区東部	V層
IKC3-053	18.9672	25.4678	41.8809	3.7173	0.4660	北上系A	1.0000	3.6214	ケショマップ系	0.00	56.86	84	石瓢	S803	J区東部	V層
IKC3-054	20.1625	25.1623	41.4962	3.6930	0.4662	北上系A	1.0000	6.6873	ケショマップ系	0.00	52.69	85	石瓢	S803	J区	V層
IKC3-055	17.8427	24.6915	41.9702	3.7780	0.4515	北上系A	1.0000	6.7398	ケショマップ系	0.00	63.73	86	石瓢	4区トレソ13	V層	
IKC3-056	20.2473	21.3848	42.5716	4.0103	0.4811	豊浦系	1.0000	10.4121	豊浦系	0.00	63.65	87	石瓢	S803	不明	
IKC3-057	18.5159	24.5362	41.7778	3.7367	0.4457	北上系A	1.0000	4.6394	ケショマップ系	0.00	55.26	88	石瓢	S803	不明	
IKC3-058	13.2291	13.7791	41.4693	4.3066	0.6369	THK	-	-	-	-	-	89	石瓢	S803	V層	
IKC3-059	19.2522	23.7063	42.0780	3.8623	0.4353	北上系A	1.0000	1.5511	ケショマップ系	0.00	65.82	90	石瓢	S803	J区	V層
IKC3-060	20.7538	21.1888	41.9066	3.7571	0.0095	判別不可	-	-	-	-	-	91	石瓢	S803	J区	V層
IKC3-061	20.7947	21.3904	41.8851	3.8395	0.0671	判別不可	-	-	-	-	-	92	石瓢	S803	J区	V層
IKC3-062	10.2413	27.2260	42.6602	3.0436	0.8849	判別不可	-	-	-	-	-	94	石瓢	S803	J区南部	V層
IKC3-063	21.3452	20.7883	41.2219	13.06	0.4131	北上系A	1.0000	18.2297	豊浦系	0.00	59.64	95	石瓢	S803	J区南部	V層
IKC3-064	18.3037	24.6724	42.3617	2.7813	0.4540	北上系A	1.0000	3.9949	ケショマップ系	0.00	62.68	96	石瓢	S803	J区南部	V層
IKC3-065	18.2442	25.2733	42.1071	3.6719	0.4641	北上系A	1.0000	2.7243	ケショマップ系	0.00	60.05	97	石瓢	S803	J区南部	V層
IKC3-066	19.7486	23.2843	41.2711	3.9117	0.4344	北上系A	1.0000	1.2991	豊浦系	0.00	61.57	98	石瓢	S803	不明	
IKC3-067	19.4473	23.3369	41.3079	3.8653	0.4455	北上系A	1.0000	2.2083	ケショマップ系	0.00	65.02	99	石瓢	S803	J区西側	不明
IKC3-068	19.4621	23.9166	42.7631	3.7352	0.4350	北上系A	1.0000	8.7872	ケショマップ系	0.00	52.48	100	石瓢	S803	不明	
IKC3-069	19.9642	22.9060	41.6898	3.7762	0.3861	判別不可	-	-	-	-	-	101	石瓢	S803	J区	埋藏下位
IKC3-070	19.2948	24.5676	40.8588	3.8671	0.4327	北上系A	1.0000	4.8649	ケショマップ系	0.00	52.25	102	石瓢	田河道2号 (J区東部)	新層	
IKC3-071	19.4812	25.2113	41.0569	3.5639	0.4722	北上系A	1.0000	6.6637	ケショマップ系	0.00	56.40	103	石瓢	田河道2号	新層	
IKC3-072	20.5096	22.9570	42.8846	3.8925	0.4341	北上系A	1.0000	7.9132	ケショマップ系	0.00	57.82	104	石瓢	田河道2号	新層	
IKC3-073	19.0512	24.4478	42.8779	3.6560	0.4680	北上系A	1.0000	1.7944	霞ヶ山系	0.00	61.49	105	石瓢	田河道2号	新層	
IKC3-074	18.9122	24.8511	40.9740	3.8116	0.4395	北上系A	1.0000	5.3421	ケショマップ系	0.00	57.81	106	石瓢	田河道2号	新層	
IKC3-075	19.7794	23.6066	39.8122	4.0144	0.4429	北上系A	1.0000	14.1963	ケショマップ系	0.00	67.35	107	石瓢	田河道2号	新層	
IKC3-076	19.8039	24.1626	42.3068	3.7517	0.4350	北上系A	1.0000	8.0450	ケショマップ系	0.00	49.71	108	石瓢	S803	J区中央部	不明
IKC3-077	18.5740	22.9168	43.8236	3.6559	0.4604	北上系A	1.0000	15.9283	霞ヶ山系	0.00	56.81	109	石瓢	当土地不明	不明	



図1 石材遺物(黒曜石)の原産地推定

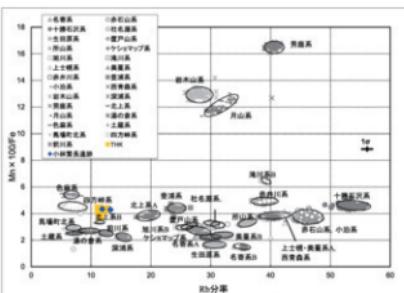
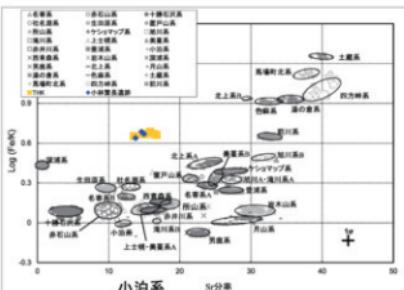
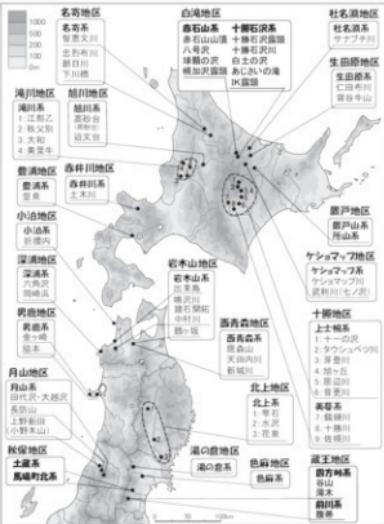


図3-1 濃度や不明遺物の割別図(%)



### ■小泊業 3分率



#### 附図1 石器時代における北海道・東北地方の黒曜石原産地

## 2 放射性炭素年代測定 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

### (1) 測定対象試料

小林繁長遺跡は、岩手県奥州市前沢区白山他（北緯39° 4' 12"、東経141° 9' 48"）に所在する。測定対象試料は、①・②区IV層・IV a層出土土器内面付着炭化物（炭1：IAAA-123238）、⑦区南部IV層出土土器内面付着炭化物（炭2：IAAA-123239）、旧河道2号（①・区東部III層）出土土器外表面（炭3：IAAA-123240）、①区III層上面出土炭化材（炭4：IAAA-123241）、①SK21土坑埋土上位出土炭化材（炭5：IAAA-123242）の合計5点である（表1）。

この遺跡では、基本層序III層が洪水堆積層と捉えられ、その下位に縄文時代晩期を主体とする遺物包含層のIV層、さらに下位に縄文時代前期前葉～後期初頭（主体は中期中～末葉）の遺物包含層V層が検出されている。III層は、出土土器から弥生時代前期を上限とし、上位のII層に十和田aテフラが含まれることから、下限は10世紀前半と見られている。炭1、炭2が採取された土器はIV層出土、炭3が採取された土器はIII層上面出土である。いずれも文様の特徴から縄文時代晩期末葉大洞A'式とされる。炭5は①SK21土坑埋土上位から出土しており、埋土中からは縄文時代前期前葉の土器（大木2a式と推定される）が出土した。また、炭5より上位の層から十和田中振テフラ（To-Cu）と推定される黄色粉状の堆積物が確認されている。

### (2) 測定の意義

炭1～3の測定では大洞A'式の年代、炭4の測定では洪水の年代に関わる情報を得る。炭5の測定では、遺構の帰属年代を明らかにするとともに、大木2a式やTo-Cuテフラの年代に関わる情報を得る。

### (3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸・アルカリ・酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### (4) 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### (5) 算出方法

- 1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- 3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい(<sup>14</sup>Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- 4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「real BP」)という単位で表される。

#### (6) 測定結果

試料の<sup>14</sup>C年代は、①・②区IV層・IVa層出土土器内面付着炭化物の炭1が $2480 \pm 30$ yrBP、⑦区南部IV層出土土器内面付着炭化物の炭2が $2800 \pm 30$ yrBP、旧河道2号(①'区東部Ⅲ層)出土土器外側面煤の炭3が $2470 \pm 30$ yrBP、①区Ⅲ層上面出土炭化材の炭4が $2440 \pm 30$ yrBP、①SK21土坑埋土上位出土炭化材の炭5が $5440 \pm 30$ yrBPである。

曆年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、炭1が756~542cal BC、炭2が994~916cal BC、炭3が751~517cal BC、炭4が732~416cal BC、炭5が4338~4263cal BCの間に各々複数の範囲で示される。

大洞A'式とされる土器に付着していた炭化物3点のうち、炭1と炭3はほぼ同じ曆年年代範囲を示し、他の事例から考えられている大洞A'式の年代値（小林編2008、小林2009）とも整合的である。これらに対し、炭2は明瞭に古い値を示した。一般的に、土器内面付着炭化物は海産物のコゲなどを含んでいる場合があり、海洋リザーバー効果の影響で本来よりも古い年代値となる可能性がある。しかし、炭2の $\delta^{13}\text{C}$ 値から特にそのような傾向を読み取ることはできない。

Ⅲ層上面で出土した炭4は炭1、3とはほとんど同年代となっている。

炭5は縄文時代前期前葉頃に相当する年代値を示し（小林編2008）、To-Cuテフラとの上下関係にも矛盾しない結果と見られる（星、茅野2006）。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-123238	炭1	①・②区 IV層・Na層	土器内面付着炭化物	AAA	-28.63 ± 0.56	2,480 ± 30	73.40 ± 0.24
IAAA-123239	炭2	⑤区南部 IV層	土器内面付着炭化物	AaA	-24.96 ± 0.47	2,800 ± 30	70.57 ± 0.23
IAAA-123240	炭3	旧河岸2号(①・区東部 III層)	土器外表面	AaA	-24.61 ± 0.52	2,470 ± 30	73.56 ± 0.24
IAAA-123241	炭4	①区 III層上面	炭化物	AAA	-24.14 ± 0.71	2,440 ± 30	73.77 ± 0.23
IAAA-123242	炭5	①SK21土坑 理土上位	炭化物	AAA	-27.99 ± 0.40	5,440 ± 30	50.82 ± 0.20

[#5609]

表2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-123238	2,540 ± 30	72.86 ± 0.23	2,483 ± 26	756calBC-727calBC(12.4%) 693calBC-684calBC(3.5%) 699calBC-542calBC(32.3%)	770calBC-500calBC(93.9%) 438calBC-420calBC(1.9%)
IAAA-123239	2,800 ± 30	70.57 ± 0.22	2,800 ± 26	994calBC-988calBC(4.3%) 980calBC-916calBC(63.9%)	1017calBC-899calBC(93.8%) 870calBC-854calBC(1.6%)
IAAA-123240	2,460 ± 30	73.62 ± 0.23	2,466 ± 26	751calBC-687calBC(36.5%) 667calBC-638calBC(11.7%) 621calBC-615calBC(1.9%) 595calBC-517calBC(28.1%)	759calBC-683calBC(29.4%) 670calBC-484calBC(57.3%) 465calBC-416calBC(8.7%)
IAAA-123241	2,430 ± 20	73.90 ± 0.21	2,444 ± 25	732calBC-691calBC(18.3%) 661calBC-651calBC(3.9%) 544calBC-484calBC(35.4%) 465calBC-416calBC(19.6%)	751calBC-689calBC(24.2%) 668calBC-639calBC(7.9%) 619calBC-615calBC(0.4%) 595calBC-408calBC(62.9%)
IAAA-123242	5,490 ± 30	50.51 ± 0.19	5,437 ± 30	4338calBC-4318calBC(23.9%) 4297calBC-4263calBC(44.3%)	4345calBC-4244calBC(95.4%)

[参考値]

## 文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1) , 337-360

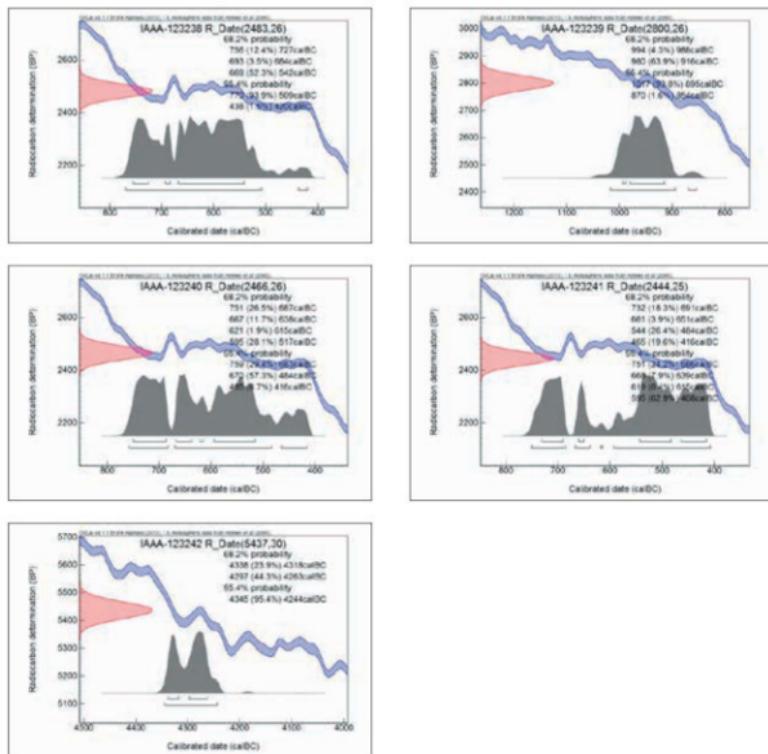
星雅之、茅野嘉雄 2006 十和田中振テフラからみたみ円筒下層 a式土器成立期の土器種相、三内丸山遺跡の生態系史（植生史研究特別2号）, 151-180

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82

小林達雄編 2008 細観縄文土器、細観縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51 (4) , 1111-1150

Sstuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{13}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19 (3) , 355-363



[参考] 历年較正年代グラフ

### 3 テフラ同定分析

(株) 火山灰考古学研究所

#### (1) はじめに

東北地方胆沢扇状地とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、焼石、栗駒、鳴子、肘折、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、姶良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる（町田・新井、1992、2003など）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、奥州市前沢区小林繁長遺跡における発掘調査についても、発掘調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ分析と火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定を実施して、その起源を明らかにすることになった。調査分析の対象となった試料は、KBSN12-1・SP1（試料1）とKBSN12-2・SP2（試料2）の2試料である。

#### (2) テフラ分析

##### 1 分析試料と分析方法

KBSN-12・SP1とKBSN-12・SP2の2試料について、火山ガラスの形態色調別含有率など定量的に調べる火山ガラス比分析と重鉱物の組成を具体的に明らかにする重鉱物組成分析（合わせてテフラ組成分析と呼ぶ）を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 8 gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いて泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察（テフラ検出分析）。
- 5) 分析筒を用いて1/4~1/8mmと1/8~1/16mmの粒子を篩別。
- 6) 偏光顕微鏡下で1/4~1/8mm粒径の250粒子を観察し、火山ガラスの形態別含有率、軽鉱物および重鉱物の含有率を求める（火山ガラス比分析）。
- 7) 偏光顕微鏡下で1/4~1/8mm粒径の重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

##### 2 分析結果

火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果を表1と表2に、また火山ガラス比分析と重鉱物組成分析（合わせてテフラ組成分析と呼ぶ）の結果をダイヤグラムにして図1に示す。

KBSN-12・SP1には、火山ガラス、軽鉱物、重鉱物、その他の粒子（風化物や岩片などの砂粒子）が、順に4.0%、31.2、4.0%、60.8%含まれており、火山ガラスや清澄な鉱物が少ない。含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に纖維束状軽石型(24%)、分厚い中間型(12%)、無色透明のバブル型(0.4%)である。

また、この試料に含まれる重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石(46.8%)、不透明鉱物（おも

に磁鉄鉱、28.0%)、單斜輝石(12.8%)、角閃石(10.0%)である。

一方、KBSN-12・SP2には、火山ガラス、軽鉱物、重鉱物、その他の粒子(風化物や岩片などの砂粒子)が、順に20%、53.2%、5.6%、39.2%含まれておらず、やはり火山ガラスの含有率は低い。含まれる火山ガラスは、中間型(0.8%)のほか、纖維束状軽石型、スponジ状軽石型、無色透明のバブル型(各0.4%)である。また、この試料に含まれる重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石(57.2%)、單斜輝石(16.0%)、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱、13.6%)、角閃石(10.8%)である。

### (3) 屈折率測定

#### 1 測定試料と測定方法

KBSN-12・SP1とKBSN-12・SP2の2試料に含まれる火山ガラスと斜方輝石について、温度変化型屈折率測定装置(京都フィッシャン・トラック社製RIMS2000)により屈折率( $n_r$ 、 $\gamma$ )の測定を行って、指標テフラとの同定精度の向上を図った。屈折率測定の対象は、篩別により得られた1/8-1/16mm粒径の火山ガラスと、実体顕微鏡下で手選した>1/4mmの斜方輝石を軽く粉砕したものである。

#### 2 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。KBSN-12・SP1に含まれる火山ガラス(40粒子)の屈折率( $n_r$ )のrangeは1.492-1.501で、実際には、1.492(1粒子)と1.494-1.501(39粒子)からなる。また、斜方輝石(40粒子)の屈折率( $\gamma$ )のrangeは1.700-1.723で、1.700-1.704(9粒子)、1.708-1.719(28粒子)、1.721(2粒子)、1.723(1粒子)からなる。

一方、KBSN-12・SP2に含まれる火山ガラス(40粒子)の屈折率( $n_r$ )のrangeは1.493-1.503で、実際には、1.492(1粒子)と1.494-1.501(39粒子)からなる。また、斜方輝石(35粒子)の屈折率( $\gamma$ )のrangeは1.701-1.721で、1.701(1粒子)、1.703-1.708(7粒子)、1.708-1.710(6粒子)、1.713-1.721(21粒子)からなる。

### (4) 考察—テフラ粒子の起源について

今回の分析のおもな目的は、約6,000年前に十和田火山から噴出した十和田中振テフラ(To-Cu、大池ほか、1966、早川、1983a、町田・新井、1992、2003)の試料での有無を明らかにすることである。このTo-Cuは、仙台市周辺のみならず、吾妻山地や飯豊山地など福島県域でも発見されていることから(早田ほか、1987など)、本遺跡周辺に降灰したことは確実である。ただし、分析で明らかになつた2試料に含まれる屈折率特性をみると、To-Cu起源の火山ガラスが混在している可能性は低い。また、2試料とも、斜方輝石の一部にTo-Cu起源のものが含まれている可能性を否定できないものの、本地域には同じような斜方輝石の屈折率特性をもつ十和田八戸テフラ(To-H、早川、1983b、Hayakawa、1985、町田・新井、2003など)が降灰した可能性があることも考慮しなければならない。

なお、2試料の火山ガラスの屈折率特性を単純にみる限り、混在している可能性がもっとも高いテフラは、宮城県域北部でAT上位の後期旧石器時代の指標となっている鳴子潟沼上原テフラ(Nr-KU、早田、1989、町田・新井、2003など)である。ただし、斜方輝石の中にもNr-KUに含まれる斜方輝石の屈折率特性をもつものが含まれているものの、実際には火山ガラスや斜方輝石の屈折率のrangeは

広く、Nr-KUの本質物質（軽石）に含まれていない角閃石の含有率も比較的高い。また、火山ガラスの中には降灰後に風化あるいは円磨されて角がとれたようなものも含まれている（写真2）。これらのこととは、試料中に様々な起源をもつテフラ粒子が混在していることを示唆している。

今後は、信頼度の高い電子プローブマイクロアナライザ（EPMA）を利用しての火山ガラスや不透明鉱物（おもに磁鉄鉱）の主成分組成分析を合わせて実施して、個々の粒子の起源が解明されると良い。

### （5）まとめ

奥州市前沢区小林繁長跡で採取されたテフラ分析用試料を対象に、テフラ分析、火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定を実施して、東北地方における縄文時代の重要な時空指標である十和田中振テフラ（To-Cu、約6,000年前）の有無を調べた。その結果、確実にTo-Cuに由来することがわかるテフラ粒子は認められなかった。

### 文献

- 早川由紀夫（1983a）十和田中振テフラ層の分布、粒度、組成、年代。火山、28, p.263-273。  
 早川由紀夫（1983b）火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰。火山、28, p.25-40。  
 Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.  
 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.  
 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p.  
 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ。科学、51, p.562-569。  
 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）馬鹿川中・下流沿岸の段丘と火山灰。 第四紀研究、5, p.29-35.  
 早田 勉（1989）テフロクロノロジーによる前期旧石器時代遺物包含層の検討。第四紀研究、27, p.269-282.  
 早田 勉・八木浩司・西城 潔・新井房夫・高田将志（1988）縄文時代の示標テフラー呑妻火山灰（演旨）。 東北地理、40, p.231.

表1 火山ガラス比分析結果

地点・試料	bw/cl	bw/pb	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
KBSN-12・SP1	1	0	0	3	0	6	78	10	152	250
KBSN-12・SP2	1	0	0	2	1	1	133	14	98	250

bw: バブル型。md: 中間型。pm: 軽石型。cl: 無色透明。pb: 淡褐色。br: 褐色。sp: スポンジ状。fb: 繊維秉状。

数字は粒子数。

表2 重鉱物組成分析結果

地点・試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
KBSN-12・SP1	0	117	32	25	0	70	6	250
KBSN-12・SP2	0	143	40	27	0	34	6	250

ol: カンラン石。opx: 斜方輝石。cpx: 単斜輝石。am: 角閃石。bi: 黒雲母。opq: 不透明鉱物（おもに磁鉄鉱）。

数字は粒子数。

表3 層折率測定結果

試料(地点・層位)	火山ガラス		斜方輝石		文献
	層折率(n)	測定粒子数	層折率(r)	測定粒子数	
KBSN-12・SP1	1.492-1.501 (1.492, 1.494-1.501)	40 (1, 39)	1.700-1.723 (1.700-1.704, 1.708-1.719, 1.721, 1.723)	40	本報告
KBSN-12・SP2	1.493-1.502	40	1.701-1.721 (1.701, 1.703-1.706, 1.708-1.710, 1.713-1.721)	35	本報告

岩手県南部の後期更新世以降の代表的角閃テフラ

白頭山苔小牧(B-Tm, 10世紀)	1.511-1.522 (1.515-1.520)	町田・新井(2003)
十和田a(To-a, 915AD)	1.500-1.508 <sup>a)</sup>	町田・新井(2003)
稚名二号伊保保(H=FP, 6世紀中葉)	1.501-1.504	町田・新井(2003)
沼沢湖(Nm-N, 5ka <sup>a)*2</sup> )	1.500-1.505	町田・新井(2003)
十和田中層(To-Cu, 6ka)	1.508-1.512	町田・新井(2003)
(安家火山灰、岩手県岩泉町)	1.507-1.513	早田ほか(1988)
(香妻火山灰、福島県東吾妻)	1.507-1.512	早田ほか(1988)
鬼界アカホヤ(K-Ah, 7.3ka)	1.509-1.516	町田・新井(2003)
肝折尾花沢(H=O, 11-12ka <sup>a)*2</sup> )	1.499-1.504	町田・新井(2003)
十和田八戸(To-H, 15ka)	1.505-1.509	町田・新井(2003)
浅間津川(A=K, 15-16.5ka)	1.501-1.503	町田・新井(2003)
浅間板鼻黄色(As-YP, 15-16.5ka)	1.501-1.505	町田・新井(2003)
鳴子湯沼上原(Nr-KU)	1.492-1.500	町田・新井(2003)
姫良Tn(AT, 28-30 ka)	1.499-1.501	町田・新井(2003)
十和田大不動(To-Of, ≥32ka)	1.505-1.511	町田・新井(2003)
鳴子柳沢(Nr-Y, 41-63 ka)	1.500-1.503	町田・新井(2003)
徳右山形(Y-Y)	1.501-1.503	町田・新井(2003)
徳右村飛野(Y-M)	1.503-1.508	町田・新井(2003)
穂子荷沢(Nr-N, 90ka)	1.500-1.502	町田・新井(2003)

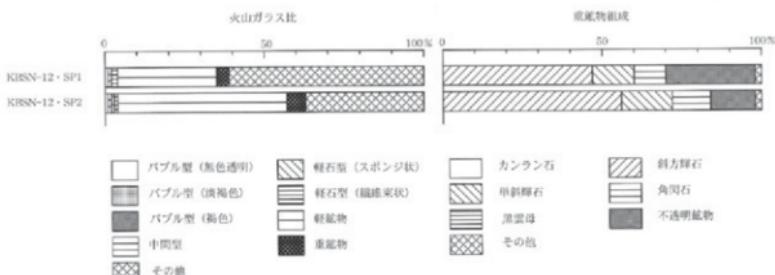
\*1 岩手県域での層折率。○:中央値およびmodal range. ka: 1,000年前前 \*2: 放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代

図1 小林繁長遺跡のテフラ組成ダイヤグラム



写真1 KBSN-12・SP1  
織維束状軽石型ガラス（中央左）と  
バブル型ガラス（中央下）。



写真2 KBSN-12・SP2  
織維束状軽石型ガラス（中央）.円磨を  
受けている。

## VII 総括

今回の小林繁長遺跡の調査は、農道・水路の改築部分を対象とし、幅3~12mで、長さは北東-南西方向で約400m、北西-南東方向で約50mに亘り、調査面積5,800m<sup>2</sup>を実施した。その結果、縄文時代前期前葉～晩期末葉及び弥生時代前期を中心とする遺構、遺物が検出された。

### 1 遺構

堅穴住居跡4棟、土坑21基、焼土遺構3基、埋設土器1基、集石1基、柱穴状土坑105個を検出した。ここでは縄文時代（以後本章では適宜「時代」を省略する）と特定できる遺構を中心に総括する。

堅穴住居跡は、縄文中期後葉1棟（SI04堅穴住居跡）、中期末葉3棟（SI01・02・03堅穴住居跡）を検出した。堅穴住居跡の規模や平面形が把握できたのはSI03堅穴住居跡1棟のみで、傾向については多くを言及し難い。炉の形態は、大木9式期のSI04堅穴住居跡が石囲炉、大木10式中相SI03堅穴住居は複式炉、大木10式新相のSI01堅穴住居跡は土器埋設石囲炉を持つ。SI04堅穴住居跡は、③区南部に位置するが、周囲からは同時期の遺構が未検出にある。また、SI01~03堅穴住居跡は、旧河道2号より西側に占地している。上記の内容を総括すると、縄文中期後葉～末葉の集落は、空間占地や遺物出土量の状況から、元々小規模な集落である可能性と、旧河道2号を挟み調査区外西側（旧河道1号の流路に近い部分）や調査区外東側（現在民家が多くある部分）の微高地に居住城が存在・広がる可能性で考えられよう。

土坑は21基中17基が縄文時代である。断面形の違いで分類すると、フラスコ形1基（SK21土坑）、ビーカー形4基（SK16・19・20・22土坑）、鉢形4基（SK06・07・17・18土坑）、シャーレ形4基（SK11・12・13・15土坑）、皿形3基（SK14・23・24土坑）、その他1基（SK10土坑）の6種類に大別される。ただし、土坑上部が破壊を受けていることを鑑みると、本来シャーレ形や皿形はビーカー形・鉢形・フラスコ形などであった可能性を有する。今回の調査成果からは、フラスコ形は前期前葉、ビーカー形・鉢形は中期（中期末葉中心か）に構築されたと考えられる。その他としたSK10土坑は、開口部形状が長楕円形で、壁中部～底部が長方形の箱型を呈する形態的な特徴から、中期前半期頃の陥し穴と推定される。

焼土遺構は3基中2基が縄文時代と捉えられる（SN02・05焼土）。検出面は2基ともIV層上位で現地性の焼土である。

埋設土器は、縄文晩期末葉1基が①区IV層上位で検出された（掲載番号32の土器）。正立の状態で埋設されている。

集石はSI01堅穴住居跡（中期末葉）の東側で検出された。時期は特定できないが、遺構検出面からは縄文晩期の可能性がある。

### 2 遺物

今回の調査では縄文土器大コンテナ16箱（約226kg）、弥生土器小コンテナ（42×32×10cm）1箱分、古代土器6点、陶器2点、石器類大コンテナ11箱分（410点）、土製品17点出土した。縄文時代～弥生時代以外の時期としては、平安時代のロクロ土師器の底部破片と胴部小破片、12世紀の常滑産陶器1

点、及び產地・時期不明の陶器1点が出土している。以下には遺跡の主体を占める縄文・弥生時代の遺物について総括を行う。

### (1) 縄文・弥生土器

縄文前期の土器は、大木2a・3・6式に相当するものが少数出土した。SK21土坑出土の24~26は前期前葉大木2a式期と推定されるが、小片のみで土器型式の特定が難しいものを含む。大木3式は全体で2点の出土である。明瞭な文様を持つ126は良好資料と思われる。大木6式は、出土点数は少ないが、114・124・125など属性を窺える資料を得られた。松田光太郎氏の研究（松田：2003）に準拠すれば、114は大木6式中段階新相、124・125は大木6式古段階に相当しよう。

縄文中期の土器は、大木7a?・7b?・8a・9・10式が認められる。大木7a~7b式は、出土点数が少なく、破片資料のみである。大木8a式は一定数の出土を得られ、大木8a式の中では新段階と捉えられる。次の大木8b式は今回の調査では認知していない。大木9・10式は一定数の出土を得られた。中期は大木10式の出土点数が最も多かったが、大木10式の中では新段階に相当するものが主体である。

縄文後期の土器は、初頭門前式が少数と中葉（十腰内II式並行期と推定される）1点の出土である。主な出土地点をみると、④区V層からが多いが、この部分は旧河道2号の流路からわずかに逸れ、また、前時期である大木10式とは主要な出土地がやや相違する。

縄文晩期及び弥生前期の土器は、大洞C2~A'式及び青木畑式が出土している。主体は大洞A'式である。遺物包含層のIV層や旧河道2号中心に出土した。全体的には器形全体を窺える資料は少ない。また、器種組成についても窺うことは難しいが、整理作業時の所見からは深鉢、浅鉢、鉢、壺の順に多い様相にある。注口土器について、36を注口土器の注ぎ口と推定したが明確ではなく（土偶？の可能性もある）、今回の調査からはほぼ皆無な状況にある。また、弥生時代の特徴の1つと捉えられる蓋についても出土していない。

### (2) 土 製 品

土偶、ミニチュア土器、円盤状土製品、三角形土製品が出土した。土偶は結髪土偶の顔1点、右足部2点、肩部？1点である。時期は縄文晩期中葉～末葉の産物と推定される。ミニチュア土器は2点出土した。時期は特定が難しいが、何れも縄文中期と推定される。円盤状土製品は、前期前葉・中期末葉～後期初頭・晩期中葉～後葉と推定されるものが出土している。三角形状土製品は1点出土した。縄文時代中期末葉の可能性がある。

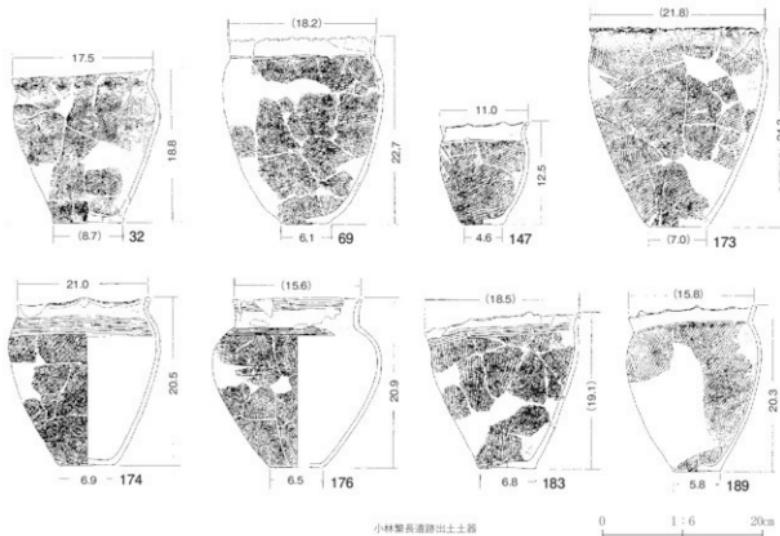
### (3) 石 器

石器は剥片を含めると410点出土した。剥片石器は、石鏃11点、尖頭器3点、搔器18点、範状石器2点、楔形石器1点、剥片123点、チップ1点、石核7点である。その内、黒曜石製が55点認められた。礫石器は、磨製石斧2点、磨製石斧未成品13点、敲磨石198点、礫器8点、石錘3点、台石15点、石皿3点である。石刀、石棒など明らかな石製品は認められなかった。石器材料は、剥片石器が頁岩主体に瑪瑙・赤色頁岩・黒曜石などが用いられている。加えて黒曜石は、製品自体は少ないが、剥片は一定数の出土を得られ、石材の產地は北上系産及び男鹿系産との同定結果を得られた。礫石器はデイサイト主体に凝灰岩・ホルンフェルス・安山岩が用いられている。デイサイトや頁岩など主要な石材の產地は奥羽山脈が起源と推定される。

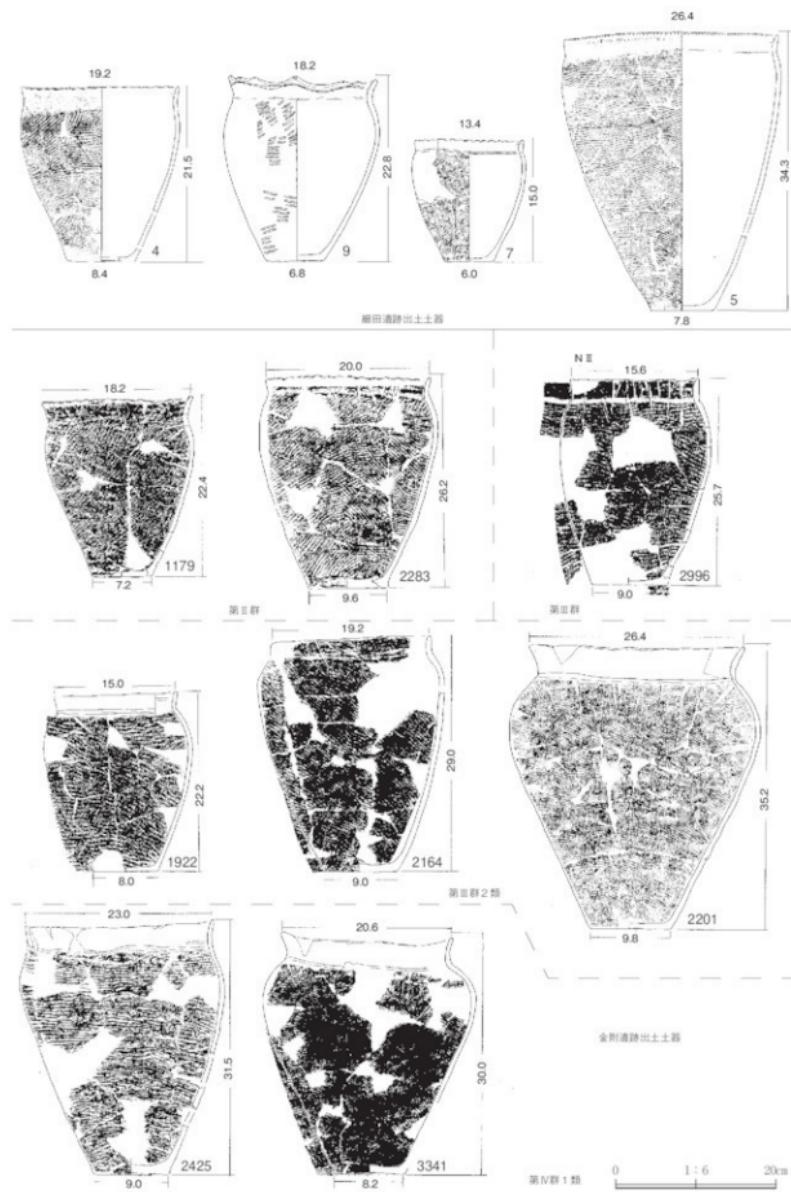
本遺跡出土石器の出土数の割合は礫石器（242点）が多く、剥片石器（剥片・チップ・石核を除くと37点になる）は少ない。礫石器の中では敲磨石（198点）が群を抜き多い。石器の器種組成を層位別に探ると、Ⅳ層（縄文晩期後半主体）とV層（縄文中期主体）で出土量に差異が看取されない（ほぼ同じ割合にある）。この内容が生業に反映していると仮定すれば、あるいは本遺跡の主体を成す縄文中期と晩期後半では生業にあまり変化がなかったことも示唆される。近隣の調査事例を見ると、何れも縄文晩期を中心とする白山上野遺跡、川岸場I遺跡、川岸場II遺跡は剥片石器が主体を占め、礫石器が少なく、本遺跡とは相反した内容にある。石製品類は、本遺跡と同様に3遺跡全般に少ないと想われる。

### 3 縄文晩期後葉～弥生前期深鉢形土器の若干の考察

今回の調査で最も多く出土したのは、縄文晩期後葉～弥生前期の時間幅で捉えた口頸部が無文帯をみる深鉢形土器で、編年の基軸となる鉢、台付鉢（高杯）、浅鉢などとの共伴性が認めなかったこともあります、時期の絞り込みがでなかった土器群である。最大の特徴としては、上述の通り口頸部が無文帯をみる土器が多く、北上市九年橋遺跡に多く見られる口頸部に数条の平行沈線を施すもの（いわゆる九年橋型）は少ない。このことは、本遺跡出土土器の中心時期が、九年橋遺跡の中心時期である大洞C2式よりは新しい時期に帰属すると捉えられよう。第44図上段には完形・略完形にまで復元できた個体を中心に集成した。第45図には細田遺跡（岩手理文：1999）Ⅲe層出土土器（註1）と、金附



第44図 縄文晩期後葉～弥生前期土器集成図（1）



第45図 繩文晩期後葉～弥生前期土器集成図（2）

遺跡（岩手埋文：2006）第II群・III群1類・III群2類・IV群1類土器の中で、口径・底径・器高の把握できる深鉢に限定・集成し分析対象とした。両遺跡ともに本遺跡と同様北上川中流域の当該事例である。

以下には本遺跡で主体的に見られた深鉢を対象に、細田遺跡、金附遺跡との比較・検討を行い、当該時期深鉢の特徴の抽出を試みる。

ア 資料内容・時期・・・細田遺跡は、III a～III f層まで分層されているが、層位に関わらず全般的に本遺跡資料と類似するものが多く見られる。今回はIII e層出土土器に限定し取り上げた（註1）。細田遺跡の報文によれば、このIII e層出土土器は山王団遺跡出土の大洞A'式と組成比率が近似し、加えて山王団遺跡III層やV層に相当する土器が極めて少ないと考察されており、山王団遺跡IV層出土と並行する土器群が中心と考えられる。金附遺跡資料は、大洞A'式古段階（第II群土器）～谷起島式古段階（第IV群1類）まで網羅される資料である。第44図に集成した小林繁長遺跡出土土器の大半は、金附遺跡第II群土器（大洞A'式古段階）と類似するものが中心で、少数が金附遺跡第III群1類（大洞A'式新段階※最新の幅年では青木畠式古段階に比定されるらしい）若しくは金附遺跡第III群2類（青木畠式新段階）と捉えられる。加えて、金附遺跡第IV群1類（谷起島式古段階）まで下るものはないと判断される（註2）。

上記の内容を踏まえると、小林繁長遺跡出土土器は概ね大洞A'式の範疇に収まり、強くは言及し難いが大洞A'式の古段階（註3）を中心とする可能性が高い。例外として、174と176は、今回取り上げた深鉢の中ではいわゆる精製土器と捉えられるが（※他は粗製土器）、金附遺跡第III群2類期前後に比定できる可能性を有しよう。

イ 口頭部の特徴・・・平縁と小波状口縁が見られ、後者の採用率が高い。突起を持つものは少ない。口頭部は全て無文帯のものと、174・176・182のように無文帯の上若しくは下に横位平行の文様（工字文など）が採用されるものがあり、前者が主体にある。全て無文帯をみるものは、胴部との境に横位の沈線を持つもの（69・147・189）と持たないもの（32・173）がある。無文帯の幅は1.5～2.9cmを測る（※本遺跡の最大値は集成図に採用しなかった184・185の3.5cm）。本遺跡資料からは、無文帯の幅 자체は口径や器高の数値に比例して広くなるわけではないと判断される。

ロ 口頭部無文帯は、細田遺跡III e層出土土器で平均値20cm、金附遺跡は第II～IV群1類まで平均値2.6cmである。細田遺跡III e層出土土器は本遺跡とほぼ同様の値にある。金附遺跡出土土器は極端な差異ではないが、本遺跡よりやや幅広の傾向で捉えられる。

ウ 脇部地文・・・地文は、原体全てLRが採用されており、回転方向も横回転と斜め回転に限定される様相・手法にある。縱回転は基本的には看取されない。地文は本遺跡の晩期土器全般的な傾向として、LRの原体による横回転や斜回転による規格性の高さが窺える。特異な例として174・176は、局所的に地文をナデ消している。

細田遺跡III e層出土土器においても地文の種類はほぼLRである。金附遺跡は、第II群まではLRの採用率が高い傾向で捉えられるが、第III群1類以降にRLを施すものが少數含まれ、合わせて横回転や斜位回転との併用で縱回転が一定量散見される。上記の内容からは、第III群1類段階（大洞A'式新段階）から、規格性がやや弱くなることが示唆できようか。

エ 法量・・・口径は11～24.2cmで、平均値は16.9cm、小型と捉えられる147を除くと平均値は17.7cmである。なお、最大幅は、口径を持つもの、胴部上半に持つもの、口径と胴部上半の両者に最大幅を持つもの、の3者がある。胴部上半に持つものが主体である（最大幅平均値18.1cm）。174は胴部上半の張り出しが強く、口径よりも5cm以上大きな値を示し、今回出土した深鉢の中では突出した

存在にある。底径は5.8～8.7cmで、平均値は6.55cmになる。小型の147の底径より普通サイズの189の底径が小さい。器高は12.5～24.3cmで、平均値は19.9cm、小型と捉えられる147を除いた平均値は20.94cmである。本遺跡から器高25cmを越えるものは認められない。法量の相関関係は、最大幅÷底径では2.05～3.28で平均値2.79、器高÷底径は2.16～3.47で平均値3.07、最大幅÷器高は0.73～1.0で平均値0.88である。最大幅÷底径や器高÷底径の値が2.5以上を示すものは、底径に対する最大幅・器高の比率が高いと判断される。本遺跡資料では、最大幅や器高に対して底径が小さなもののが主体的で、正立で置くことを想定した場合は不安定な器形の深鉢が多いことが指摘される。ただ、今回の調査で土器の使用状態の一端を窺うことができるのは32の埋設土器だけであり、深鉢形の土器の使用状態を言及するには情報不足にある（註4）。

遺跡名・層位名	口頭部無文帯の幅(cm)	口径(cm)	胴部 最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	口径/底 径	最大幅/ 底径	器高/ 底径	口径/ 器高	最大幅/ 器高
小林繁長平均値	2.10	16.90	18.10	6.55	19.90	2.59	2.79	3.07	0.85	0.88
細田遺跡Ⅲe層出土土器平均値	2.00	19.30	19.50	7.25	23.40	2.65	2.67	3.20	0.84	0.85
金附遺跡平均値	2.60	19.80	22.80	8.73	27.80	2.27	2.61	3.18	0.71	0.81
金附遺跡 II群	2.50	19.10	20.10	8.40	24.30	2.31	2.41	2.92	0.79	0.83
金附遺跡 III群1類	2.80	15.60	18.60	9.00	25.70	1.73	2.07	2.86	0.61	0.72
金附遺跡 III群2類	2.60	20.20	24.00	8.93	28.80	2.24	2.66	3.20	0.70	0.81
金附遺跡 IV群1類	2.50	21.80	25.80	8.60	30.80	2.54	3.01	3.58	0.71	0.84

第13表 縄文晩期後葉～弥生前期土器法量値・相関値の平均

小結、細田遺跡Ⅲe層出土土器、金附遺跡第II群土器の口径、器高、底径の平均値と比較してみると、細田遺跡Ⅲe層出土土器と金附遺跡第II群はほぼ同じ数値を示し、小林繁長遺跡出土土器が最も小さい。さらに金附遺跡第III群2類や第IV群1類が突出して大きい値を示すことも指摘できよう。法量の相関関係を比較すると、小林繁長遺跡出土土器、細田遺跡Ⅲe層出土土器、金附遺跡第II群土器は、器高÷底径や最大幅÷器高の平均値が類似した値を示す。これらのことから、小林繁長遺跡出土の深鉢は、比較した2遺跡に比べて法量の小さな土器が主体と考えられるものの、相関関係からは同じ仕様・規格の器形が制作されていると推定される（註5）。このことから、今回取り上げた深鉢形土器は規格性が高く、少なくとも大洞A'式古段階墻においては北上川中流域の遺跡間で交流ネットワークが存在・確立していた可能性が高い。また、土器の製作上の観点からは、大洞A'式古段階～谷起島式古段階まで変化は漸移に推移していることが窺える。ただ、時期が新しくなるにつれ土器の法量が大型化し、規格性がやや弱まる傾向にあることが指摘されよう。

#### 4 旧河道について

今回的小林繁長遺跡の調査では2条の旧河道が検出された。縄文集落の空間占地や遺物包含層の形成と分布範囲及び遺存状態は、この2条の旧河道が密接に関係していると考えられる。縄文時代の河遺跡である旧河道2号は、北上川に近い調査区東側に流路を持ち、北東→南西に向かって流れていたことが判明した。古代頃の河遺跡である旧河道1号（※堆積土中に十和田テフラを含む）は、旧河道2号より西側に位置し、加えて流路の一部は段丘面との地形変換点付近にまで展開する様子にある。旧河道2号の流路が西へ変遷したものが旧河道1号と調査判断されるが、旧河道2号の流路より西側

の調査区からIV・V層の検出がほとんど認められなかつたことは、旧河道1号への変遷過程で削られ流された可能性も示唆される。テフラの検出状況をみると、今回の調査で十和田aテフラは旧河道1号の流路内の堆積土からのみ検出され、十和田中振テフラと推定されるもの（※テフラ分析からテフラ粒子が認められていない）は両旧河道の流路から微妙に外れる⑥区東端部付近より検出された土坑の埋土上位に認められた。また、白山上野遺跡からは十和田aテフラを含まない（縄文時代の可能性がある）古い旧河道が検出されている。さらに、同遺跡のテフラ分析から晩期土器出土層位（Ⅶ層）より下位のⅧ層から十和田中振テフラが検出されていることは特記事項の一つである（奥州市埋文：2011）。北上川と松の木沢川の現在の合流地点は、本遺跡から東へ約200mに位置する。これらの内容を踏まえると、十和田中振テフラ降下期を前後して、本遺跡には現松の木沢川か若しくは北上川から枝分かれした旧河道が存在し、さらに西側の一段高い面（小林繁長遺跡前回調査地、白山上野遺跡、合野遺跡が所在する）にも幾つかの旧河道が流れていたと想定される。それら旧河道の流路が、本地域の集落形成に大きな影響を与えたことは想像に難くない。北上川の洪水時には、今回の調査区をはじめ周辺部の遺跡においても一部の微高地を除き氾濫原地域に転化されたことが想定される。その中でも、本遺跡に洪水堆積層をもたらした弥生前期以降平安前期以前に発生した大規模な自然災害（洪水現象）は、本遺跡のみならず本地域に甚大な被害を与えたことは想像に難くない。

## 5 分析結果から

今回の調査では黒曜石産地同定、テフラ同定分析、年代測定の分析を委託・実施した。

### (1) 黒曜石

黒曜石は、SI01・03堅穴住居跡（縄文中期末葉）を中心に、遺物包含層IV層やV層などから出土した。共伴土器などから、縄文中期末葉を中心に晩期後半に帰属すると推定される。分析を実施した54点中、北上系産41点、男鹿系産1点、産地不明9点、黒曜石以外の石材3点、の結果を得られた。

### (2) テフラ

テフラ分析はSK01土坑の埋土最上位から検出した黄色を呈する粉状物について分析を実施した。分析の結果、テフラ粒子は認められなかつた。この土坑からは前期前葉大木2a式土器が出土しており、テフラと推定した黄色の粉末より下位の埋土出土炭化材の年代測定値は $5,440 \pm 30$ yrBPを得られた。年代測定値や出土土器及び調査者の経験から所見を述べれば、この黄色の粉末は十和田中振テフラの可能性が高いと判断される。しかしながら、テフラは堆積が非常に薄く、尚且つ微量の状況であったこともあり、調査時のサンプリングに問題があった可能性も否定できない。何れ、分析で裏付けを得られなかつたことは残念な結果だったと言える。

### (3) AMS 年代測定

AMS年代測定は5点実施した。その結果、炭1とした②区IV層出土土器43の土器内面付着炭化物が $2,480 \pm 30$ yrBP、炭2とした①'区IV層出土土器42の内面付着炭化物が $2,800 \pm 30$ yrBP、炭3とした①'区III層出土158の土器外面付着煤が $2,470 \pm 30$ yrBP、炭4とした①区III層上面出土炭化材が $2,440 \pm 30$ yrBP、炭5とした①SK21土坑埋土上位出土炭化材が $5,440 \pm 30$ yrBPの測定結果を得られた。炭1～3は大洞A'式期の土器付着煤で、その中でも炭1と炭3は過去に実施された大洞A'式の年代

測定値と整合する旨の結果を得られた。炭4はⅢ層洪水堆積土中から出土した炭化材で、洪水発生年代の上限を示す可能性もある（註6）。炭5は前期前葉土器が出土した土坑埋土から出土した炭化材である。加えて、テフラ分析ではテフラ粒子が認められなかったが、十和田中振火山灰と推定される堆積物よりも古期と捉えられる。土坑出土土器は何れも小片であるが、大木2a式の可能性があり、当該時期の年代を探る上で貴重な情報を提供すると捉えられる。

## 6 まとめ

今回の調査では、縄文中期後葉～末葉の集落跡の検出と、縄文中期を中心とするV層と縄文晩期中葉～弥生前期を中心とするIV層の、2枚の遺物包含層の検出が成果として挙げられる。合わせて、Ⅲ層とした洪水堆積層を確認できたことも成果の一つである。小林繁長遺跡の包蔵地範囲は非常に広く、また近隣の白山上野遺跡や川岸場I・II遺跡からは本遺跡と同時期の遺構・遺物が検出されていることから、ここでは過去に実施された周辺遺跡の調査成果を加味してまとめてみたい。

縄文前期の土器は、大木2a・3・6式に相当するものがそれぞれ少数認められる。近隣の調査遺跡を見る限り本地域の縄文前期は、前期前葉の土器が数点出土した白山上野遺跡と、前期末葉を中心とする集落が検出された田高II遺跡があるものの、事例は非常に少ない。ただ、縄文前期の指標テフラの一つである十和田中振テフラが白山上野遺跡で検出されており、また本遺跡においても同テフラと類似するものが検出されていることは特記事項であり、水沢段丘高位面においても前期の活動痕跡を示す事例が見つかる可能性を示唆するものと展望できよう。

縄文中期は、大木9式期1棟と大木10式期3棟の堅穴住居跡を検出し、併せて大木8a式の新段階に相当する土器の出土が認められた。加えて、中期の土器は、大木7a～7b式は少量、大木8b式は皆無に近い出土状況にある。今回の調査区西側で一段高い面を調査した前回調査区（岩手埋文第570集：2010）は、縄文中期の堅穴住居跡を始め、捨て場2か所（2区捨て場と9区捨て場）などが検出されている。現在の白山小学校付近には、縄文中期初頭～中葉を中心とする規模の大きな集落跡が広がると推定される。2区捨て場は大木7a～8a式が主体、9区捨て場は大木8b式主体にあり、両捨て場は約250m離れて位置するが、出土土器の傾向としては大木7a～8b式など中期の初頭～中葉を中心とし、大木8a式は古段階主体、大木9式は少なく、大木10式は皆無にある。今回の調査区から出土の少ない時期の土器が主体的で、逆に今回の調査区から一定量得られている時期の土器が皆無に近い状態に見て取れる。縄文中期の時間幅においても、時期により人的活動の中心空間が微妙に変化していることが示唆され、移動行為などの現象・内容が想起される。

縄文後期は、初頭門前式は④・⑤区のV層を中心に一定量の出土を得られたが遺構は未検出で、またそれ以降の時期は皆無な状況にある。白山上野遺跡で後期初頭～中葉の土器と、川岸場I遺跡で後期後葉期前後の土器が得られているものの、本地域の縄文後期の様相は現時点では掴み難い。

縄文晩期及び弥生前期は、遺物包含層IV層より縄文晩期中葉～弥生前期（大洞C2式～青木畠式）の土器が多く出土し、また少數ではあるが結髪土偶なども出土した。前回調査区からは、縄文晩期の土器は極微量出土の状況とは相反する。近隣に位置する遺跡の縄文晩期～弥生の土器出土状況を概観すると、白山上野遺跡は縄文晩期初頭～弥生前期（主体は晩期中葉）、川岸場I遺跡は晩期初頭（※後期末葉もある）～弥生前期（※主体は晩期前～末葉）、川岸場II遺跡は晩期全般と弥生前～中期（主体は晩期中葉、次いで後葉）まで出土している。出土土器を見る限り、上記遺跡と比較して本遺跡の消長性が短いことが窺える一方で、本地域全般に縄文晩期の遺物包含層を持つ遺跡が顕著にある。加

えて弥生前期の人的活動も示唆される。その反面、堅穴住居跡に限らず縄文晩期や弥生前期の遺構の検出事例は非常に少ないことも指摘できよう。

古代以降については、当該時期の指標テフラである十和田aテフラが旧河道1号の堆積土中から検出されたものの、今回の調査からは遺構は未検出で、遺物も極めて少量にあり、多くを言及できる状況ではない。

最後に、小林繁長遺跡の縄文中期に推定される空間を変えての移動行為や、縄文晩期～弥生前期における堅穴住居跡などの集落域の特定に直結する遺構の未検出の状況が看取された。特に、縄文晩期～弥生前期は、本地域全般に遺物包含層を得られている事例は顕著にあるものの、本遺跡と同様に集落域が不明の状況にあり、一つの未解明課題と思われ。様々な視点からの検討が必要であろう。今回の調査成果からは多くを言及できないが、調査で明らかとなった旧河道の存在や洪水などの自然災害との関係を視野に入れ検討することも、地域史解明の一つの糸口になると考えられる。

## 註

- 註1 細田遺跡はⅢa～Ⅲf層まで細分されているが（遺物量はⅢb～Ⅲe層に多い）、Ⅲb～Ⅲd層出土土器については深鉢形土器の完形個体が少なく、また報告書の記述を読む限りⅢe層出土土器が最も同時性を信頼できる資料と判断された。
- 註2 金附遺跡出土深鉢形土器の法量や法量の相関関係比は、報文の土器分群毎に行ったが、観察所見として若干の留意点を記述しておく。深鉢形土器の資料を見る限り、第Ⅱ群（大洞A'式古段階）と第Ⅲ群2類（青木畠式新段階、報告者は後に中神式新段階を提唱）の比較からは変化が窺える。しかしながら、第Ⅲ群2類と第Ⅳ群1類（谷起島式古段階）を比較する限り、見た目の印象だけでなく法量の相関関係比からも変化の違いを掴み難い土器が含まれている。具体的には、第Ⅲ群2類に分類されている2201と、第Ⅳ群1類の2425・3341の土器を比較すると、口頭部の無文帯の幅や胴部との境に横位沈線が引かれる属性、口頭部の立ち上がりや胴部上半の張り出し具合は同様相（車輪似性が極めて高い）にある。法量の相関関係比も、ほぼ同じ値（器高+底径や最大幅+器高などの比率は非常に近似する）を示すことから、これらは同時期（同じ土器型式）の資料の可能性も示唆される。ただし、同じ第Ⅲ群2類の中でも2164と上述の第Ⅳ群1類を比較した場合は、両群の違いを見い出せる。群を跨いで時期差を持つ土器と時期差を持たない土器が混在している可能性も考えられよう。
- 註3 訳密には大洞A2式など大洞A式の新段階が混在する土器群かもしれない。今回は筆者の大洞A2式期深鉢への知見が弱いこともあり、大洞A2式期と大洞A'式古段階の比較・検討は不十分にある。
- 註4 正立の状態で使用する場合は、埋設土器のように振り方を持って設置するなど、何らかの手段で固定する使用用途に依存する可能性が十分考えられる。
- 註5 金附遺跡では、第Ⅱ群から第Ⅳ群1類に進むにつれて口径や最大幅及び器高+底径の値が大きくなる傾向が認められる。つまり、大洞A'式古段階から谷起島式への変遷過程において、底径値はほとんど変化しないが、口径や器高は大型化する傾向で考えられよう。
- 註6 ただし、この測定年代を洪水の発生時期とするには検討を要する。

## 参考引用・文献

- 池谷信之：1988「東北地方における縄文時代中前期葉土器の変遷と後期土器の成立」『沼津市博物館紀要』12
- 樋村晃嗣：2008「門前式」「縄文続観」小林達雄編
- 今村啓爾：2006「大木6式土器の諸系統と変遷過程」『東京大学考古学研究室研究紀要』第20号 東京大学考古学研究室
- 金子昭彦：2004「結髪土偶と刺突文土偶の編年－東北地方北部における縄文時代晩期後葉の大型土偶－」『古代』第114号 早稲田大学考古学会
- 金子昭彦：2007「大洞A'式から青木畠式へ－岩手県金附遺跡からみた東北地方中部・縄文時代直後の土器型式－」『縄文時代』第18号 縄文時代文化研究会

- 金子昭彦：2008「岩手県の集成と諸問題」『弥生時代における砂浜式土器の諸問題』第6回海峽土器編年研究会  
熊谷正覚：1989「北上川中流域における大木8式土器」「岩手県立博物館研究報告」第7号　岩手県立博物館  
坂本真弓・杉野森淳子：1997「青森近県における陥し穴集成」「青森県埋蔵文化財センター研究紀要」第2号  
佐藤嘉広：1989「東北地方北部における弥生文化受容期の様相－北上川中流域の土器群の分析を中心に－」『岩手県立博物館  
研究報告』第7号　岩手県立博物館  
田村壯一：1986「陥し穴状遺構の形態と時期について」「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅱ」  
千葉正彦：2006『館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』Ⅵまとめと考察1 縄文時代（3）陥し穴状遺構　岩手縄文第497集  
永崎　豊：2000「東北地方北部の青木烟式土器」「研究紀要」第5号　青森県埋蔵文化財センター  
藤沼邦彦・岡根達人：2008「亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）」「縄文總覽」小林達雄編  
早川由紀夫：1983「十和田中撫テラの分布、粒度組成、年代」「火山」第2号第3集  
松田光太郎：2003「大木6式土器の変遷とその地域性－縄文時代前期末葉の東北地方中・南部の土器編年－」「神奈川考古」  
第39号　神奈川考古同人会  
森幸彦：2008「大木9・10式土器」「縄文總覽」小林達雄編

#### 〔報告書関連〕

- 財团法人山形県埋蔵文化財センター2003：『砂子田遺跡第2・3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第  
113集  
財团法人奥州市文化振興団奥州市埋蔵文化財センター2011：『合野遺跡・白山上野遺跡』岩手県奥州市埋蔵文化財調査センター  
調査報告書第11集  
二戸市埋蔵文化財センター2012：『中穴牛遺跡』二戸市埋蔵文化財センター調査報告書第11集  
〔財团法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター報告書など（発刊年順）〕  
1999：『細田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第283集  
2000：『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第317集  
2001：『南畠遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第349集  
2004：『船遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第432集  
2004：『長谷堂貝冢発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第434集  
2006：『金附遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集  
2008：『道上遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第518集  
2010：『合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第570集  
2013：『佐原Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第619集

# 写 真 図 版



小林繁長遺跡全景（上が東）



調査区中央部～南部全景（上が北）

写真図版 1　遺跡全景



調査区中央部全景



遺跡遠景

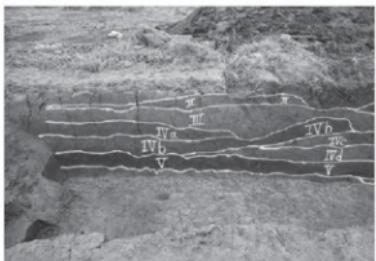


遺跡遠景



遺跡遠景

写真図版3 遺跡遠景



基本層序A断面（北から）



基本層序A断面（北西から）



⑩区旧河道 1号（北西から）



旧河道 2号B断面（南西から）



旧河道 2号C断面（南から）



旧河道 2号C断面（南西から）



旧河道 2号遺物出土状況（北西から）

#### 写真図版4 基本層序・旧河道



SI01竪穴住居跡全景（南東から）



SI01竪穴住居跡断面（南から）



SI01竪穴住居跡断面（南東から）

写真図版5 SI01竪穴住居跡（1）



SIO1竪穴住居跡炉（南東から）



SIO1竪穴住居跡炉断面（南から）



SIO1竪穴住居跡炉断面（南から）



SIO1竪穴住居跡炉断面（東から）



SIO1竪穴住居跡炉作業風景

写真図版6 SIO1竪穴住居跡（2）



SI02竪穴住居跡全景（南東から）



SI02竪穴住居跡断面（西から）



SI02竪穴住居跡断面（南から）

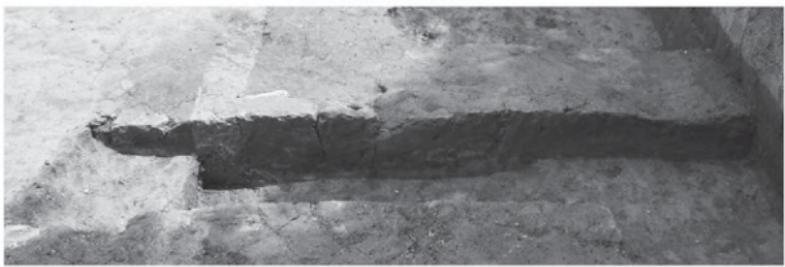
写真図版7 SI02竪穴住居跡



SI03竪穴住居跡（南西から）



SI03竪穴住居跡断面（西から）



SI03竪穴住居跡断面（南から）

写真図版 8 SI03竪穴住居跡（1）



SI03竪穴住居跡炉断面（北から）



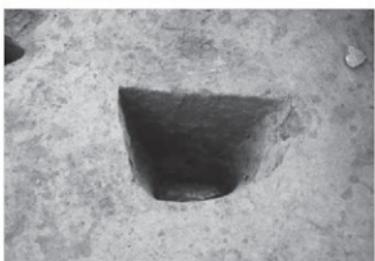
SI03竪穴住居跡炉断面（西から）



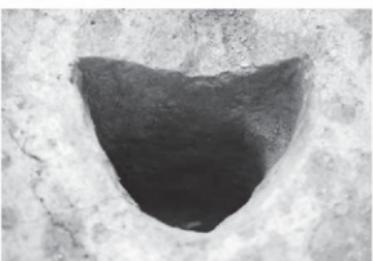
SI03竪穴住居跡炉完掘（南西から）



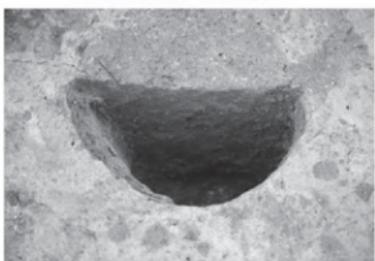
SI03竪穴住居跡炉作業風景



SI03竪穴住居跡PP1断面（南から）



SI03竪穴住居跡PP2断面（南から）



SI03竪穴住居跡PP3断面（南西から）



SI03竪穴住居跡PP4断面（南から）

写真図版9 SI03竪穴住居跡（2）



SI04竪穴住居跡完掘（南から）



SI04竪穴住居跡断面（南から）



SI04竪穴住居跡炉検出（南から）



SI04竪穴住居跡炉断面（西から）

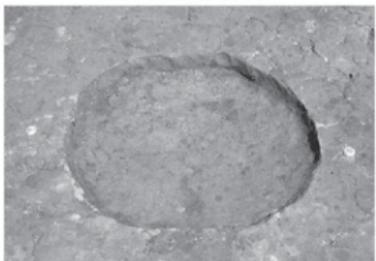
写真図版10 SI04竪穴住居跡



SK01土坑断面（南東から）



SK02土坑断面（西から）



SK05土坑断面（南から）



SK05土坑断面（南から）



SK06土坑断面（南から）



SK06土坑断面（南から）



SK07土坑断面（南から）



SK07土坑断面（南から）

写真図版11 SK01~02・05~07土坑



SK09土坑完掘（東から）



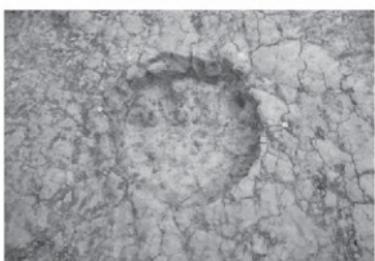
SK10土坑完掘（東から）



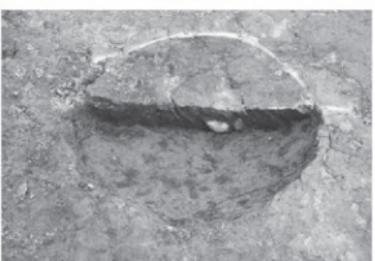
SK10土坑断面（西から）



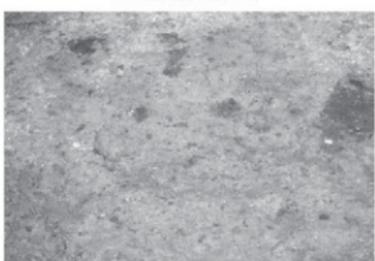
SK10作業風景



SK11土坑完掘（南から）



SK11土坑断面（南から）



SK12土坑完掘（南から）



SK13土坑断面（北から）



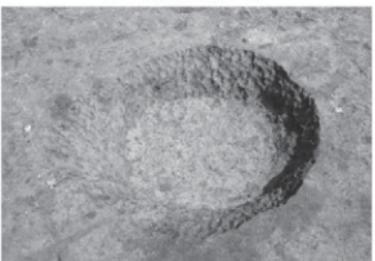
SK13 土坑 完掘 (北から)



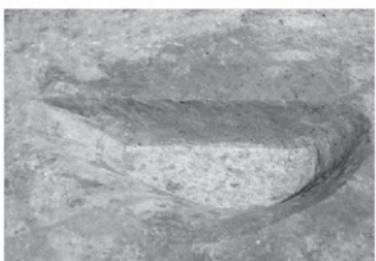
SK14 土坑 完掘 (南から)



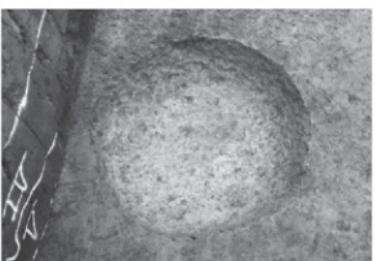
SK14 土坑 断面 (南から)



SK15 土坑 完掘 (南から)



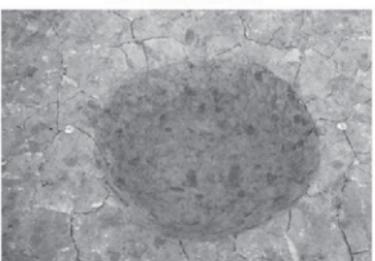
SK15 土坑 断面 (南から)



SK16 土坑 完掘 (南から)



SK16 土坑 断面 (南から)

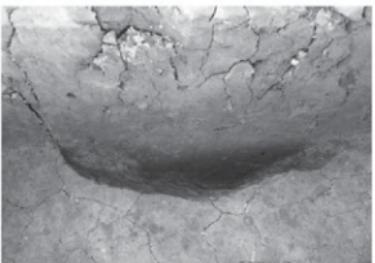


SK17 土坑 完掘 (南から)

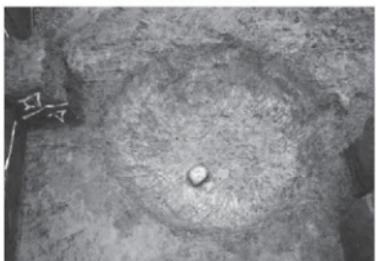
写真図版13 SK13~17土坑



SK17土坑断面（南から）



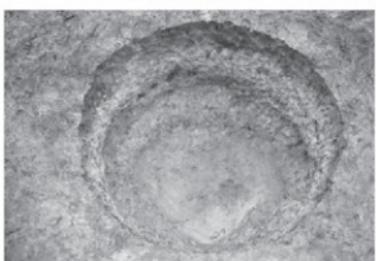
SK18土坑断面（東から）



SK19土坑断面（南から）



SK19土坑断面（南から）



SK20土坑断面（東から）



SK20土坑断面（東から）



SK21土坑断面（南から）



SK21土坑断面（南から）

写真図版14 SK17~21土坑



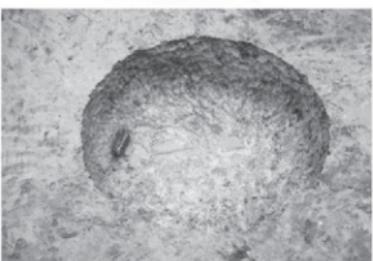
SK22土坑完掘 (南から)



SK22土坑断面 (西から)



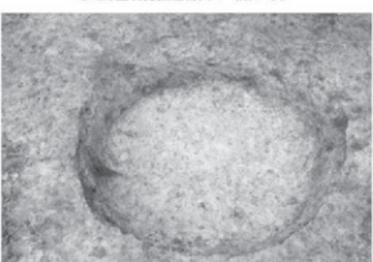
SK22火山灰棟出状況 (西から)



SK23土坑完掘遺物入り (東から)



SK23土坑断面 (東から)



SK24土坑完掘 (西から)



SK24土坑断面 (西から)



⑤区作業風景 (南から)

#### 写真図版15 SK22~24土坑



SN01焼土棲出（南東から）



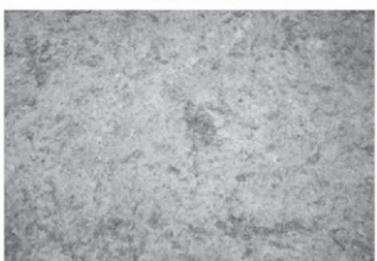
SN01焼土断面（東から）



SN02焼土棲出（東から）



SN02焼土断面（南東から）



SN05焼土棲出（南から）



SN05焼土断面（南から）



SR01埋設土器完振（東から）



SR01埋設土器棲出（俯瞰）



SU01集石平面 (南東から)



SU01集石断面 (北東から)



⑥区作業風景



⑤区作業風景



⑦区作業風景



現地公開風景

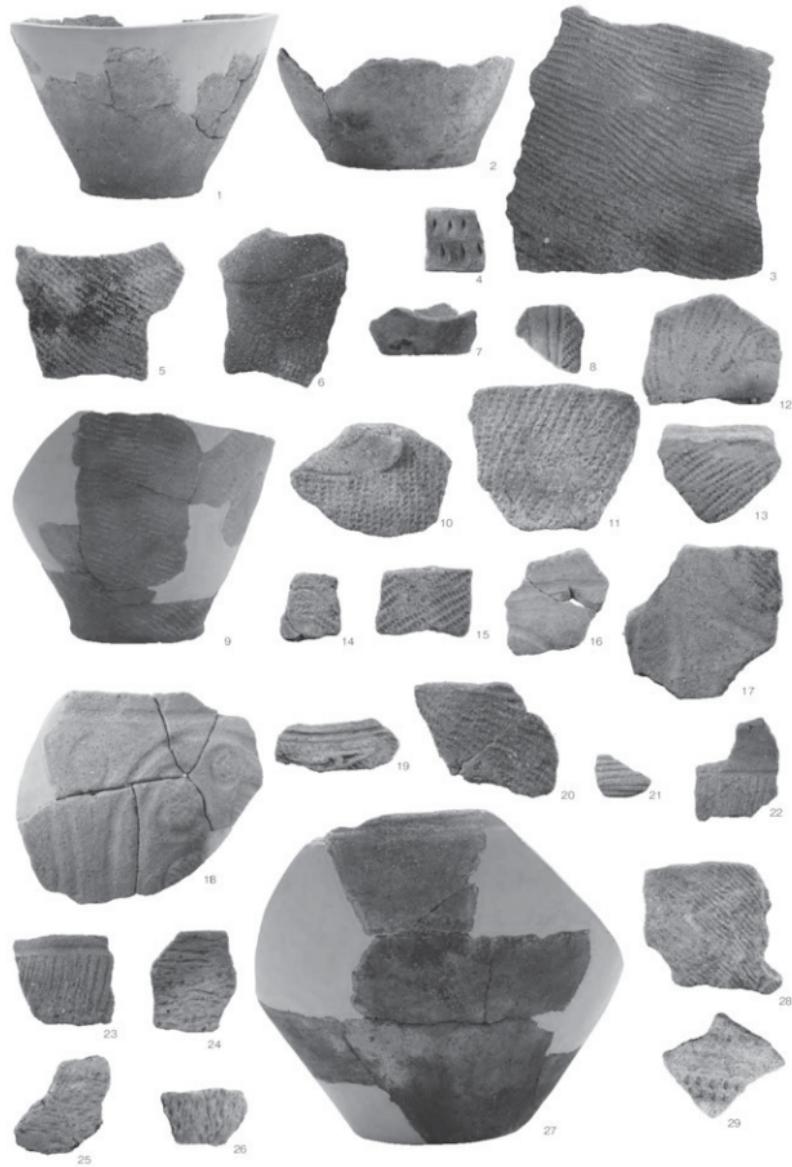


現地公開風景

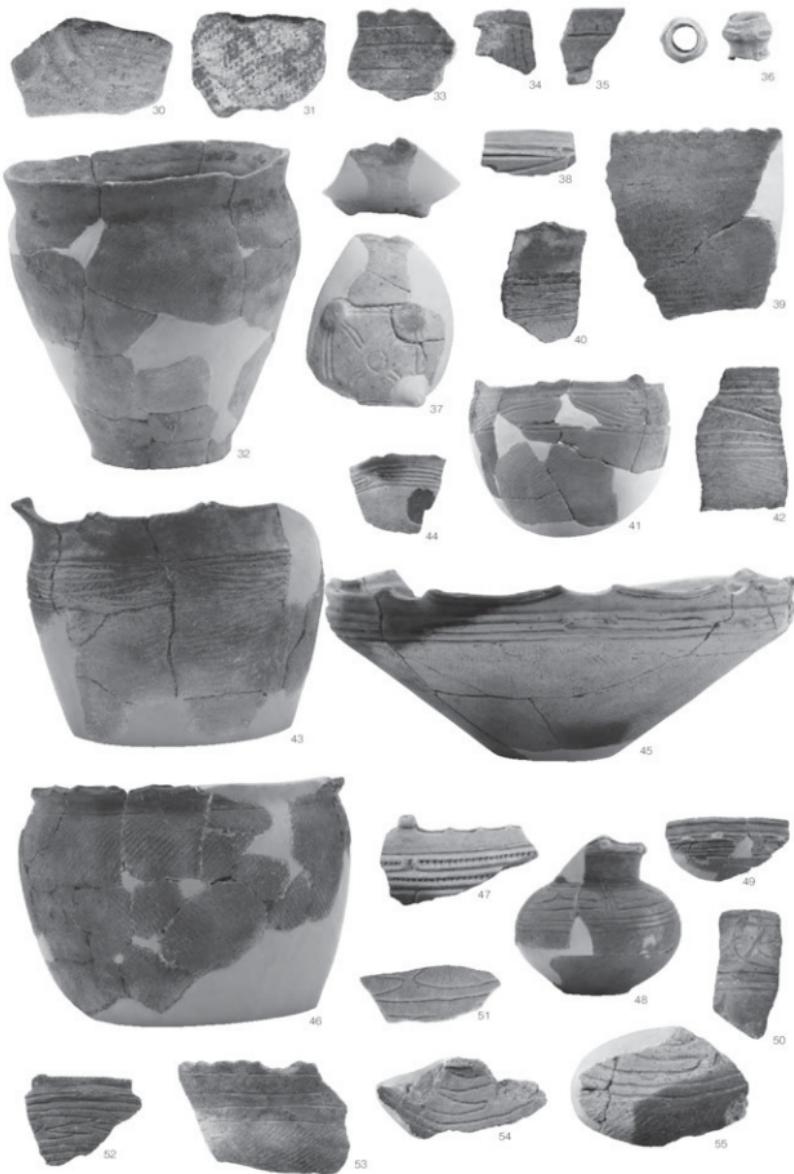


現地公開風景

#### 写真図版17 SU01集石・作業風景



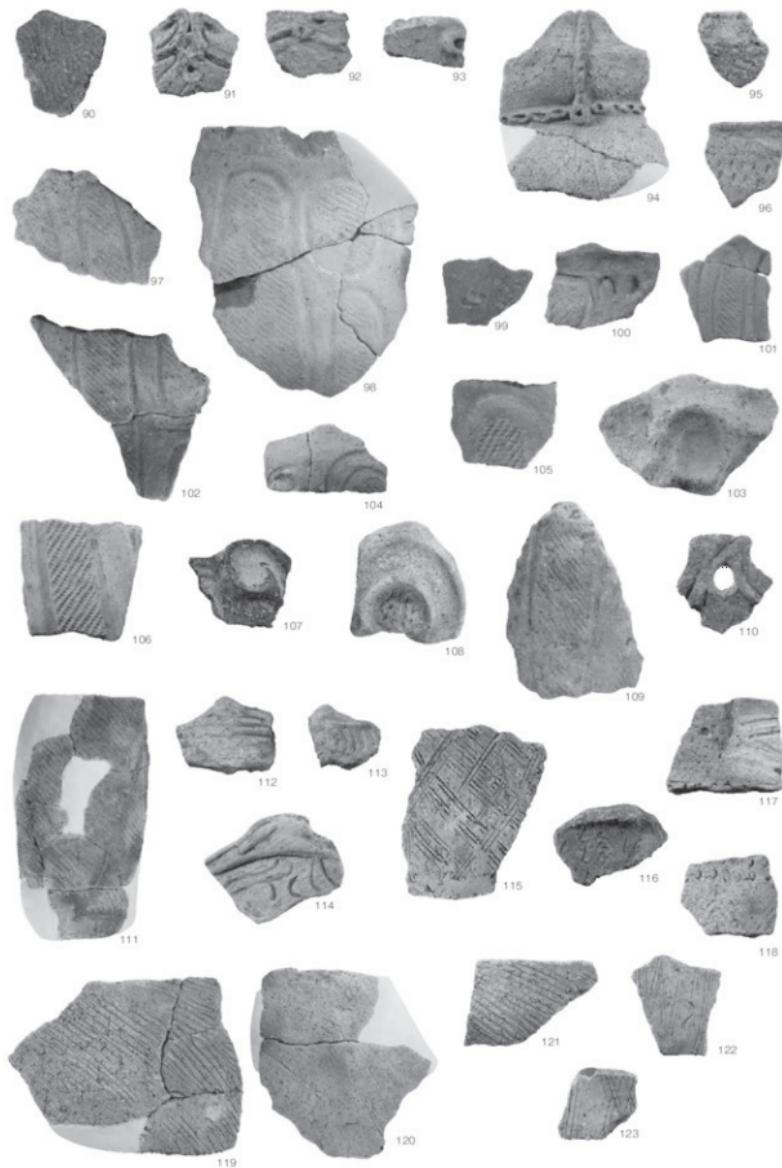
写真図版18 遺物1



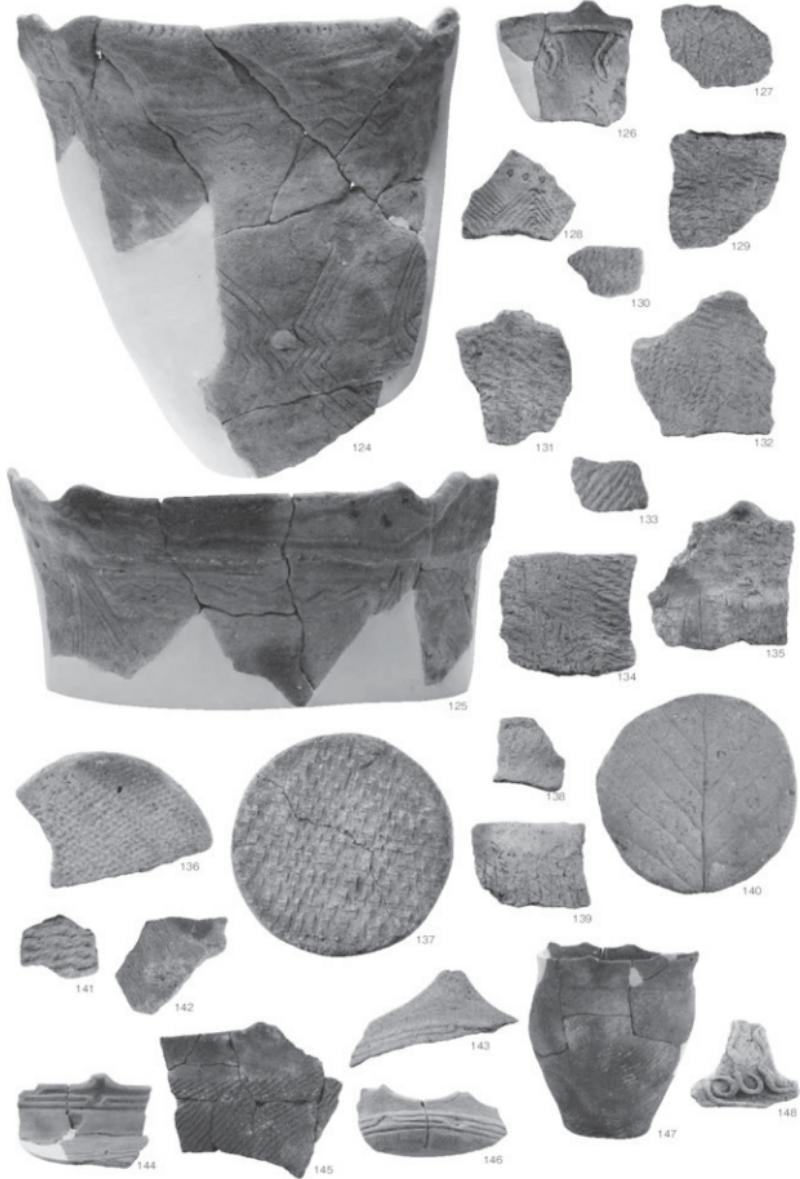
写真図版19 遺物2



写真図版20 遺物3



写真図版21 遺物4



写真図版22 遺物5



写真図版23 遺物6



174



175



176



177



179



178



182



180



181



183

写真図版24 遺物7



写真図版25 遺物8



写真図版26 遺物9



写真図版27 遺物10



257



258



259



260



261



262



263



264



265



写真図版29 遺物12



写真図版30 遺物13



307



308



309



310



311



312



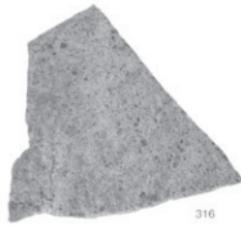
313



314



315



316



317

写真図版31 遺物14

## 報告書抄録

ふりがな	こばやしげながいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	小林繁長遺跡発掘調査報告書						
副書名	経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第628集						
編著者名	星雅之 村木敬 藤本玲子 佐藤奈津季						
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2014年3月13日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	***	***	***	***
小林繁長遺跡	岩手県奥州市前沢区白山地内	03382	NE47-1046	39度04分12秒	141度09分48秒	2012.07.17 ~ 2012.10.05	5,800m <sup>2</sup> (内確認調査区1,200m <sup>2</sup> )
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小林繁長遺跡	集落跡	縄文	堅穴住居跡 土坑 埋設土器 焼土 集石 柱穴状土坑 旧河道	4棟 21基 1基 3基 1基 108個 2条	縄文土器大16箱 弥生土器小コンテナ1箱 古代土器6点 陶器2点 石器類大コンテナ11箱、 土製品17点	縄文時代中期の集落。 縄文中期と晩期2枚の遺物 包含層。 洪水堆積層。	
要約	今回の調査では、縄文時代の居住域であることが明らかとなった。従来の成果によりに縄文中期の居住域が河道を挟んで東側へ延びることが明らかとなった。調査区中央に流れる河道には縄文時代前期～中期と、晩期～弥生にかけ包含層が認められており、周辺にそれらの居住域の存在が想定される。						

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第628集

**小林繁長遺跡発掘調査報告書**

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成26年3月5日

発 行 平成26年3月13日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電 話 (019) 638-9001

発 行 岩手県県南広域振興局農政部農村整備室  
〒023-1111 岩手県奥州市江刺区大通り7-13  
電 話 (0197) 35-8443

(公財)岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号  
電 話 (019) 654-2235

印 刷 株式会社 熊谷印刷  
〒020-0015 岩手県盛岡市本町通三丁目5番8号  
電 話 (019) 653-4151

---